

紀の名人録①

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートしてお知らせする広聴報告書です。

熊野大峰を 駈ける脚。

高木 亮英 Ryoei Takagi

平成13年ふるさと名人「紀の人」賞受賞。熊野の修験道研究の第一人者であり、熊野奥駈修行を自ら実践するとともに、一般参加者にも門戸を広げ、その奥深さを紹介。語り部として観光面でも地域に貢献している。青岸渡寺副住職。52歳。

「まち」には活力と共に「魅力」がなければならぬ。そして、その土地々々にどれほどの、人々の心を魅了するだけの「活力資源」が備わっているか。「まちづくり」の成否はその点にかかっていると懸念される。昨年、木村良樹和歌山県知事の提唱により創設された「紀の人賞」は、県内の各地域、さまざまな分野で活躍する「ふるさと名人」を顕彰し、「ひと」をとおして私たちが「ふるさと」を見つめ直そうとする素晴らしい事業であった。今回、「紀の名人録」では昨年「紀の人賞」を受賞された方々のなかから幾人かをピックアップして取材し、その魅力的な人物像について紹介した。

さて、まず第一回目の「紀の名人録」は、那智山青岸渡寺の副住職、高木亮英さんである。高木さんは熊野の修験道研究の第一人者であり、熊野奥駈（くまの・おくがけ）修行を自ら実践すると共に一般参加者にも門戸を広げ、その奥深さを紹介している。西国第一番観音霊場、那智山青岸渡寺、もとは熊野那智権現の如意輪堂であった古刹は明治の廃仏毀釈（はいぶつきやく）の嵐によつて独立。その後は青岸渡寺と称する。高木亮英師をお訪ねしたこの日はときおり天から雪のちりちりあいにの寒空で、寺のシンボルである朱の三重塔に霧がかかり、遠望の那智滝も心なしか寒々しく感じられた。

「はいいや、ええお天気がなりました」と、出会い頭に本堂でいきなり高木亮英師が声をかけてこられた。屈託のない笑顔、つややかな色の肌が少年のように上気してピンク色に輝いている。師の案内で場所を移してあらためてお話を聞く。「ぼくらはまあ、そもそも信仰のこと、熊野の歴史を語る場合、信仰を抜きにしては語れません。熊野信仰とはなぞぞやというところですが、熊野三山に対する信仰、本宮、新宮そして那智山と、熊野三山にはそれぞれ神が宿り、仏が祭られています。明治以降、神仏分離によつて、神社とお寺、神と仏は別々に分かれてしまいました。この地、熊野というところはもともと神仏一体の、たぐいまれなる霊場であったのです。また山岳宗教、なかでも修験道というのは「存在」とあり、後小角（えんのおつぐみ）を開祖とする仏教の一派ではありますが、その教えの中には仏教由来よりもっと古く、すでにこのあたり山麓で暮らす人々のなかに生まれ育っていた素朴な山岳信仰や神道、あるいは陰陽道、宿禰道、密教といったさまざまな古代の宗教が混合して出来上がっております。」

「まあ歴史的な解説はひとまず置くとして、そもそも修験道とは山に分け入って修行をする、山林抖擞（さんりんとくそう）が眼目、なによりの本懐なんです。山に分け入って山の大自然から霊験を受け、十界修行を積み、十のプロセスを経て仏となる。六根清浄（ろくこんじょうじょう）となって再びこの世に生まれ出るといふ、いわゆる撥死再生（きしさいせい）を願うものです。命がけなんですね」と、高木亮英師はおだやかに笑う。

「さきほどもお話いたしましたように、明治初年の神仏分離、廃仏毀釈という排斥運動さらには明治五年の修験道廃止令によつて熊野修験の奥駈はいったんここで途絶えてしまいました。それを先代の御住職、私の父親ですが、高木亮孝大僧正がなんとか復興したいと願っておりまして、父親が亡くなり、その翌年の昭和十三年から、その遺志を継ぎまして一六六年ぶりに私が修行することになりました。父の使ったタンスを開けてみるとその奥には鈴掛やら頭襟、引敷、螺結といった山伏の装束一式がきちんと取り揃えられておりました。と、お話を聞くと、

「この大峰奥駈修行には、七十五歳（なびき）の行場を熊野から吉野へ向かう天台系の順峰（じゅんぷ）と、吉野からこちら熊野へと向かう真言系の逆峰（ぎやくぶ）があります。すでに逆の峰入りは吉野の方で明治の遅い時期から行われておりましたが、本来の順峰が昭和六十三年に一念発起してやっと復活できたという次第です。このときは北ルートよりさらに険しい大峰南部をコースとする南奥駈だったのですが、当初、私を含めてわずか三名ではじめた大峰奥駈は、その後は回を重ねるごとに参加したいと興味を持ってくださる方も増え、

「昨年、は春秋一度の峰入りを合わせて延べ三八一人の皆さんが参加くださいました。」「なぜ奥駈修行に参加するのか、初めて参加する新客にとっては漠然としたものかも知れませんが、皆さん何らかの参加理由を持ってこられますよ。実際に厳しく苦しい修行に参加しての中で、自分の心の弱さや醜さを自覚し、自然の雄大さや聖なる領域に包まれることの清々しさを感じ、行中に世話を下さった奉行の方々の人格に感銘を受け、あるいは修行者の足跡を辿ることの意義を感得するなど、それぞれが何かを感じておられますよ」と、高木亮英師。

「一度の参加では理解できないものがあり、何度参加してもその都度、また新たなものを学び感じることが出来ます。もつこんな苦勞はたくさんだと、奥駈修行中に感じたとしても、満了したとき、また次回に参加したくなるよつな、表現しきれない感覚がムスムスと自分の中に生じてくる不思議さ、それが奥駈修行の醍醐味ではないでしょうか、やはりこれは実際に歩いた者にしか味わえませんよ」

「ぼくらはまあ、そもそも信仰のこと、熊野の歴史を語る場合、信仰を抜きにしては語れません。熊野信仰とはなぞぞやというところですが、熊野三山に対する信仰、本宮、新宮そして那智山と、熊野三山にはそれぞれ神が宿り、仏が祭られています。明治以降、神仏分離によつて、神社とお寺、神と仏は別々に分かれてしまいました。この地、熊野というところはもともと神仏一体の、たぐいまれなる霊場であったのです。また山岳宗教、なかでも修験道というのは「存在」とあり、後小角（えんのおつぐみ）を開祖とする仏教の一派ではありますが、その教えの中には仏教由来よりもっと古く、すでにこのあたり山麓で暮らす人々のなかに生まれ育っていた素朴な山岳信仰や神道、あるいは陰陽道、宿禰道、密教といったさまざまな古代の宗教が混合して出来上がっております。」

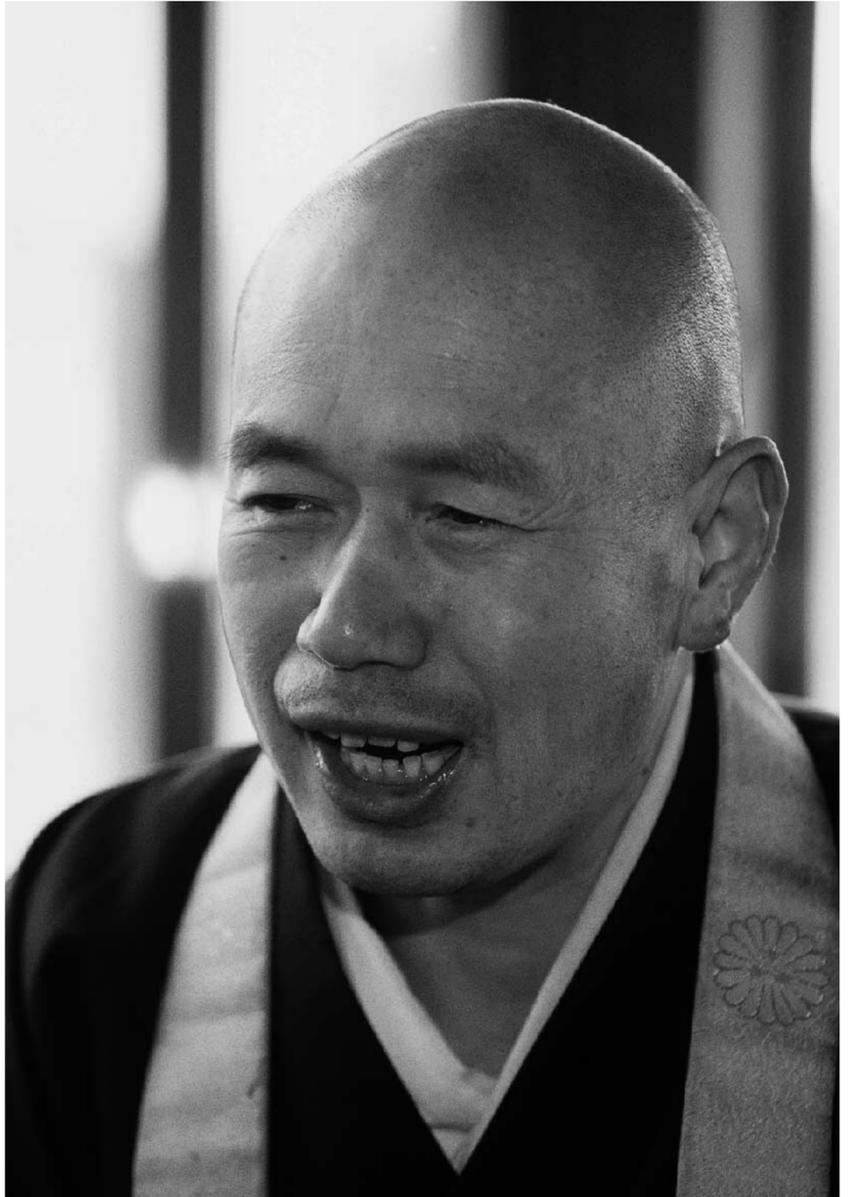
「さきほどもお話いたしましたように、明治初年の神仏分離、廃仏毀釈という排斥運動さらには明治五年の修験道廃止令によつて熊野修験の奥駈はいったんここで途絶えてしまいました。それを先代の御住職、私の父親ですが、高木亮孝大僧正がなんとか復興したいと願っておりまして、父親が亡くなり、その翌年の昭和十三年から、その遺志を継ぎまして一六六年ぶりに私が修行することになりました。父の使ったタンスを開けてみるとその奥には鈴掛やら頭襟、引敷、螺結といった山伏の装束一式がきちんと取り揃えられておりました。と、お話を聞くと、

「この大峰奥駈修行には、七十五歳（なびき）の行場を熊野から吉野へ向かう天台系の順峰（じゅんぷ）と、吉野からこちら熊野へと向かう真言系の逆峰（ぎやくぶ）があります。すでに逆の峰入りは吉野の方で明治の遅い時期から行われておりましたが、本来の順峰が昭和六十三年に一念発起してやっと復活できたという次第です。このときは北ルートよりさらに険しい大峰南部をコースとする南奥駈だったのですが、当初、私を含めてわずか三名ではじめた大峰奥駈は、その後は回を重ねるごとに参加したいと興味を持ってくださる方も増え、

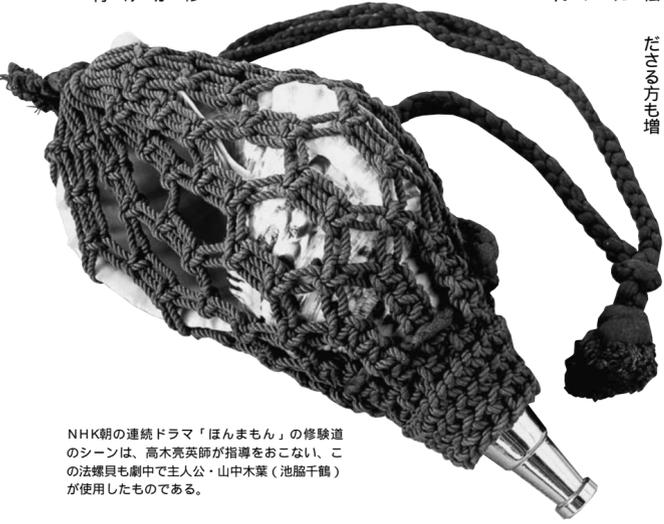
「昨年、は春秋一度の峰入りを合わせて延べ三八一人の皆さんが参加くださいました。」「なぜ奥駈修行に参加するのか、初めて参加する新客にとっては漠然としたものかも知れませんが、皆さん何らかの参加理由を持ってこられますよ。実際に厳しく苦しい修行に参加しての中で、自分の心の弱さや醜さを自覚し、自然の雄大さや聖なる領域に包まれることの清々しさを感じ、行中に世話を下さった奉行の方々の人格に感銘を受け、あるいは修行者の足跡を辿ることの意義を感得するなど、それぞれが何かを感じておられますよ」と、高木亮英師。

「一度の参加では理解できないものがあり、何度参加してもその都度、また新たなものを学び感じることが出来ます。もつこんな苦勞はたくさんだと、奥駈修行中に感じたとしても、満了したとき、また次回に参加したくなるよつな、表現しきれない感覚がムスムスと自分の中に生じてくる不思議さ、それが奥駈修行の醍醐味ではないでしょうか、やはりこれは実際に歩いた者にしか味わえませんよ」

「一度の参加では理解できないものがあり、何度参加してもその都度、また新たなものを学び感じることが出来ます。もつこんな苦勞はたくさんだと、奥駈修行中に感じたとしても、満了したとき、また次回に参加したくなるよつな、表現しきれない感覚がムスムスと自分の中に生じてくる不思議さ、それが奥駈修行の醍醐味ではないでしょうか、やはりこれは実際に歩いた者にしか味わえませんよ」



photographer/橋本 弘児



NHK朝の連続ドラマ「ほんまもん」の修験道のシーン、高木亮英師が指導をおこない、この法螺貝も劇中で主人公・山中木葉（池脇千鶴）が使用したものである。



那智勝浦町



那智勝浦町町長 中村 詔二郎 さん

木村良樹和歌山県知事の提唱によつて創設された「紀の人賞」に、那智山青岸渡寺副住職の高木亮英師が顕彰されたのは至極納得のいく出来事でした。那智山には熊野信仰の霊場として長い歴史があり、もともと那智の滝を中心とした神仏習合の大修験道場だったのですが、明治政府によつて、神仏習合を基盤にする修験道は禁止され、那智山青岸渡寺と熊野那智大社に分離しました。今も寺と神社は隣接して、双方を参拝する人も多い。青岸渡寺は、那智大社と並んで、いわば熊野の人間の精神の背骨をなすものであります。亮英氏は熊野・大峰奥駈修行を自ら身をもって体験され、真の修験道を現代に具現する数少ない人物であると認識しています。同時に、亮英氏は「熊野学シンポジウム」のパネリストとして「中国・インドの巡礼と熊野」について講演なさるなど、熊野学の理論家でもあります。この度、「紀の名人録」で亮英氏が紹介されますことは、ご同慶の至りでありませぬ。

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 那智勝浦町 那智勝浦町観光協会
- 那智勝浦町 那智勝浦町商工会
- 那智勝浦町 那智勝浦町水産振興会
- 那智勝浦町 那智山商店会
- 那智勝浦町 那智山青岸渡寺
- 那智勝浦町 国民年金健康保険センター くまのじ
- 那智勝浦町 那智かまほこセンター
- 那智勝浦町 那智勝浦ゴルフ倶楽部
- 那智勝浦町 I・B・W美容専門学校
- 那智勝浦町 アサヒビール
- 那智勝浦町 有田川温泉 鮎茶屋
- 那智勝浦町 御舞鶴門 沖(株)
- 那智勝浦町 フレッシュコミュニティ オンメ
- 那智勝浦町 オリエントホームズ(株)
- 那智勝浦町 看板ネオサインの (株)サイコー
- 那智勝浦町 おじいちゃん田舎づくり 三幸農園
- 那智勝浦町 外断熱の家 三幸建設(株)
- 那智勝浦町 (株)サンレックス
- 那智勝浦町 (株)島精機製作所
- 那智勝浦町 (株)テレビ和歌山
- 那智勝浦町 野村證券(株) 和歌山支店
- 那智勝浦町 ご舞鶴専門 (株)橋爪屋
- 那智勝浦町 紀井寺 はやし
- 那智勝浦町 (株)宮井新聞舗
- 那智勝浦町 本家 宮坂仏壇店
- 那智勝浦町 安田生命 和歌山支社
- 那智勝浦町 (株)和歌山印刷所
- 那智勝浦町 (株)和歌山放送
- 那智勝浦町 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 ②

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の名人録」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広報報告書です。

ほつごりりと語る和歌山。

吉住 喜美代 Kimiyo Yoshizumi

平成13年ふるさと名人「紀の名人」賞受賞。和歌山市語り部クラブのリーダー的存在。和歌山城、和歌浦、加太の歴史を熟知、万葉歌碑を得意とする。観光客への案内や地域公民館活動などで「和歌山」の歴史を語り続けている。78歳。

そのひとびと、ひとびとを待たず合わせの場所できちんと待っていてくださった。天守閣を間近に見上げる西の丸の駐車場。その横に建つ市観光協会事務局の2室。柔らかなオリーブワイトの毛糸のカーディガンが小柄ながらたよりに似合った。お話しがきで明るく笑う人柄の良さが全身にあふれている。すぐにインタビューは始まりました。

「私は生まれも育ちも市内でして、いまは吹上地区に住んでおりますが、祖父、父の代まではちょうど丸正のあたりの裏手あたりにおりました。幼い時から、徳川家を紀州さん紀州さんといふん聞いて育ちました。お城が私と子供の遊び場だったんですね。こ存じのよつに和歌山には歴史がいっぱいあります。私、和歌山が好きで好きで、語

り部にならしていただいたら、もっとお勉強して和歌山の歴史を覚えるんやないやろか。そんな安易な気持ちばかりはしめしたんです」と、吉住喜美代さんはいかにも楽しそうに肩をすくめてまた笑った。

「私、和歌山が好きで好きで、語らぶ、は文字どおり、市を訪れる観光客を対象に万葉と吉宗のふるさと和歌山市の歴史と文化、風土などを紹介して、観光客の方々に少しでも充実した旅を楽しんでもらおうと、平成1年、旅田卓宗市長の提唱ではじまった市民参加型のボランティアグループである。最初七名ではじまった語り部グループは現在登録メンバーが十五名。そのうちいつても出かけていける状態にあるという人は十人ほど。吉住さんはその語り部クラブ、最年長

で現役の第一期生である。「失敗もたくさんございまして、やはりはじめた最初のころ、和歌浦をご案内したときに不老橋の前で、向こうが名草山でございます。ここには万葉歌がひとつ残されているんですよ。名草山、名草山・・・と詠ったあとの、その次が出てきませんの、みなさん、みすみみませえん、ちよつとエンマ帳をとって内ポケットに忍ばせておいたメモ帳を取り出して広げて見たんですが、これが載ってません。みなさん、みすみませえん、エンマ帳にも載ってませえんといったら、わぁーという皆が笑ってくださった。」

「でもね、あまり歴史をコトコトとね、むずかしいことばかり聞いてくれませえん。できるだけわかりやすく、皆さんが厭さないように、ときにはユーモアも交えたりしながら楽しく聞いていただければ、ちよつとだけ覚えていただければ、それでええんやないでしょうか」と、吉住さん。



photographer/照井 四郎

まで波寄せる海であったという証しになります。ほかにまたとえば和歌山城の天守閣に昇ります。そこからすつと岡山から高松あたりまで見渡しながら、かつては「さつご」(城郭の西)が海で、こちら(城郭の東)は紀の川の本流が流れ込んでいたんですよ。あのあたりは吹上の浜といつて波打ち際だったんですよですよ、ですから砂山、広瀬、杭ノ瀬、中島といった地名が残っているんですよ。う風に吹かれています。ふうんとか鎖いって皆さん熱心に聞いてくださいます。」

「観光客ばかりでなく、最近では地元の方々も、お城を歩くときなどちよつと穴場をご案内します。たとえば天守閣の裏に、間道(かんどう)があります。いつ落城するかかわりませんから、お殿様の逃れるために又ヶ道をつつてあるわけやね。戦国時代に築かれたお城ですからね、この又ヶ道を下りていつて寺町をぬけ、堀止から船にのつて下津へ逃れるんですね。そんなことを聞いていただきます。そんなこといってご存知なんだよ、って感心してくださるんです。それとね、やはり天守閣の裏手の石垣に仏頭石がいつぱい挟まっているのをご存知でしょうか。秀吉が築いたこの石垣ね、根来を焼き討ちしたんですよ、太田城を水攻めにしたんですよ、そうやって攻め入つてこの地に城を築こうとしたこの石垣となる適当な石が少なくなつたとき、そこらになんぽでも転がっているやないかと秀吉は命じたんですよ。根来の石とか、仏さんの石、灯籠の石などを片っ端から石垣に詰め込んでいったんですね。えらいことやね、ですから蓮の花を彫りぬいた仏石が目の前にポンとあつたりしますよ。みなさん地元の方でもそんなところへお連れして紹介してあげると、はぁーってビックリなさいます」と、いたすらつぽくちをしながら目を細めて笑つた。



小旗・腕章・小型のハンドマイクが語り部さんの三点セット。これらを身に携えて吉住さんの楽しい歴史語りはいよいよ佳境に入る。



和歌山市



和歌山市長 旅田 卓宗 さん

吉住さんにおかれましては、平成13年のふるさと名人「紀の名人」賞の受賞、本当におめでたうございませう。受賞を契機に更に、研鑽されることを期待しております。

本市から受賞されたのは吉住さんが最初であり、この受賞は、語り部クラブの皆さん全員の日頃の地道な活動の成果が認められたものではないでしょうか。

語り部さんの活動によって、温暖な気候と豊かな自然や歴史文化に恵まれた和歌山市を、国内外から訪れた方々に紹介していただくことで、旅行者の心を癒していただき、本市のイメージを高めて頂いているものと思っております。

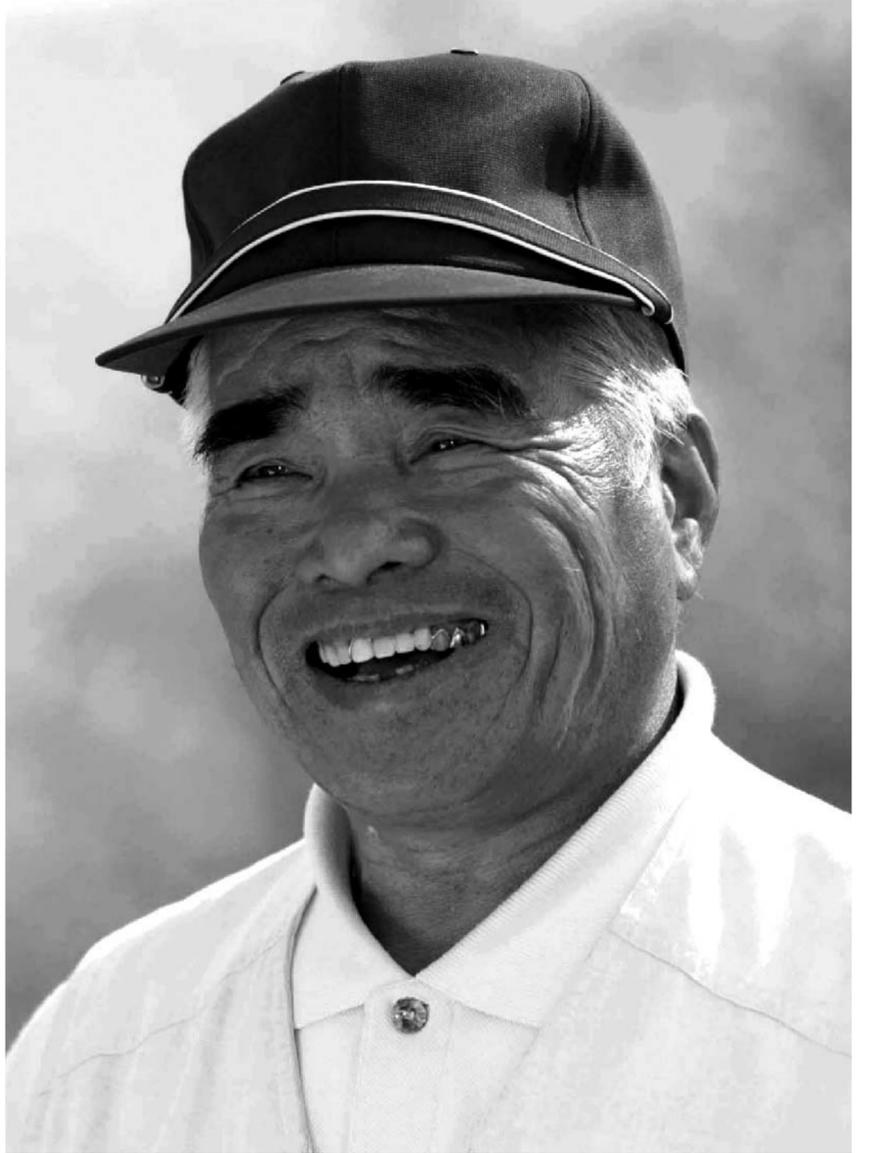
今、和歌山市は、「文化とロマン」と自然あふれるリラクゼーションのまち」を目指し、積極的にプロモーションしてあります。今後とも、市民と行政がソフトパワーを結集し、協働して和歌山市の再生に邁進する決意ですので、市民の皆さんのご理解ご協力をお願いいたします。

- わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します
- 和歌山市
 - 和歌山市観光協会
 - I・B・W美容専門学校
 - アサヒビール
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - 大阪ガス(株) 和歌山支社
 - 御舞臺専門 沖(株)
 - あなたの街の (株)オークワ
 - フレッシュミート オソメ
 - オリエントホームス(株)
 - 看板ネオサインの (株)サイコー
 - おいし、田舎っぺり 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設(株)
 - (株)サンレックス
 - (株)島精機製作所
 - (株)テレビ和歌山
 - 野村證券(株) 和歌山支店
 - ご舞臺専門 (株)橋爪屋
 - 紀三井寺 はやし
 - (株)宮井新聞舗
 - 本家 宮坂仏壇店
 - (有)宮本建築設計事務所
 - 安田生命 和歌山支社
 - (株)和歌山印刷所
 - (株)和歌山放送
 - 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 ③

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートしてお知らせする広聴報告書です。

縄なう あたたかな算。



photographer/増尾 寿彦

喜福 重一 Shigekazu Kifuku

平成13年ふるさと名人「紀の人」賞受賞。平成3年からボランティアで地元小学校などに対して自らその材料を提供し、しめ縄づくりを教え続けている。また、竹製品づくりなどを通じ、地域の世代間交流に努めている。70歳。

きっかけは、いまもいつしに暮らす孫の喜福利安さんが授業中に言い放った無邪気な一言から始まった。「先生、ぼくはこのおじいちゃん、ぼくらがまだ生まれてないときからずっとつくってるといって、ものすごい上手なやうで」。その当時、利安さんの通っていた上岩出小学校では五年生になると社会科の授業のなかで「農業と農家のくらし」について学習する。米づくり全般についてを学び、そのなかで「藁（わら）」とは何か、藁からどんなものがつくられるか、という課題が出てくるのだが、兼業農家の子弟も多かったこのあたりの生徒たちは近くの田圃でよく見かけた光景ではあっても、実際に藁を手にとった経験がなかった。

「あるとき孫の小学校から連絡があった。突然先生がうちにやってこられてましてね、ぜひ

生徒たちに藁を編（な）うってこしらえる縄づくりを教えてもらえんやろか、って頭さげられたんです。わしは自分（こ）や身内、知り合いにあげるために毎年、正月用のしめ縄はた

くさ（て）ておいてたから、ほんでも昔ほどこの家でもみな、自分でこで飾るしめ縄づくり、ききん（こ）ついで準備したもんよ。しかし教えるに年寄りもすいぶん少なくなつて、こ（こ）ついでこ（こ）で学校で教える授業も絶えてたよな。喜福重一さんがその依頼話を聞いたのが、いまから十一年前の平成三年の夏、「せつかく、利安がわしを推薦してくれてるんや。あの子の顔をみればすげにわいかに」と苦笑しながらも、いったん引き受けた以上、なに（こ）とに（こ）の材料のつめに奮走した。

「二〇〇人分と聞かされても、藁はなん

「どんな人口が増えて、当時、上岩出小学校の五年生だけでも二〇〇人からの生徒がいたからね。午前と午後の二回にわけて小学校の体育館で教えることになったんやけど、とてもわし一人では追いつかん。最近の学校の若い先生は縄すら編んだことないもんよ。それで近所と同じように農業をする仲間五人ほど呼びあつてね、彼らにはあらかじめ即席のしめ縄教室を開いて、わし流のしめ縄の作り方を伝授しておいた、という次第です。まったくのボランティアやったけど、ホンマみんなようやくしてくれて、全員で手分けして二〇〇名からいる体育館のフロアを、ひとかたまり（こ）に教えてまわつたな。」

「コンパインでザッと機械刈りした藁はまったく使えやん。バインダーを使ってわざわざ一束（こ）に束（こ）で別（こ）た藁を使う。それを天然乾燥させるために、ゆらゆら風で少し揺れるほどにホド良く束ねて左右に振り分け、脚をくんに立てかけた八サに引っかけ、ちやうど今日みたいな天気の良い日に十日間ほどたぶら天日乾燥させるんやいしよ。藁は先に米殻のついたものやない（と）あかん。茎の水分を米が吸って（こ）れて、やつと（こ）んな青々とした美しい藁が出来あがるんや。それと、しめ縄用のときはモチ米の藁を使う。米俵（こ）に使う米の藁とちがつて粘りがあつて（こ）うとき扱（こ）いやすいんやいしよ。」

「二〇〇人分と聞かされても、藁はなん



飾りものをつくる前の神棚用しめ縄。うらじろ、橙、串柿をのせ、紅白の紐で結いければ完成する。脚から出た藁の脚（ふさ）は、右から七・五・三と本数がきめられている。

とか用意できるくらいストックはあつたんやけど、さあ、藁を叩いて柔らかくするツチノコ（木槌）が生徒の人数分だけ要る。堅さや耐久性を考えて、ほんまはムクとかニレの木が最高なんやが、なんといつても急な（こ）や大量に（こ）い（こ）るんで、カシの木を山から切り出してきて、それを一本一本ノミで（こ）いで一五〇本ほど（こ）い（こ）るツチノコを（こ）らえたんや」と、喜福さん。

「雑働なハナシよ。ほやけど不思議や、えらいもんで、ツチノコもつたり、ノミもたせたらピタッとふるえが止まりよる。わしがつくったもんでも、みんなが喜んでくれるからね、ありがたいなあと思つたら、からだもシャンとするんやろな」と、目を細めて笑つた喜福さん。そんなおじいちゃん（こ）が大好きで尊敬もする、孫の利安さんは一年前に専門学校を卒業して、今は看護士となつて和歌山市内の総合病院で活躍されている。

喜福さんにおかれましては、平成13年ふるさと名人「紀の人」賞の受賞誠にありがとうございます。この受賞を契機として今後ますますのご活躍を期待しております。

わら細工を作り続ける理由を喜福さんは次のようにおっしゃっています。「みんなが喜んでくれるからね」。「自身のお身体を気遣いながらも地域のために活動される、そのボランティア精神に溢れたお人柄は、知事の提唱により創設された「紀の人賞」にふさわしいものと考えます。」

喜福さんが地域の学校に赴き、子ども達にわら細工を指導する活動は子ども達にとつて、昔のものや暮らしへの興味を引きつけ、郷土の歴史教育や世代間の交流に大きく役立っております。喜福さんの作品からは既成品には無い、手作りの良さが温かさが伝わってきます。

岩出町では、こ（こ）した地域の力を積極的にまちづくりに生かし、「活力あふれるまち、ふれあいのまち」を目指して取り組んでまいります。皆様方のご支援とご協力をよろしくお願いたします。

企画制作/和歌山毎日広告社

岩出町長 中芝 正幸 さん

岩出町

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

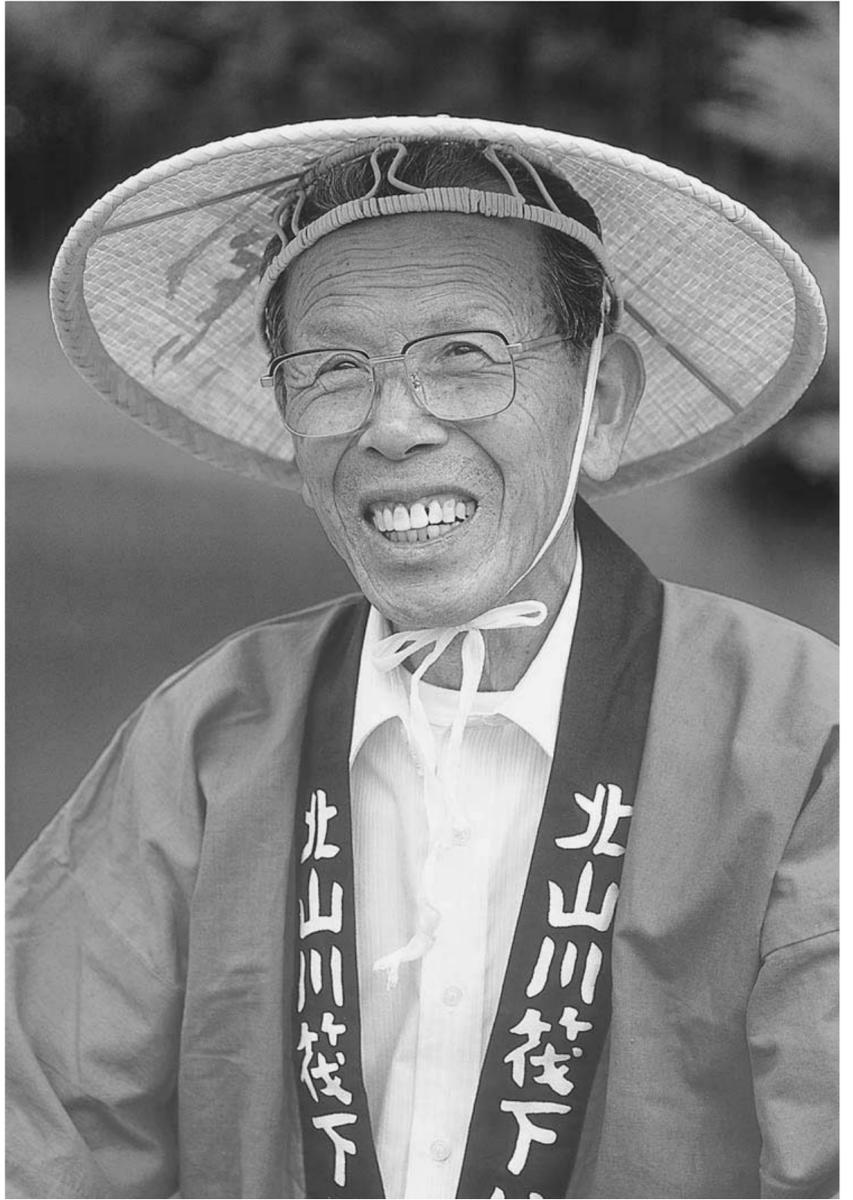
岩出町 岩出町観光協会
岩出町商工会
岩出印刷術

信頼のある安心のお店 (株)松源
I・B・W美容専門学校
アサヒパトリー アサヒビール
有田川温泉 鮎茶屋
御舞舞専門 沖(株)
あなたの街の (株)オークワ
フレッシュミート オソメ
オリエントホームズ(株)
看板ネオンサインの (株)サイコー
おじいちゃん、田舎っぺり 三幸農園
外断熱の家 三幸建設(株)
(株)サンレックス
(株)テレビ和歌山
野村證券(株) 和歌山支店
ご舞舞専門 (株)橋爪屋
紀三井寺 はやし
(株)宮井新聞舗
本家 宮坂仏壇店
安田生命 和歌山支社
(株)和歌山印刷所
(株)和歌山放送
和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録④

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートしてお知らせする広報報告書です。

荒瀬を下る 權さばき。



photographer/橋本 弘晃

福本 保 Tamotsu Fukumoto

昭和54年夏、北山川観光筏下りがスタート以来、自ら筏師として従事、筏師達の統率を図り、往年の技術をもって若手後継者の育成に努め、現役引退後も「筏名人」として地域の信頼を受ける。7歳。

北川を流れる日本屈指の大渓谷「瀧峡」そのさらに奥、奥瀬(おくせ)と呼ばれるところに北山村がある。総面積の約九八パーセントが山林、人口六百八人の小さな村で、周囲を三重県と奈良県に囲まれ、和歌山県のどの市町村とも隣接しない北山村は全国でも唯一の「飛び地の村」として知られている。また、人ひとこの村を「筏師の村」と呼ぶ。六百年の伝統を今に伝える北山村の筏がとくに有名になった理由の1つは、その權さばきの見事さである。かつて筏は木材運搬の手段であったが、今は「北山村観光筏下り」となって、人々を乗せ、瀬と淵の織りなす美しい渓谷をたつぷりと楽しませながら時間をか

けて下っていく。「こんにちわ」と、その筏名人、福本保さんは元気な声で部屋に入ってきた。グレンのスポーツ姿が若々しい。プロフィールを見ると昭和二年十月生まれで御年七十四才であるが、背筋がピンと伸びていて、身のこなしがいかにも軽やかである。「定年制が設けられてあつた。北山川の観光筏下りでの筏師は満七二になったときが定年やな。ぼくは高等科を出てからずっと筏師としてやってきたんで、ざっと六十年ちかくこの商売やってきたことになる。重いものを担ぐわけやなし、水のうえを下って行くだけなんでコツさえ呑み込めば自然と身体が

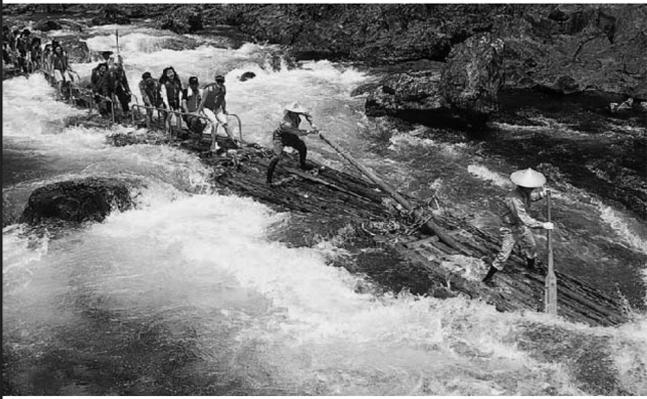
覚えてくる。年がいつてもできるもんよ。ほれ、クルマの運転といつしても、技術さえしつかり持ったつたら、たぶん九十まであつたら大丈夫やな。反対に年齢と関係なく、不器用やつたら無理やな。ま、そつじつに「やな」と、つやつやとツヤツヤに紅潮させた頬をホツとゆるめて楽しそうに笑つた。「景気のいいころは、北山川(熊野川支流)でも、まあ三百人からの筏師があつたそう。年間にはそれだけ下したわけや。戦前までは鴨緑江(おつりよ)と、中国東北部と朝鮮国境を流れる大川、というところまでわきわき出稼きに行つたよ。残念ながらぼくは行けてないやが、ぼくよりか二つくらい先輩は行つたよ。ここの川が大雨で増水して材木の出荷量が少なくなる梅雨から台風までの間の季節、さつと外地へ出かけて行つて、いざいざと荒瀬をきつて帰ってきたもんですよ。このあたりの筏師は日本と評判で、その腕は「でも高」買われてあつたから、そりや引つ張り「コやつたよな」。

「ずっと奥の、いちばん上流の上北山の河合(いっぺ)から新宮までがさつと百キロと、いつとさつとすわな。で、五十キロほど下ってきたのあたりに、かたい中間点やね。奥からハラして出てくるスギやヒノキの材木を土場所で筏にのせて、それを乗り継いで、乗り継いで、九日、十日ばかりかけて、新宮市の貯木場まで運ぶ。奈良の大台からここの木はせんが、北山川から熊野川へ流しつた

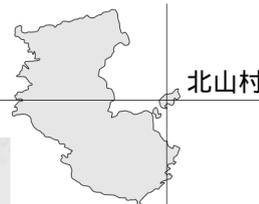
上流から流してきた奈良の筏は七色で受け継いで、そこから先は北山の筏師が乗り継いで、いったんよな。山の仕事のなかで、稼ぎも良かったし、職人気質というか、筏師はきつづがよかつたから、街へ繰り出してもよつとモチました。と、福本さんはあくまで若々しい。「このあたりは大沼、大井、下尾井など、各(り)に筏組合があつて、大きいところでも三十、四十人ほどはいたよ。ぼくは下尾井やつた。どんな職業でもみなそうやろつけど、筏師も一人前になるまではそりや厳しかったな。見習いのころは親方や兄貴分の先輩について毎日筏に乗つたもんですよ。まず弟子は八人に乗つたわ。うん、先乗りといつて、いちばん先端やね。親方はだいたい二番床で梶を取りもっている指図するわけや、こりや、右へ突つたわ、と、そこは左じゃ、とか、怒鳴つたわね。筏は勢いがついて流れとるんやさかい、合わせさつておつて、跳ねとられることもあつた。權はもつとむつかし、の、棹三年、權八年というが、一人前になるにはそれほどかかるといふことや。まあ、じつさいはもつと早く覚えたいやな」。

河口の新宮市までがさつと五十キロで、途中、切り立った岩場があつたり、川底に段差があつたりと、淵と淵の連続する急流を梶と梶を交互に使つて大切な材木を備つけずに巧みに下っていく。「狭もつて曲がりくねつた谷を鉄砲水で下るんやが、危のうないやうに、川にいろいろの手を入れたんやね。明治の四十年には川の大改修があつたと聞くけど、その後、折々、じゃまになる大石は割つてつた。ダイナマイトを使う人になつたのもあつたわの。いまは、お客さんを乗せて下るんやな。なおさら安全に徹底して川もよつとるね。それでも流れの急なところや、川筋が急に曲がたり、落差のきつた難所がいくつあつたよ。そのたびに水しぶきが高くあがるんで、けつこうスリルあつてお客さんたちも大喜びよ」。

昭和三十一年代の後半になって、筏で来えてきた北山村から筏流しの姿が消える。材木の輸送がトラックなど陸路に変わり、また、七色、小森といつたダムが熊野川水系上流につぎつぎと現れたためである。



企画制作/和歌山毎日広告社



北山村長 奥田 貢 さん

北山村の筏流しは六百年もの歴史をもちます。かつて、北山川の急流を梶と梶を巧みにさばき、筏を流す勇壮さは、北山筏師の本領といわれていました。しかし、時代の流れと共に材木の輸送はトラックでの陸路に変わつて、やがて北山川から筏師の姿も消えていきました。昭和54年、筏流しは日本唯一の観光筏下りとして復活します。「体験できる観光」として人気を呼び、年々観光客も増え、今では、村の夏の風物詩といわれるようになりました。今回の紙面にてご紹介された福本保氏は、村が地域振興の一環として力を入れて取り組んでおられます。観光筏下り事業で筏運行管理委員会の委員長として尽力いただいていると共に、郷土の誇る伝統筏下りの見事な技を次世代に残すためにも、その優秀な指導者として若手後継者の育成に甚大なお力をお借りしています。このたび、木村良樹和歌山県知事のご提唱によって創設された「紀の人賞」において福本氏が受賞されたことは、ご同慶の至りでございます。

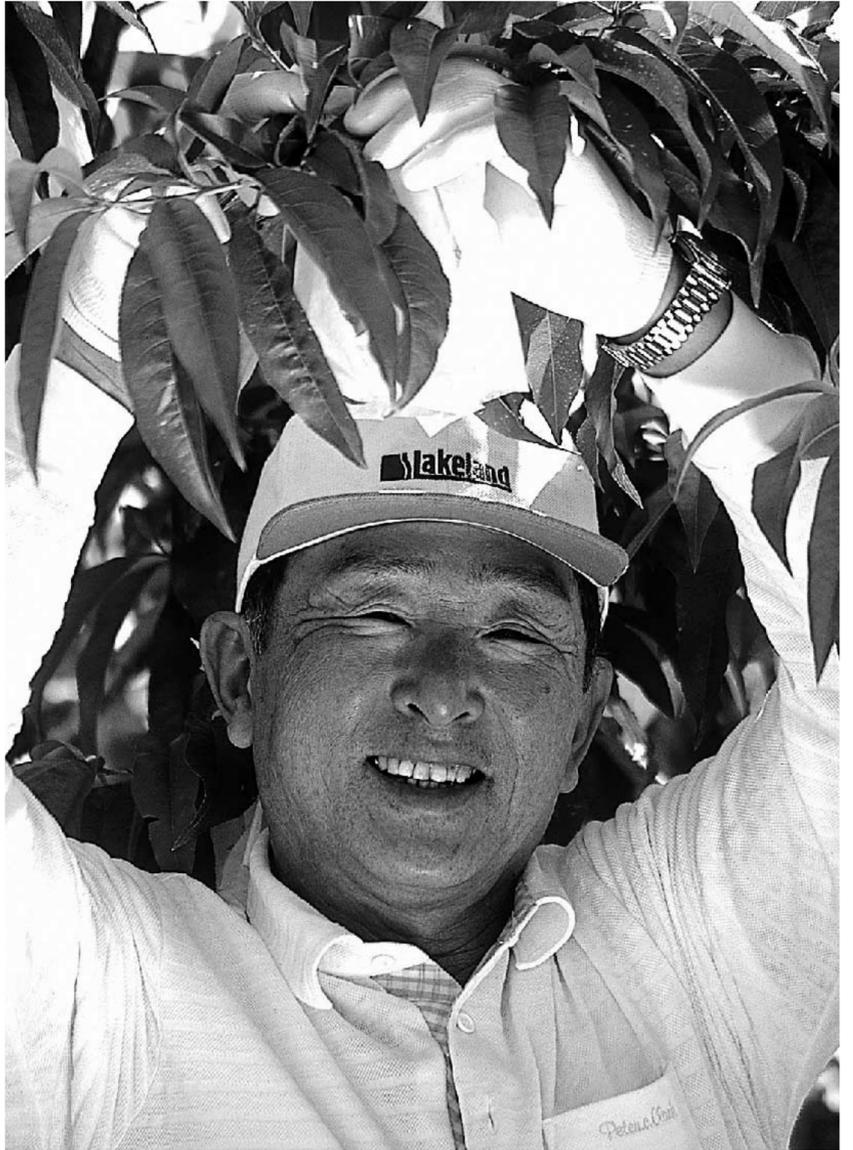
「そりや残念やつたけど、これも時代の流れやから仕方ないわな。そやけど、筏流しの技術だけはなんとか後世に伝えていかなアカンといつて、思いついたんが観光筏下りやつたやな。フリーをふくめて、現在は全部で十七名の筏師がこれにかつてついているんやが、そのうち七名は村が後継者として正式に採用した若い衆たちや。一期生はすでに五年たつてから、そりや權さばきも上手や。一床というか、ひと幅というか、四メートル材をだいたい七つほどつないで、つなげば三十メートルくらいになるんやが、つないごと水にあわせて下りよる。きつと師匠がええんやろな」と、福本さんは愉快そうに一層声高らかに笑つた。

- わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します
- 北山村
 - 北山村商工会
 - 北山村森林組合
 - みくまの農業協同組合
 - おくく温泉 さたやま
 - 筏の郷 旅館 東光荘
 - I・B・W美容専門学校
 - アサヒビール
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - 御舞踏専門 沖(株)
 - フレッシュミート オンメ
 - オリエントホームズ(株)
 - おじい田舎へっく 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設(株)
 - (株)サンレックス
 - (株)テレビ和歌山
 - 野村證券(株) 和歌山支店
 - ご葬儀専門 (株)橋爪屋
 - 紀三井寺 はやし
 - (株)宮井新聞舗
 - 本家 宮坂仏壇店
 - 安田生命 和歌山支社
 - (株)和歌山印刷所
 - (株)和歌山放送
 - 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 ⑤

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広聴報告書です。

桃の実、育ててる指先。



佐竹 博文 Hirofumi Satake
photographer/照井 四郎

「あら川の桃」作り農家として、永年にわたり高品質化と安定生産に取り組む。消費者ニーズを追求し続けるとともに、省力栽培技術の研究に取り組み、その普及、指導にも努めている。58歳。

桃づくりの名人ですね、と呼びかけると、「名人でね、僕はそんなやないよ」と少し困惑した表情を見せながら、佐竹さんは照れながら笑った。

「なにしろ自然相手やろ、失敗もよくあるんよ。雨が降ったら降ったなり、風が吹いたら吹いたなりに、桃という果物はほんまにデリケートな作物やからね。その日その日の天候によって具合が変わってきま。温暖化の影響なんやろか、こどもも一週間くらい早いんかな、なるべく同じパターンを守るようにしてるんやけど、こればかりは大気次第やからね。桃を育てるときは、僕は毎年一年生みたいな気分になるよ」と、佐竹さんはいう。

「消毒するにも最近ではみな機械でもあからね、もちろんスプレーや等々の省力機械も使ってますよ。ほかに木の間をあけて作業道を広くとったり、枝を引っぱって桃の木のカチを低く整えたりもする。脚立など使わなくても、作業のしやすいようにするんやな。桃の木はほつといたら高く伸びよるから、樹間の内部まで自然と光が入ってきて、枝や葉っぱにお陽さんがよくあたる。陽が当たれば、ええ桃ができる。できたときはええんよ、嬉しいけどな。そまていくんがひと苦勞やね、それでも収穫時はみんな手でせなあかん。生まれたての赤子みたいに、桃の薄皮といつのは柔かいからね、間違っても傷つけたりせんように、一こつ一こつ丁寧に熟度を確かめながら取っていくんよな」と、実際に目の前で桃の実を摘みとるその光景を思い浮かべながら、佐竹さんは遠く目を細めた。

「僕んところはね、白鳳と清水（清水白桃）、川中島（川中島白桃）、八幡（八幡白鳳）、それと日川（日川白鳳）の五品種をつくる。六月の後半から早生の桃の収穫がいよいよ始まるんやが、まず日川・八幡があつて七月のアタマから白鳳、清水、川中島と主力品種が続く。八月の中頃まで、ほぼ一ヶ月間は大層忙しいな。収穫するタイミングがぴったりむすかしんよ、桃は、早すぎるや味がよくない、遅くなつたら柔かくなつて出荷できんからね。ほんの一日、二日の違いで風味が変わってきまよ。そやから相詰りめなど選果場での取り扱ひも、そりゃみんな神経使うわな。このあたりの地区はとくに、昔から、あら川の桃、いって桃づくりの土壌に恵まれてるんやいしよ。僕は他の果実がつかつたことないんやけど、恵まれた土地で恵まれたものをつくる、これ以上恵まれたことはないわな」

桃山町北部の紀ノ川沿い一帯は開花期には一目十本といわれるくらい、もの凄いくらいのピンク色をした桃の花が、音に咲く。そして夏、収穫時期になると今度は町中に独特の甘い果実の匂いを漂わせるようになる。桃源郷一目十本の桃の花としてこの地域は昨年環境省の選定する「かおり風景百選」にも認定された。

「なにせよ認められるといつては嬉しいことやね。僕は毎年、先輩が培ってきた「あら川の桃」をしっかりと守っていくだけよ。後継者といつてことになるとね、この地区でも高齢化が進んでムスカシイ問題もあるんやが、ひとり自分トコといふんやなしに、農協や町、農家の上の人らとも、よう連携をとり合ひながら、これからはもっと大きな視野から桃栽培の振興を考えた方がいいかなあかん。二年ほど前かな、ちょうどいま時分やつたが桃の全国大会というのが桃山町で開催されたことあつてね、他府県の人が大勢うちにも見にいられて、いろいろアドバイスをもらたりもしたんよ。そやけど、土地柄によってその栽培方法はぜんぜん違つたらね。僕らには僕らのやり方があんのよな。関西方面で、あら川の桃、いつたらトップブランドやからね、お中元なんかでも人気商品やわな。でもよ、ブランドなんちゅうもんは、何とかがひとたびあれば一日で消えるもんは、消費者の目は厳しいからね。マスかつたらすくなく名前も落ちる。恐いもんよ。こつちにもブランドあるさかいね、そやから出荷のときになつて、こんなモン出したらあかん笑われるからつて棄てるんも、あるある」と、笑いながら淡々と話してくれる佐竹さんの言葉にはかえつて凄みさえ感じられた。

「桃といつ果物は手間ひまかかるんよ。冬場の剪定がまずポイントでね、その良し悪しによつて樹全体が強くなつたり、ダメにしてしまつたりするんよな。樹が元気な状態を保ち、甘くて美味しい桃をつくらせるためにはね、肥料の研究も大事やな。うちは化学肥料は一切使つてないな。ぜんぶ配合肥料や土や樹の状態によつて、タイミングとか量の加減もあるんやけど、それでも空梅雨のときは肥料が効かん、逆に長雨になつても困る。梅雨は早う明けたほうが糖度がアップして美味しくなるんやけど、それが前にくるか後になるかによつて、味はぜんぜん変わつてきまよ。糖度は桃の生命やからね。毎日毎日、天気予報がいちはん気になるな。整枝して日当たりを良くしたり、畝をこしらえて自然と雨水が流れ出るよう、日当たりと作地の排水には十分気を付けてるよ」

天候不順とその後強風雨の影響もあつて三、四年前には、せん孔細菌病といつて感染症が発生して一音に広がるとくに強風の受けやすい砂地帯にある紀ノ川沿いの農園はかなりの被害を被つた。

「去年、一昨年は被害なかつたけど、あの時はマイッタンな。町のほうでも防風ネット設置に對する補助事業を実施してくれて、

て、なんとかく止めるようにした。僕は桃つて四十年になるが、ムスカシイな奥が深いよ。これからの抱負つて、これからはも味よ、味一筋よ、十つけたら十とね味のええ実ができるよう努力してらんやけど、天成りには美味いにまよつてるやろ、そやけど日陰になる下部の実もそれと負けんくらい美味しうしたいんよ。お陰さんでうちは娘婿がこの仕事を継いでくれて大助かりなんよ、光洋（ミツヒロ）いふんやが、この男はなによりまじめでね、飲み込みも早くて研究熱心で、いろいろ聞いてきくれる。ああしよつかつたはつたがええで、日が暮れて暗くなるまで畑と一緒に作業しながら、この娘婿と桃づくりについてあやこつと話してるときが、僕はいちばん幸せなんよ」

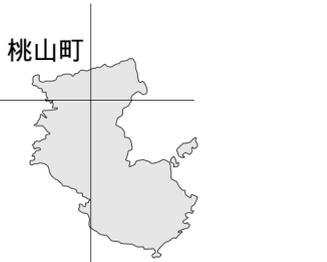
この度佐竹さんにおかれては、桃づくりの名人として、平成13年ふるさと名人「紀の人賞」を受賞され誠にありがとうございます。

佐竹さんは桃づくり40年のベテランであります。僕は毎年一年生とおっしゃるように、桃づくりには大変奥深いものがあります。桃づくりに取り組むその謙虚な姿勢が、全国的に高い評価を得ている「あら川の桃」のブランドを支える強い力であると尊敬の念を感じてやみません。

幸いにも佐竹さんには研究熱心な後継者もできたといつてお聞きして、その質の高い桃づくりが引き継がれていくことに大いに期待を寄せているところでありませぬ。

町といたしまして、平成13年度において、あら川の桃振興協議会（現在会員数約六百名）を組織し、消費者の方々に喜んでいただける桃づくりとなるブランドの確立に向けて努力してまいります。皆様方のご支援と協力をよろしくお願ひします。

企画制作／桃和歌山毎日広告社



桃山町長 山下 忠男 さん



「去年、一昨年は被害なかつたけど、あの時はマイッタンな。町のほうでも防風ネット設置に對する補助事業を実施してくれて、

- 紀三井寺 はやし
- 野村證券(株) 和歌山支店
- 宮坂仏壇店
- 安田生命 和歌山支社
- 桃和歌山印刷所
- 桃和歌山放送
- 和歌山ヤナセ(株)

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 桃山町 農興課 桃山町植木組合
- 紀の里農業協同組合
- 津田肥料店
- ニシコードンボール(株)
- 林工業所
- ◎選果場
- 有山田電業社
- I・B・W美容専門学校
- アサヒビール
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 御舞儀専門 沖(株)
- あなたの街の (株)オークワ
- フレッシュミート オソメ
- オリエントホームズ(株)
- おいと、田舎っぺ 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設(株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券(株) 和歌山支店
- 宮坂仏壇店
- 安田生命 和歌山支社
- 桃和歌山印刷所
- 桃和歌山放送
- 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういつたひとと活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広聴報告書です。

てす 手漉き紙を漉く、その目。



photographer/照井 四郎

栗林 つね代 Tsuneyo Kuribayashi
古くから紙すきの技術をもち、昭和54年の高齢者生産活動センター開所を機に、和紙（保田紙）の復興に尽くす。町内外での紙すき体験指導や後継者の育成等にも力を入れる保田紙づくりの第一人者である。76歳。

その人は、いつものように、いつもの手順で紙をすいていた。町役場をひと坂見下ろして建つ「高齢者生産活動センター」の一角に設けられた作業場。大きなガラス窓からは、気持ちよく日が射し込んでくる。紙すきの手をこめて、濡れた手をぬぐいながら、栗林さんはお話ししてくれた。

「いま、これは東京のほうに行く和紙をすいてるところです。襖の下紙にするんやせうで、ちよっと厚手の和紙に仕上げると、センター長さんからいわれてます。そうやね、いそがしいよ。毎日の注文に追いつかんほどやね。襖の下紙なんぞで和紙つかうやなくて、私の若い時分には思ってもみなかったけど、近ごろはまた、和紙の良さがいらんところまで見直されているようで、ええこと（が）二人、私らの後継者としてついてくれ

てます。いまのところ、紙をすくのは、私も一人、ここにおいで、和田さんの他にはおらんやけど、ときどき鈴木さんがすいてくれることもあります。彼女、なかなかええ案配です。それでもね、機械やないから、厚手の薄いのと細かな注文に、まんべんなくそれにあわせて、びっちり均等にすくのって、やっぱりその加減がむずかしいわな。ここに来させてもらうと、私も二十一年からになりますけど、紙って、簡単なようにみえて、なかなかムズかしいもんですよ、思っちゃうなあ」

「このへんでは、保田紙やすだがみといつてます。清水町は、もともと和紙づくりの盛んなところで、昔は、たいがいの家では、紙すきで食べてましたよ。この家にも、紙すきの道具が揃えてあったから、私も子供の時分に、うちの母親から一通りのこと教えられたんですけど、嫁いだ先にも道具ありましたが、ちよっとの間、結婚してからも、番傘などに和紙を使ってくれる職人もいなくなつた。昔は、束にして売ってましたからね。海南から、買い付けにきてた仲買さんも来なくなつて、いつしか紙すきやる人もいなくなりました。大水の影響も大きかった。私も子育てに追われて、やらなくなりました。カチ大木、竹で編んだ入簀といつた紙すきの道具は、土佐の高知で作られたもので、なかなか高価なもんですよ、このセンタ



江戸初期にその起源をもつ、保田紙。その手すきの技術は高い。すいた紙はその用途に合わせて、何枚にも重ね合わせ、天日干しにして乾かす。

「それ、骨の折れる仕事や、つらいと思つこともあつたけど、いまは楽しいよ。小学校の生徒さんが社会見学でやってくるのがあって、可愛い顔して、熱心に私たちの作業ぶりを見てます。体験で紙すきさせてあげるんやが、子ども、ちゃんと上手にやまいるとすくよ。紙すきのコツは、カチを持つて、きしわがでんよう、ちゃんと立てるんやけど、女の子のほうは上手やね。それで、子どもさんらが私たちの仕事に興味もつて、いろいろ聞いてくれるの、ほんま嬉しいわな」と、栗林さんは満面に可愛い笑顔を見せた。



清水町長 田中 捷之 さん

この度、栗林つね代さんにおかれましては和紙漉きの名人として、平成13年ふるさと名人「紀の人賞」を受賞され誠にありがとうございます。

保田和紙は江戸時代初期（一六五八年）山保田組大庄屋となつた三田村の笠松左大夫が徳川御三家、紀州初代藩主、徳川頼宣公の命を受け大和吉野地方にてその技術を修得し生産を開始して以来清水町の主産業として伝承されてきました。しかし、戦後洋紙の使用が盛んになったことによりその販路も狭められてきたつれ、昭和二十八年の大水害で漉き屋等が大打撃を受け、その生産は徐々に衰退していきました。

失われて行く当地の名産技術を後世に伝承することも町の活性化に資するため、さらに高齢者の生き甲斐対策の一環として、清水町では昭和五十四年に町高齢者生産活動センターを建て「保田和紙」を復活しました。栗林さんはその当時から長年に亘り保田和紙の復興に尽くされ、現在も元気に紙漉き体験の指導や後継者の育成に御尽力いただいております。町にとっては特別な方でございます。

企画制作／和歌山毎日広告社

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

清水町

清水町観光協会

清水町教育委員会

清水町ふるさと開発公社

清水町福祉協働事務所 あらぎの里

戸上組

なかむら内科クリニック

I・B・W美容専門学校

アサヒビール

有田川温泉 鮎茶屋

御舞儀専門 沖(株)

フレッシュミート オソメ

オリエントホームズ(株)

おいさ、田舎づくり 三幸農園

外断熱の家 三幸建設(株)

(株)サンレックス

(株)島精機製作所

(株)テレビ和歌山

野村證券(株) 和歌山支店

ご舞儀専門 (株)橋爪屋

紀三井寺 はやし

(株)宮井新聞舗

本家 宮坂仏壇店

安田生命 和歌山支社

(株)和歌山印刷所

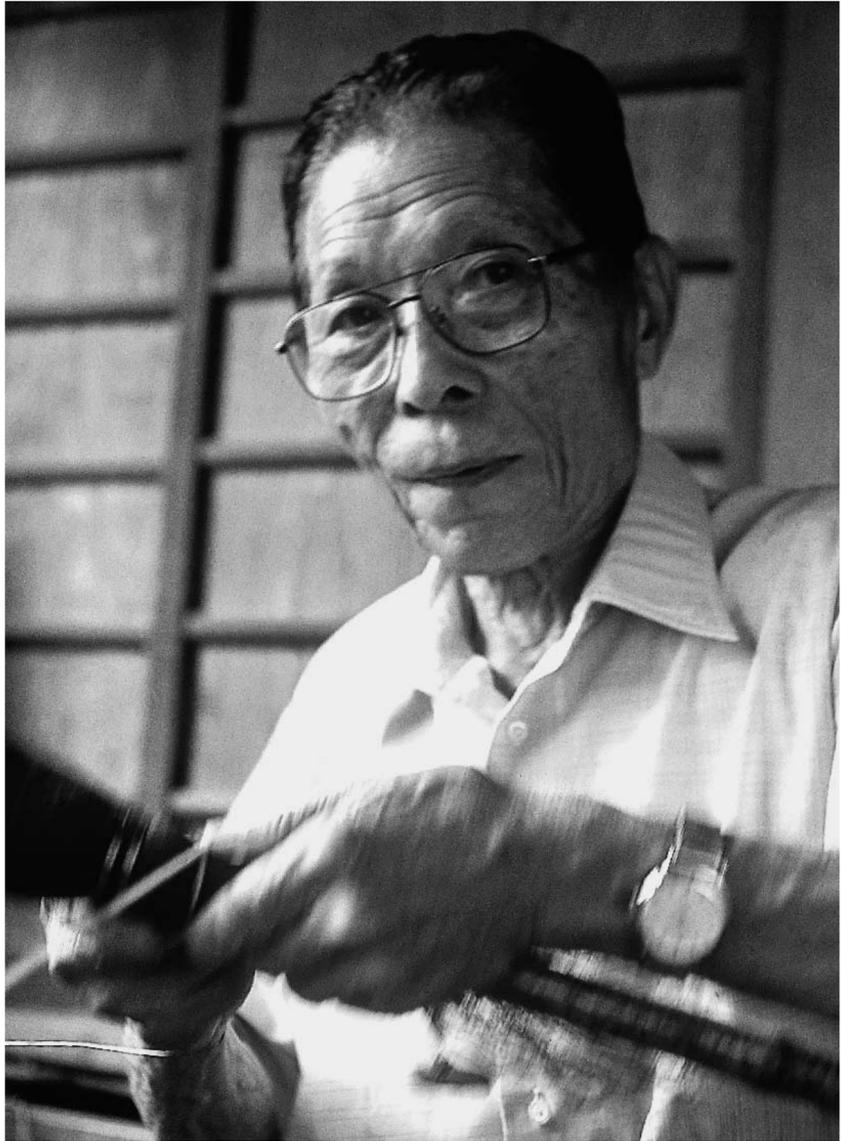
(株)和歌山放送

和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 ⑦

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートしてお知らせする広報報告書です。

熊野に魅せられ 語る色々。



photographer 照井 四郎

桑添 勇雄 isao Kuwazoe
シュロ皮の太い繊維の鬼毛を選出し、手作業の熟練した高度な技術による帚をつくり続ける。耐久性にも優れており、高い評価を受けている。また、技術の公開や製品の紹介等も行っている。7歳。

その一瞬、それまで柔和だった桑添さんの目つきが、一気に鋭くなった。撮影だからと断りを入れ、いつもの作業場でシュロの樹皮をまとめて束ね、玉を一つだけ写真撮影用に撮らせてもらいました。

「さう、内地産のええ皮がありませんのや。さきに話したように、これは中国産のシュロですけれど、なんぼええもんいって注文して、」コシがチがつ、ツヤがチがつ、粘りがチがつ、やっぱり内地のモンには勝てませんわ、親父がシュロでロープをつくっていた関係で、終戦後は一時、私もロープをちぎりましたけれど、すべし(ぼん)き(ぼん)き

「これ、これ、編むのと同じく、材料選びに時間がかかりますよ」と、ご自分の放つ飛び飛びの質問に、その人柄と同じく実直に回答して下さりながら、けして手を休めない。そして目が、仕事師のそれだ。

「鬼毛は昔も高かったけれど、今ではシュロ自体の生産が少なくなりましたので、なかなか手に入りづらくなっています。しかしこの鬼毛だけを使っている帚は最高やね。この前も、このテレビに映っただけやのに、あの番組で紹介されたのと同じ商品をゆずって貰えないかと、さる京都の老舗料亭から、すぐに問い合わせがありました。さすが、ええもんをこぼすのは何でもよく知ってなさいますな」と、桑添さんは苦笑する。

あつこの間の、手作業だった。この通り、まだきょうさん残っているんですが、なんぼも鬼毛(おにげ)のええのが入らんようになってしまいました。シュロはマシンの常緑高木で、その樹皮にも毛が生えているのが特徴である。そして鬼毛とは、剥いたシュロ皮の両側に生えている飛び抜けて硬い剛毛のこと。幅二〇センチ、長さ六〇センチほどの樹皮からは、一枚につきせいぜい五、六本ほどしか採れない貴重なシュロなのだ。

「このあたりの、野上谷と呼ばれていた一帯はシュロ山があったけど、古くからシュロの栽培が盛んな土地で、昔はたいがいの人がシュロ産物に携わっていました。それが、ナイロンやビロンなどの繊維が出てきて、まもなく、シュロ製のロープが化繊ロープに、兼合羽がビニールの両面羽に、シュロの束子(たわし)がスポンジに取って代わっていったんです。現在、様々な日用品の産地として栄えていますが、元々をたどっていけば、ぜんぶシュロに行き着くんですよ」と、説明してくださったのは、野上町商工会事務局長の水谷光由さん。

「いま、野上町でシュロ帚をこしらえることができる職人さんは、桑添さんだけです。桑添さんのつくるシュロ帚は、見ての通りたいへん仕上がりが美しく、注文を聞いてからつくる謎えモノで、聞かずにいられない。使わずにインテリアとして部屋に飾るファンもいるほどの、名人品です。それだけに後継者がいないのが、なんとも残念です」と、長年桑添さんと親交のある水谷さんは悔しがっている。時代の流れやという、掃除機はあっても一本の帚もないという家庭が当たり前になっている時代やから、それ、私たちの仕事は根気と手間の掛かるモノや、作業するときにものすこし量のシュロの粉がホコリになって周囲に飛び散りますからね、そんなことも若い子は嫌がるんじゃないかと、桑添さんはいいます。

玉はそれ自体が一つの帚で、芯にワラ束を入れて、鬼毛を包むようにして固く縛り上げた構造になっています。中心になる玉は、太めにしつくり、黒柿の柄を差し込む。そこへ真横から竹串を打ち、その串に次々と玉を差し込んでいく。玉は一個一個に根もとを銅のモーター線で固く縛る。全

部の玉を取り付けたら、大本をしつかりと締め、余った部分を切り落とす。これで座敷帚のカタチになる。「かつては嫁入り道具の一つとして、帚を持つていったものですよ。二〇年ほど使ったの毛先がすり減ったから、ちょっと修理してくれ、なんて持ち込んでくるお客さんいましたね。さすがに今はそんな修理はしませんが、」胸を張る、桑添さんのつくったシュロ帚には、すべて「丸星印」というロゴマークの入ったビニール紙が巻いてあった。しかし、なぜ「丸星印」なんですかと尋ねても、桑添さんは照れたように笑った。たまたま、珍しく明快に答えてはくれなかった。

この度、桑添勇雄さんにおかれましては、掃くくりの名人として、平成13年ふるさと名人「紀の人賞」を受賞された誠にありがとうございます。シュロといえは野上谷と言われるくらい、野上谷は関西有数のシュロ産地として名をはせてきました。野上谷のシュロ栽培の歴史は古く、室町時代に始まっているといわれ、シュロ産物は野上谷の主要産物として発展してきました。シュロからは、蓑、縄、綱、篋、束子等様々な加工品が作られ、長い間町の基幹産業として町の発展に貢献してきました。しかし戦後、ナイロンやビロンなどの化学繊維の発達によりシュロ加工品が徐々に衰退を余儀なくされてきました。桑添勇雄氏は、代々シュロ職人の家庭に育ち、シュロ縄が主体であった父親のもとで、戦後帚づくりに始め、以来50数年の永きに渡り、帚づくり一筋に携わってこられました。シュロ皮から上質の鬼毛を抜き集め、一本の帚が出来上がるまですべての工程を手作りにより作られた「鬼毛の帚」は30年使い続けることが出来るといわれています。

今後とも益々健康にご留意され、「匠の技」に磨きをかけていただきたいと存じます。



左2本が鬼毛の最高級のシュロ帚。帚は束ねた玉の集合体で、七つ玉、九つ玉、十一玉の三種があり、玉が多いほど高級とされる。

野上町
野上町長 黒西 健司 さん

企画制作／(株)和歌山毎日広告社

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりに応援します

野上町	野上町商工会	野上町建設業協会	毎日新聞野上販売所	上田ふとん店	めの折願所	釜滝薬師	ながみね農業協同組合	野上八幡宮	防災防表の啓メカー (株)フレック	I・B・W美容専門学校	アサヒビール	有田川温泉	鮎茶屋	御舞儀専門 沖 (株)	あなたの街の (株)オークワ	フレッシュミート オソメ	オリエントホームズ (株)	おいしさ田舎ウレロ 三幸農園	外断熱の家 三幸建設 (株)	(株)サンレックス	(株)島精機製作所	(株)テレビ和歌山	野村證券 (株) 和歌山支店	ご葬儀専門 (株)橋爪屋	紀三井寺 はやし	(株)宮井新聞舗	本家 宮坂仏壇店	安田生命 和歌山支社	(株)和歌山印刷所	(株)和歌山放送	和歌山ヤナセ (株)
-----	--------	----------	-----------	--------	-------	------	------------	-------	-------------------	-------------	--------	-------	-----	-------------	----------------	--------------	---------------	----------------	----------------	-----------	-----------	-----------	----------------	--------------	----------	----------	----------	------------	-----------	----------	------------

紀の名人録 ⑧

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広聴報告書です。



photographer/照井 四郎

小松 勇二郎 Yujiro Komatsu
平成7年に中辺路町にUターンし、熊野の歴史、文化等を紹介する語り部サークル「漂探古道」を結成、多くの人々にふるさとの四季折々を紹介するとともに、語り部育成にも努める。53歳。

熊野に魅せられ 語る色々。

真砂大橋のたもと、こんもりとした森の中に、ひっそりと清姫の墓があった。その隣りにたたくむ茅葺きの屋根が清姫茶屋。すぐ下を流れる富田川の清流が夏の終わりに心地よい風を送っていた。今回の主役、中辺路語り部の会「漂探古道（ひょうたんこどう）」のスタッフの一人、小松勇二郎さんは約束の時間どおり、ふらりと茶屋までやってきた。その日の小松さんのイテタチは、蒼空が広がって上下紫紺色の作務衣を身にまとうという、とてもジャパニーズなものだった。作務衣の背中には、伝説の三休用ととも、「中辺路語り部」と染め抜かれてあった。

「ななだか中辺路を背負って歩くように、重たがって着たがらない人も中にはいます。私が出発するだけ着るようになっていきます。もともと私はこの中辺路の出身で、今はまた生まれ育った大川という地区に戻って住んでおりますが、京都産業大学を卒業したあと、京都大学の工学部に就職、学生時代を含めて30年近く京都というまちで暮らしてまいりました。あるときテレビを見ていますと、日本に帰化しているスイス人やフランス人などが、京都の亀岡というところで外国人を相手語り部をされているという男性が。もう京都はアカン、おしまいや、いつてえらい嘆いてはるんですけど、画面のなかでね、あれんごいこうな、思っってその番組を気をつけてさらに見てますとね、その人いわく、日本に憧れと興味をもった遠い国からやってきた外国の旅行者を案内するときに、今までやったら、京都に四日、地方に三日かけて回っていたんやけど、最近の外国の人は、京都に二日もいたら、もうよろしいって結局、金沢や倉敷にまわるそなんです。厳しいですよ、金閣寺とか清水寺とか、ポイントはず

っかり守られてはいるはずなので、その間を移動するときに、バスに詰め込まれてコンクリートジャングル化した京都の街並みを見せられても、楽しくない。いくら場所だけ保存されていても、それは博物館と変わらないでしょ、ってお客さんに指摘されるんです。実はこの話、何年前のことなんですけど、私もその時、まったく同じようなことを思っていましたから、その外国人の話を聞いてハッ、としたんですね。大袈裟ではなく、日本のまちが破壊されている、と思いました。

「建築学科でコンクリートの研究をしたり、のちに建物の構造的な調査をする民間企業に勤めたり、それが私の仕事だったんです。よけいに美しかったはずの京都の街並みが、どんどん『破壊』されてゆくさまを、実感としてとらえていましたね。ちよんご（ハッ）ルがはじけ、地上げの後遺症で、まちの荒廃がいっそう進んでいくところ。それとはまったく別の話ですが、いや、実は関係はあるんですけど、阪神大震災が起きたとき、私も現地調査に向かいました。残っている建物を調べたり、被災現場で耐震調査を行っている

ときにも、これが脆弱な都市の暮らしなんやと、何度も思いました」

「都市と田舎の暮らしの違いを考えると、ななだか、まちが破壊されている。このことは、人の流出で田舎も破壊されているということや、京都のことは、京都の人にまかせ、もともと田舎出身のオレが守らんらんの田舎（ふるさと）やないかなんていう気持ち、わかっていただけた。お父さんが、妻や子どもたちには、『お父さんはやがて田舎に戻って百姓するからな』、って前々から宣言してあったんです」

「Uターンを決めて、こちらに戻ってきたのが七年前です。その後、平成十一年に開催された熊博（南紀熊野体験博）で多くのボランティアガイドが公募されるのですが、そのときに、出身地のことをあらためてよく知ろうと、県主催の語り部養成講座に妻と参加して、おっかなびっくり語り部というものをスタートさせました。あの当時のことを思い出すと、今でも冷や汗が吹き出てきます。それでもいろいろな人たちと知り合えるなど、たいへん貴重な経験が持てました。すでに紀州語り部の主力メンバーで、町観光協会の会長でもある木下幸文さんとお会いできたことはとても幸せでした。近露の方を中心に、木下さんは史探会という優秀な語り部グループ（？）というより郷土史研究会という性質が強いという方が、既に主催なさっていらっしやいました。私は、木下学校に入学したわけです」

「熊博が終わって、単なるボランティアとしてではなく、あらためてプロ意識を持って熊野の語り部をめざそうと考えた私たちは、その学習会を漂探古道（古道をめぐりながら歴史を知る）と命名して、いまに至っています。熊博のことと違って、最近のお客さんは古道のことや、熊野の歴史などの基礎的な知識は十分アタマに入っている方がお見えになります。古道の説明など、たいがいのパンフレットに書いてありますしね。それよりも、山道を一緒に歩いていて、この花なんていうの、この木なんなの、このへんで採れる名物ってなんなの、といった話とか、このあたりの地元の人々がどんな暮らし方をしているのか、といったような質問が多いですね。こんな山深いところどうやって暮らせるの、電気がつくの、なんていう質問もあります」

「昨年、国土交通省の外郭団体が募集したその活動助成対象に選ばれた関係から、ネットワークでも私たちの活動が紹介され、熊野

地方に関心を寄せる大学や学生サークル、環境保護、村づくりに関心のあるグループなどが呼びかけてきています。あえていいますが、京都や奈良みたいな、堂塔伽藍はなく、このあたりはほんとうに何にもないところなんです。あるのは果てしなく続く山と川、澄みきった水と空だけです。でもその良さがたまらなく魅力的なんです。そのことにより、やがて気が始めた人たちが、なんらかのアクションを起こしています。私たちはそういった都市と熊野の新しい絆を、その仲介役をこれからは買ってほしいな、と考えているところなんです」と、小松さんは楽しそうに話してくださいました。



中辺路町



中辺路町長 真砂 充敏 さん

平成13年度ふるさと名人紀の人名賞に小松勇二郎さんが選ばれ、語り部名人として受賞されました。誠にめでたくございます。

小松さんは、平成7年にふるさとにUターンされてから、熊野古道の語り部サークル「漂探古道」(会長・木下幸文氏)に参加、研鑽を積まれ、熊野の自然、歴史、文化等を幅広く紹介されています。南紀熊野体験博では熊野古道を訪れた多くの方々に語り部として中心的な役割を果たされました。

小松さんが参画される「漂探古道」のメンバーは30人を超え、平成13年度においては「国の知恵ネットワーク」地域づくり活動支援助成を受け、熊野語り部養成セミナーを開催。本年は和歌山県NPOの「さつくり」企画提案事業に、県外の大学サークル等との交流を深める企画案「漂探古道 中辺路町」(都市と熊野に新しい絆を結ぶ)が採択され、県の委託を受け、活発な事業活動を展開されようとしています。

更に、県とあすの和歌山を創る生活運動協議会主催の「紀の国ふるさとづくり賞」最優秀賞にも選ばれた「漂探古道」の日頃の地道な中にも地域に対する深い愛着と熊野古道を広く紹介する熱心な活動が皆様に評価されたことによるものと考えます。

当町では平成16年の高野・熊野の世界遺産登録に向け諸準備を進めているところでありますが、これまでの小松さんのご功績と小松さんを中心とする「漂探古道」の企画制作/和歌山毎日広告社



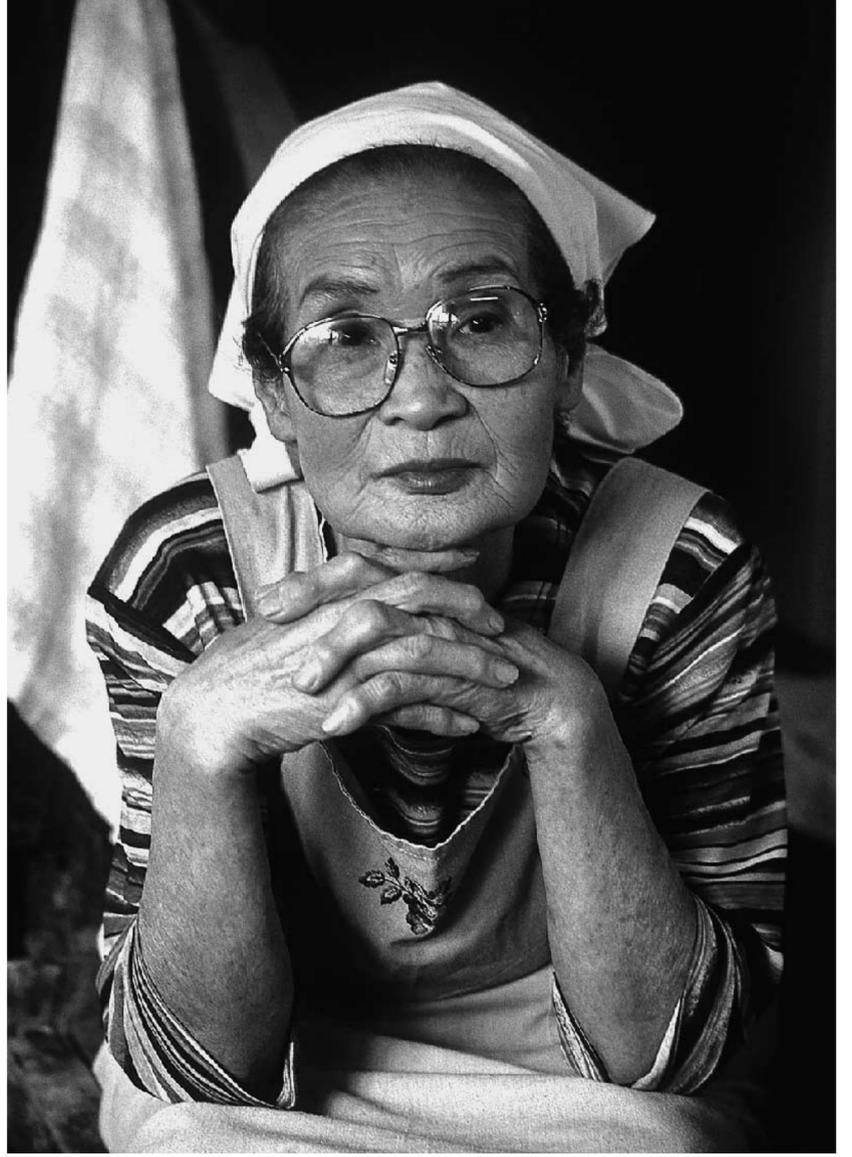
わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 中辺路町
- 中辺路町議会
- 中辺路町観光協会
- 中辺路町教育委員会
- 中辺路シイタケ組合
- 田中歯科医院
- 出水工務店
- I・B・W美容専門学校
- アサヒビール
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 御舞儀専門 沖 (株)
- フレッシュミート オソメ
- オリエントホームズ (株)
- おいさ・田舎づくり 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設 (株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券 (株) 和歌山支店
- ご舞儀専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 安田生命 和歌山支社
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送
- 和歌山ヤナセ (株)

紀の名人録 ⑨

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の名人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広聴報告書です。

豆の匂い なめらかな昔豆腐。



photographer/照井 四郎

田中 波代 Namiyo Tanaka
明治35年の高野口駅の開設当時から創業する「田中豆腐店」の豆腐づくりの技術を継承し、現在も手造りの「香りが良く、柔らかくて味が濃い豆腐」をつくり続けている。80歳。

そのまちで古くから、おいしいと評判の豆腐屋が一軒ある。地元の子のほとんどは知っているが、となりまちの橋本や、遠くは紀南の方からも聞きつけて、近くに寄った折りに「わざわざ店先までクルマでやってくる」といふ。

「さあ、何代になるんやろうか。名倉の駅が出来たのが明治三十四年、それが高野口駅と改まったのが翌三十五年。その時には、名手からお嫁にきなされた慶応生まれのお祖母さんが、きつ豆腐屋をやっていたかおや」とはきはきした口調でお話いただいたのは、今回の取材先、高野口町・田中豆腐店の女主人、田中波代さん。

「昔ね、ちよっと先祖さんのことを調べてみたことがあって、お寺さんに伺ったわけだ、お寺さんには二百年ほどしか記録が残っていない。それでもそこにあった古い過去帳に、屋号でたなかや、と載ってありました。大差さんの代までは、きつ豆腐で下りた街道筋あたりでお店やっていたけど、今の店もきつ豆腐と年代物や、江戸時代のシロモノでしょ、あの葛城館よりまだ古いんじゃないかと屈託なく、あははと笑った。

「大阪で働いていた息子が、私一人で店を切り盛りしているの見るに見かねて、帰ってきてくれた手伝ってくれてましたの、やさしいね。親ばかでも自慢するんやないけど、やっぱり男の子やね、呑み込みが早いし、私よりよっぽど手にお豆腐つくるから、もう安心してあて任せて大丈夫なんやろつけれど、私もこの商売好きやしな、なじみのお客さんとおしゃべりするの好きやから、毎日店には立っています。息子が最近ちよっとからだの調子崩してね、そんな心配事もあって、私、休まれないの、お始さんは早くにお義父さん亡くして、私の主人は繊細関係の仕事してたんやけど、私の豆腐とちよって、うちの豆腐はほとんど手

づくりと同じよ、そやから毎日同じもん、せつたいにできへん、できたら必ず手のひらにのせて、前の人と比べてみるんやけど、毎回微妙にちがうな、かたがめ好きやな、柔らか目が好みの人、豆腐好きにもいろいろあるけど、旨い豆腐をつくるには、やっぱり手のかげんやね、豆腐ほどむずかしいもんないな、木綿つくるときは、こんくらしいもん（小さなかき回し棒）があつてね、にがり差しながらゆくりゆかりかき混ぜる、權をまわしている、ぼつぼつわかるんよ、あつこれはええ豆腐で、きるな、いつのたいたいわかるな、にがり差すときにはそれこそ全神経を集中させて、いまでも始めてやるような気持ちでやっています。よこちよちよち、ほかのこと考えたら、せつたいアカン、それでもね、こしらえた本人がこれ売るのちよっともつたないない、思わす見とれてしまうほど上出来に仕上がるの、年に何回くらいしかないな、あ。

「にがりは幾手もあるけど、長い経験で、けつきよく自分の手に合ったのを使っています。水についても地下水がええとか、井戸水使ったらどつやとが言われて使ってみたりもしたが、いちいち検査せんとあかんし、むずかしいよ、今は普通の水使ってる、つくる過程で煮沸するし、水に閉じては大差ないよ、そやけど、大豆だけはやっぱり言うてた通りです。昔、地元で種れる地大豆使ってた時期もあったけど、いまはおもに福井と福岡産のええ豆使ってる、テレビ見たら、あれ白目やからええなあ、あのマメさん粒そでるなあ、なんてよく見えますよ、やれ腕前や技術やと講釈たれる人もいてるけど、松の木からは松の木、ヒノキはヒノキ、やっぱり豆腐の美味しさはマメの良し悪しにまつるんやとちがう。私、そう思うわ」と、きっぱり。

「このへんにも十軒ほど豆腐屋さんがあつたんやけど、景気の良かったころ、織物業の方へ転職する人も何軒ありました。正直、うちもよつと続いたなと思うよ。根気のある商売やからね、女の所帯やたらからやってくれたんかいな、二十三の歳にお嫁にきて、それから六十年ちかく、豆腐づくり一本や。やはり方は昔のまんま、すつとおんなじ、姑さんもしつかりして、よ、必死になって姑さんのすること、見よう見まねで覚えたな。」

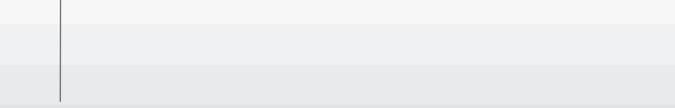
「暑いとき、寒いとき、マメさんを水に浸ける時間が変わる、寒いときには一昼夜、今やたら、さあ七時間くらいかぶやけて、豆がまっすくになる、パンと割ったらね、真ん中



がちよっとへこんでるべしやええの、お豆腐はまちよつと、温かり足らんやなつていうくらいがええ、揚げの揚げはね、まっすくになつてね、伸びのきく大豆、豆腐の時はね、粘りのきく大豆かな、うちば、ガンモも美味しいんよ、練らんなんし、握らんなんし押しかけがあるし、手間もかかるけど、皆さ、欲しがつてくれるから、自分なりに入れる具など工夫して食べてもらっています。豆腐は奴（やつこ）で食べたらいちばんその味がわかる。人間もそうや、なんぼきれいに化粧してても、心つてあるやろ、中身だけは、こまかしきかんもんね」と、田中さんはこちよちを見据えてにやつと笑った。

「にがりは幾手もあるけど、長い経験で、けつきよく自分の手に合ったのを使っています。水についても地下水がええとか、井戸水使ったらどつやとが言われて使ってみたりもしたが、いちいち検査せんとあかんし、むずかしいよ、今は普通の水使ってる、つくる過程で煮沸するし、水に閉じては大差ないよ、そやけど、大豆だけはやっぱり言うてた通りです。昔、地元で種れる地大豆使ってた時期もあったけど、いまはおもに福井と福岡産のええ豆使ってる、テレビ見たら、あれ白目やからええなあ、あのマメさん粒そでるなあ、なんてよく見えますよ、やれ腕前や技術やと講釈たれる人もいてるけど、松の木からは松の木、ヒノキはヒノキ、やっぱり豆腐の美味しさはマメの良し悪しにまつるんやとちがう。私、そう思うわ」と、きっぱり。

本県に知事賞として名人「紀の人」賞が創設され、初の受賞者の一人に我が町の田中波代さんが「豆腐づくりの名人」として選ばれ受賞されました。本町の誇りであり、大変喜ばしい事です。本町におめでとうとさせていただきます。



高野口町長 辻本 仁至 さん

高野口町 高野口町議会 高野口町商工会

サカイキヤニング(株) ハギノ眼科クリニック (株)松源 高野口店・伏原店 I・B・W美容専門学校 アサヒパドラー アサヒビール 有田川温泉 鮎茶屋 御舞儀専門 沖(株) あなたの街の (株)オークワ フレッシュミート オソメ オリエントホームズ(株) おいしさ田舎づくり 三幸農園 外断熱の家 三幸建設(株) (株)サンレックス (株)テレビ和歌山 野村證券(株) 和歌山支店 ご舞儀専門 (株)橋爪屋 紀三井寺 はやし (株)宮井新聞舗 本家 宮坂仏壇店 安田生命 和歌山支社 (株)和歌山印刷所 (株)和歌山放送 和歌山ヤナセ(株)

「暑いとき、寒いとき、マメさんを水に浸ける時間が変わる、寒いときには一昼夜、今やたら、さあ七時間くらいかぶやけて、豆がまっすくになる、パンと割ったらね、真ん中

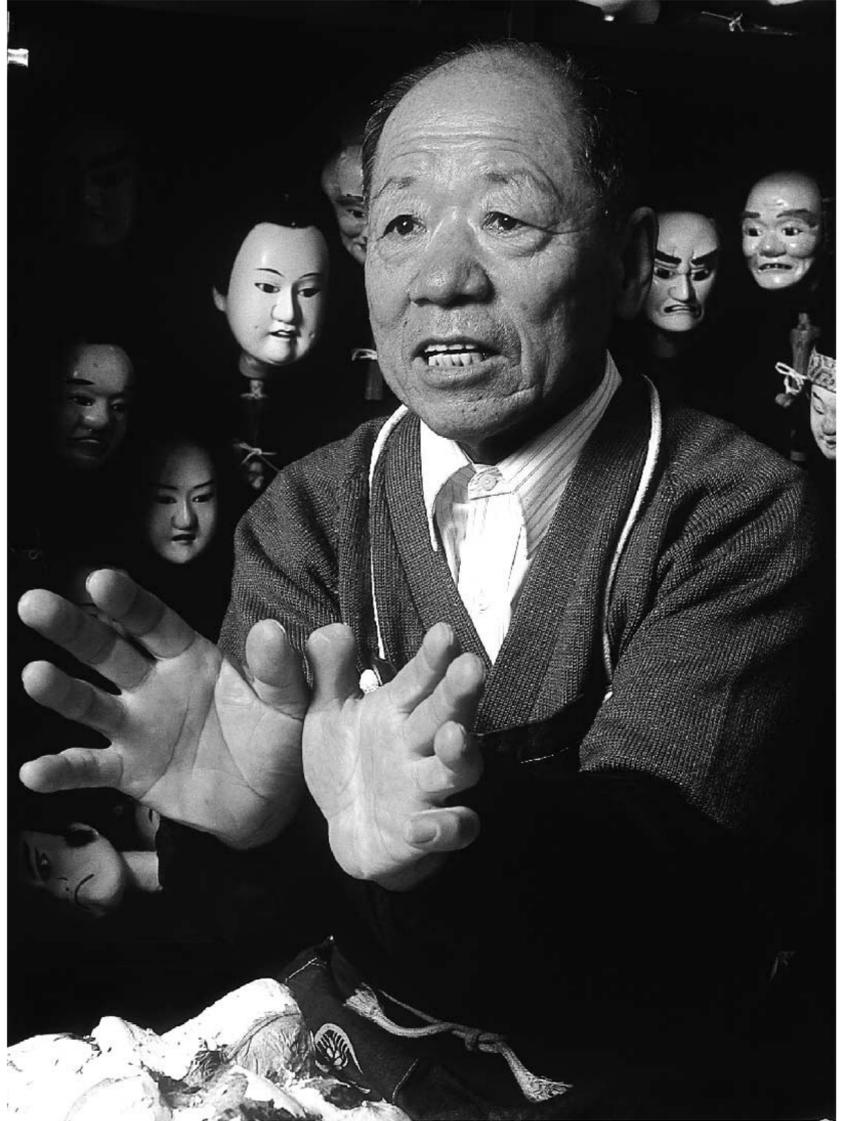
「暑いとき、寒いとき、マメさんを水に浸ける時間が変わる、寒いときには一昼夜、今やたら、さあ七時間くらいかぶやけて、豆がまっすくになる、パンと割ったらね、真ん中

「暑いとき、寒いとき、マメさんを水に浸ける時間が変わる、寒いときには一昼夜、今やたら、さあ七時間くらいかぶやけて、豆がまっすくになる、パンと割ったらね、真ん中

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

紀の名人録 ①

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広報報告書です。



photographer/照井 四郎

笑いと涙の 人形伝道師。

三谷 弘 Hiroshi Mitani

昭和20年代から自作の人形劇を始め、40年代から三谷人形座として公民館での上演を本格化する。人形の作成や操作の指導に努め、他府県の人形劇にも用いられるなど、多くの人々に親しまれている。72歳。

「人形はね、ひとりごとで二体つかえるように
拵えてありまして、壱坂だったら、お里、沢
市をひとりやる。私の師匠の二代目はもの
すく上手だったですよ」と、手振りそぶり
を交えながら、楽しそうに人形劇との出会い
を語ってきた三谷弘さん。現在、岩田公
民館で館長を務める。基本的には、「自分お
一人の三谷人形座の、三代目座長西川房司を
名乗る。」

「昔ね、昭和四十年ごろですが、淡路に
おかつば義太夫といのがあって、女の方で
義太夫を語るひがいたんよ。ロシアのほう
まで公演で出かけるほどの実力のある人で
ぜひその名人を呼びたいんやが、どうせ呼ば
んやたらいつそ、人形使える人形師も呼ん
だら良からうて。で、当時の公民館長さんが

新聞で紹介されてあった二代目の西川房司
を、遠く山形県からお呼びしたんです。その
ときすでに、私の師匠は七十を過ぎていな
さったやろか、その人がね、大きなトランク
を持って、伊勢まわりでわざわざ来てくれた
んですよ。」

「田辺にね、三味線弾ける師匠のお婆さん
がいて、その師匠と人形使いの二代目の、
掛け合いがなんとも面白かった。向こうは山
形弁やろ、で、お婆さんが紀州弁、何話して
いるのかさっぱり要領得んに、えらいもん
やな。義太夫の話になったらばつと話が通じ
る。で、師匠が私に、お前も人形使えと、そ
の当時、私は小学校で教師をやっておられま
して、児童たちを前にして学習の手助けにと少
しは人形を使ってみた経験はありましたけど、
もしますよ。こどもたちがお年寄りまで観客の

本格的な舞台はこれからはじめてやっとな、も
と私はものをとつくるのが好きで、今でも自
分で舞台にかける人形や、お面、紙粘土の置
物などをつくらしたりして、幼稚園のごもた
ちや老人会を教えたあげたりもしてましたが
そのとき公民館で師匠と一緒に演じてました
人形浄瑠璃の興業が今でも忘れられません」
と、三谷さん。

「私の人形劇は、なんでもしよ。淡路や
阿波の人形浄瑠璃と同じ演目もかけることも
ありますし、ギョーロといつて指人形なん
ですが、児童向けに作られた人形劇をやるこ
ともあります。手袋、つねは、それを手に
はめてウサギとか、カニのかたちにして見せ
て、いろいろ面白くしてあげて笑いをとったり
目も金色に変わり、



年齢層が幅広いときは、出し物にもそれなり
の趣向を凝らさないとダメなんです。こども
たちはもちろん、お年寄りもすいぶん喜んで
くださって、西瓜泥棒(すいかどろぼう)
なんていう楽しい演目などは、むしろ時代物
よりか受ける場面もあつたりして、そりゃあ
愉快ですよ。」

「さつきもいましたように、基本的には
私ひとりですよ、ですから人形劇をやつてほ
しいと頼みにこられたら、まず私は、その方
に手伝つてくれるかどうか、お尋ねするん
です。で、手伝つてもらえない場合でも、本番
ではせめて人形に鎌や鍬を持たせたり、綱引
きで綱をひっぱるその綱ぐらひは持つてほし
いとお願ひするんですよ。それが一回とか
三回ぐらひの稽古なら付き合つてくれるとい
うのなら、もっともつと役に入り込んだ人形
の所作まで教えて差しあげます。」

「日高川入相花王(ひだかがわいりあいざ
くら)といふ、数ある人形浄瑠璃のなかでも
とくに人気のあるお話をかけることがあるの
ですが、船頭(ふなおき)と清姫の掛け合
い、のころ、依頼にこられた相手方のどなた
に船頭をやつてもらふんです。語りの部分は
テープが流れるのですが、きちんと演じれば
三分はかかるものを、一〇分なら一〇分
決められた時間に収まるようあらかじめ編集
して置きます。日高川で渡し場の段、恋の執
念にとりつかれた清姫が、蛇体になって文字
通り日高川を渡っていくという有名なお話で
ドラマチックですから、若い人に船頭をやつ
てもらふと、観客からは私以上に大きな拍手
がわくんですよ。あなた上手やつたよ、お
客さんから誉められる。まんざらでもないで
しょう。演じている本人にとつてもね、それ
が小学校の子どものまんなら、たとえば浦城阿
波の鳴門に登場する巡礼娘、おつるを演じて
もらふんです。人形も、やつてる本人も可愛
いからね。そりゃ受けまよ。見てくださる
お客さんも、参加した主催者の方々も共に人
形劇を通じて、幸せな気分になり、喜んでい
ただける。これがいいですね。これが私の
めざす人形劇なんです。でもね、ここのけ
の話ですが、若い男の子に主役の清姫をやつ
てもらつたこともありました。が、やっぱり付
け焼き刃の練習だけじゃ、だめだった」と、

いたすらつぱい目を
して、ちよつと声を
ひそめて内緒話のよ
うに囁き、そのあと
実に楽しそうに、三
谷さんは天井を向い
て大きな声で笑つた。
「この清姫の人形
にもからくりがあつ
て、がぶつと噛みつ
くからガブ。小猿と
呼ばれる仕掛け糸を
引くと口が赤く裂け
目が金色に変わり、



この度、三谷さんにおかれましては
人形つくりの名人として、平成14年(第
2回)ふるさと名人「紀の人賞」を受
賞され、誠にめでたきことと存じます。
三谷さんは昭和24年に小学校教師の
かたわら、子どもたちに豊かな心を育
んでもらいたいという思いから、教師
仲間たちと一緒に人形劇の活動を始め
られました。当時から紙粘土で人形を
手作りし、すべてが自作自演の人形劇
でした。
昭和40年から、三谷人形座として上
演を本格化させ、人形つくりや演技の
指導に努められ、昭和48年からは、人
形つくりの指導者として学校教育をは
じめ、児童館、公民館活動等で活躍さ
れてきました。他府県の人形劇にも用
いられたりするなど、大変多くの人々
に親しまれています。
最近では、工作教室で来年度の干支、未
(ひつじ)の張字を指導したり、また、
公民館長としてもご多忙で、日々生涯
学習の推進に力をそそがれています。
このよつな三谷さんは今回の受賞に
ふさわしい、まさに「ふるさとの宝」
であります。今後ともそのお力を地域
のためにお役立ていただき、さらなる
文化・芸術の発展に邁進されることを
ご期待申し上げます。

企画制作/和歌山毎日広告社

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 上富田町
- 上富田町議会
- 上富田町観光協会
- 上富田町教育委員会
- 上富田町商工会
- 上富田町建設業親睦会
- 上富田町水道協同組合
- 救馬深観音
- プラム食品(株)
- ラビーム白浜
- I・B・W美容専門学校
- アサヒパトリー アサヒビール
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 御舞儀専門 沖(株)
- フレッシュミート オソメ
- オリエントホームズ(株)
- おいしさ田舎づくり 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設(株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券(株) 和歌山支店
- ご舞儀専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 安田生命 和歌山支社
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送
- 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 ⑫

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートしてお知らせする広聴報告書です。

古軸を甦らせる 美の蘇生師。



photographer/照井 四郎

羽山 直幸 Naoyuki Hayama
表具師としての高度な技術を活かし、地域文化財の保存に努める。古くから伝わる地域の「祭り」に用いられる「獅子頭」を製作、長年にわたり数多く寄贈するとともに、掛軸などの保存修理を行う。

羽山さんの仕事場は、住居も兼ねた一軒家の二階にあった。屋外から直接、仕事場に通じる階段をのぼると、ドアを開けると一見、雑然と見える室内には、また羽山さんの手にかかる表具前の掛軸が何枚、何十枚も重ねて大切に掛けられていた。裏打ちや切り継ぎなど、このあと何十名の名人の手業が披露される作業台が三つ、所狭しと場所を取っていた。奥にもう一つ、部屋がある。「そうやなあ、簡単にいうと、日本の伝統的なやり方で、古い掛け軸や屏風などを洗い直して、もう一度美しく復元するのが表具師の仕事やな」と、あっさりと言ってきた羽山さん。そして、まだ何か聞くのかといった目で、眼鏡越しに面白そうに「お話を覗きこんだ。もちろんその他にも、表具師はその守備範囲が広く、襖の新調や貼り替えに始まって、障子、戸襖、衝立、あるいは和洋額の新調、貼り替え、仕立て直し、室内の壁

装、クロス貼りといった大掛かりなものから、巻物を仕舞う桐箱の新調や修理といった小品まで、たいがいのは全部やっています。しかし羽山さんは、あくまでも古軸の復元にこだわった。「掛け軸はむずかしいな。ちよいちよい新調なんかで載って、画面テープみたいなものでひっつけてしまおうかな。新しいやり方もあるんやろうけど、むしろみだりに旧式のやり方で天然の古軸使って、一つ一つ丁寧にやっていくと思たら、そりやちい骨も折れるわな」と、飄然として笑う。小さい頃は生家の近所にあつたお寺で一日お祈り入りの山水画や仏像を見て楽しみ、写生して過ごすなど、もともとから絵を見たり描くことの好きだった羽山さんは、十七歳の時に海南にあった漆芸の公共訓練所へ入学。そこで一年間、みづちりと日本画の素養を身につけた。若いときのこうした経験が、のち



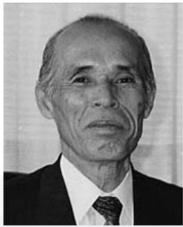
に表具師として書画や製（きれ）を見極める選眼力に大いに役立った。羽山さんはいつか時給を上げていた時期もあったが、ある時縁あって和歌山市内でも指折りの評判をもつ一級の表具屋に内弟子として就職。表具屋の店主に仕えながら、羽山さんの言葉を借りれば、盆もなければ正月も里に帰らず、ひたすら表具師修行に励んだという。そのときの弟子つ子時代の話が面白い。「そのおやっさんときたら、何人もの内弟子が途中でケツ割って逃げ帰ってしまつた。仕事に慣れるまではきついな。わしが弟子になった時分にも、先輩職人が一人あつたんやけど、こんなとこ居てもアカンから辞めるわ、いつか出ていってしまつた。わしは一人前になろうと思つて必死やからな。なんとか軸を扱わせてくれるまでは手抱しよと思つた。今になってようやくわかる。預かりものの軸は代わりが利かん。怖くて、そりやあ素人なんか任せられるかよ。で、わしはおやっさんの機嫌のええとこを覚えておいて、晩酌を楽しんでる師匠の前で、口ひらからこつこつ描き進めてきた下絵の束をさつこ置いた。『広げてみせよ』と、ふんといつた感じではらくわいの描いた下絵を見てたおやっさんが、『おい、ちよつとそこにある屏

風に描いてみい。』何を描くんですか。』そりやないまわしが呑んでるこの左手の盆に、ちよつと巧い具合に酌してくれ。京都の芸子さんの絵を描いてくれ。』この突然の珍注文に、羽山さんは負けてはいなかった。そのとき欲しくて欲しくて堪らなかつた、猫の髭を揃えて仕上げたという高価な絵筆を一本買つてくれたら描く、と即答する。絵を描くことは本来の仕事ではないが、その心得は総合的な美術作品の復元に開く表具師にとって有力な武器となる。弟子の腕前をこころ計ってやるうとする師匠と、機転を利かせて即座で対応する弟子。職人同士にしか見えない火花が静かにぶつかり、散つた瞬間でもあった。「漆芸の訓練所時代に先生からよく言われたもんや。つるつる光る鏡と漆器は一緒やで、気後れしてしまい、そこに自分の顔がうつたら負けやぞ」と、無地の屏風に筆を入れるときもまさに同じ心境やな。今でもそんなやけど、この仕事には度胸がいわいな。描いた丸髭の美人画は、羽山さんの希望通り、猫毛の高級筆に化けた。その表具屋で足かけ三年、しつかり修行を積んだあと、二十六の時に由良に戻ってくる。親方の紹介で、一時期、箕島の駅前にある大きな表具屋でその腕前を存分に発揮した。三十五年には、フロでも泣く難関の表具技能検定一級試験に挑戦して、見事一発で合格を果たす。

「この商売、忙しい時も暇な時もある。けどな、わしは自分が納得のいくやり方でやりたいからな。盆や正月が近づくと、それに間に合うように何かならんかと持ちこまれるんやが、急ぐんやたら他所へ行きよして断つてしまつた。それでも、他所で表具しててもうたら、端っこがへると前に反りかえつてしまつた。慌ててその軸持つてわしんとこへもどつてくることもあつた。」「羽山さん。」「同じ布使つても、羽山さんのとこは高い。ぼく一般のお客さんも中には居るけど、それは間違いや。裏打ちの紙、たった一枚べたんとひつつけたら、なんと一緒にいかん。布は水でこらし、裁断した裏は五厘幅でビシッと重ねて一枚の紙のよこに貼り合わせ、三度にわたつてきちんと裏打ちした本紙、裏紙や裂地の、仕上りの差はこの通り一目瞭然とちがうやろか。」「確かな職人技はすでに評判となり、羽山さんの仕事場には、寺や神社などから国宝級重文級の貴重な作品が何本か、補修や修理するために順番待ちで並べられている。その中で、その修復に取り組んでいる一幅の大きな掛け軸は、ある寺院の蔵で長い間埃をかぶっていたのを住職が抱え込むようにして持ってきたものだった。とろとろに汚れ、虫喰いもあつた薄いつぼの本紙は、丁寧に裏打ちしてから何度も何度も繰り返し洗ひ、あとは糊を抜くまでに仕上げた。後継者である息子、幸一さんと二人がかりの大作業であつた。ふつくと鮮やかな色彩で甦つたその仏画は見事な涅槃図で、ひよつとした田山忠房の作ではないかと、羽山さんはさざりといふた。



由良町



由良町長 中井 勤 さん

この度、羽山さんにおかれましては平成14年ふるさと名人「紀の人賞」を受賞され、誠にありがとうございます。羽山さんは、昭和43年頃から自宅を「表具店を経営、昭和45年からは1級表具師として活躍され、文化財（美術工芸品等）の滅失破損をなくすため、表具の高度な技術をもって補修保存されたものは数知れず、特に、神社仏閣の宝物修理の功績は大きく、時給技法による保存技術は県内でも有数です。また、その技術を利用して、「祭り」になくはならない獅子舞の獅子頭製作に取り組み、多くの獅子頭を製作して、町内はもとより近隣の町村に寄贈しています。

町内の県指定無形民俗文化財の獅子舞も氏の製作した獅子頭が使われ、伝統芸能の保存にはなくてはならない存在であり、後継者育成にも尽力し、文化の向上に大きく貢献しています。このように、羽山さんは「ふるさと名人」にふさわしい由良町が誇れるお方であり、これからも健康に御留意され御活躍されることをお祈りいたします。

企画制作/和歌山毎日広告社

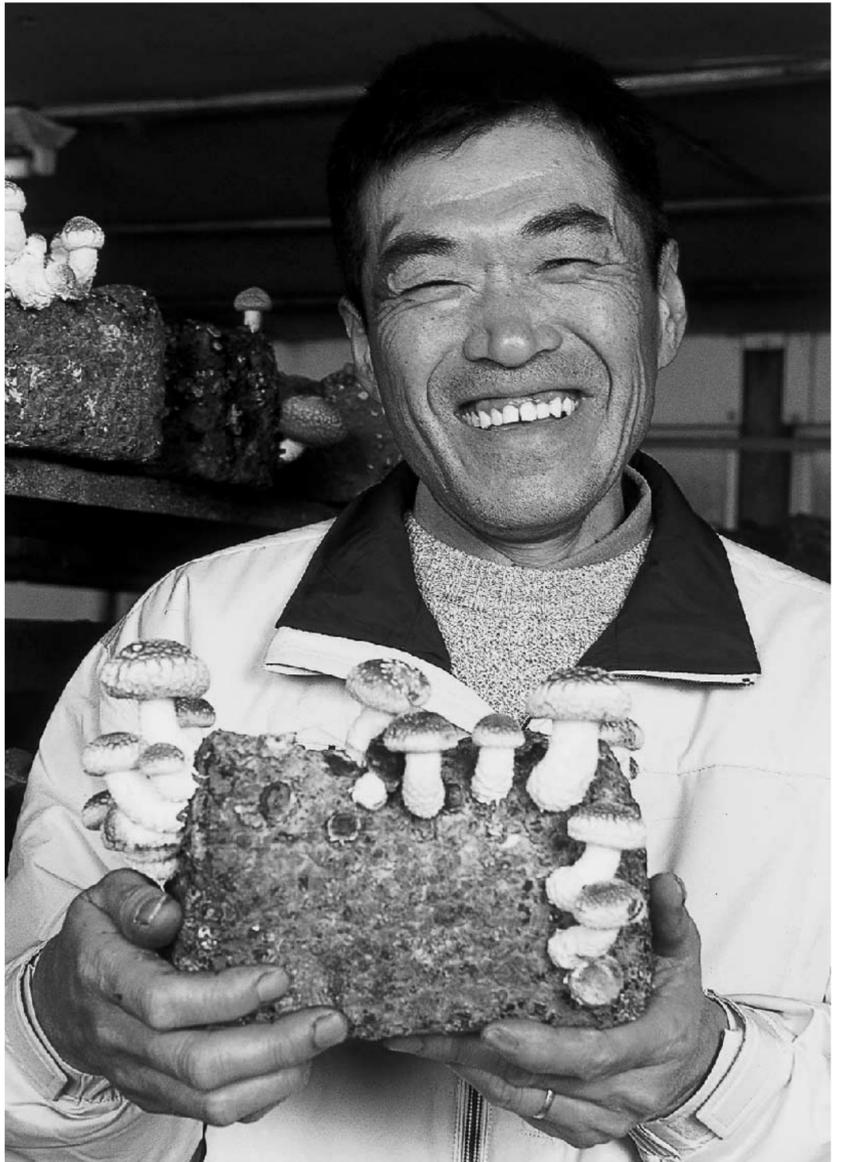
わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 由良町
- （株）梶工務店
- 環境やさしい業 ポリテック（株）
- I・B・W美容専門学校
- アサヒパナソニック アサヒビール
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 御舞儀専門 沖（株）
- フレスココミュニティ オンメ
- オリエントホームズ（株）
- おいでよ田舎っぺり 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設（株）
- （株）サンレックス
- （株）島精機製作所
- （株）テレビ和歌山
- 野村證券（株）和歌山支店
- ご舞儀専門 （株）橋爪屋
- 紀井寺 はやし
- （株）宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 安田生命 和歌山支社
- （株）和歌山印刷所
- （株）和歌山放送
- 和歌山ヤナセ（株）

紀の名人録 ⑬

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういつたひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広報報告書です。

椎茸づくり、業師二代目。



photographer/照井 四郎

山下 正次 Masatsugu Yamashita
木のチップや糞分など独自の栽培方法により、安全で美味しい「椎茸」の生産量を伸ばすとともに、透明感のある包装や持ち易さなど創意工夫による販売に努めており、めっけもん広場の売上げにずっと貢献している。

椎茸づくりの名人がいると聞いて、那賀郡打田町まで会いに出かけた。その人、山下正次さんは作業の忙しい最中、自宅待っていただくだった。

「夏と冬場とでは、菌床の分解（ペーパード）が変わってくるので、だいぶ違ってくるんですけど、袋詰めした菌床を常圧釜で十時間ほどかけて殺菌するからね、あとのごとく考えたりしてでも早いこと釜出しして、冷却したあちはすぐに接種室へ放りこまんとあかん。段どりはなるべく朝早く済ませたいんよ」と、山下さん。

「一日の作業でか、そやな、僕ら早子起きて、菌床のもとになる粉砕チップ、挽き粉みたいなもんやしよ、これをミキサー回して一時間ほど水で練ったもんを朝の七時ごろから袋詰めするんすわ。気温がぬくなってきたら雑菌が入りやすくなるからね、接種するとき、雑菌ついたらしまいやからね、殺菌灯

ついた菌床のところがええんやけど、まあ、僕んところも接種室は空調で摂氏五度くらいまで落として、年中、菌床を育える状態にはしてあります。仕込みはやっぱり冬場の方がええな、それと桜の花の咲く時期はとくに雑菌が付きやすいんよ、空中にばい菌の花粉が飛びよるからね」

「もてもて（ち）は養鶏、採卵鶏してたんやけど、あ、ある年、ニューカッスル病が出たんや、安い輸入卵に圧されて、採算あわんやうになって、それで辞めてしまったんす。つぎに自分で出て来る仕事は何やろか、耕地面積が少ないんでね、集約的な栽培モノはないもんかなと、親爺が原木椎茸を始めたのが昭和三十八年、東京オリビックの前の年ですわ、その当時、ミカン山を開いたらトンダリの木があつてね、それを山の下の小屋へ横に寝かせておいてたら自然と椎茸が出てきたんすよ。それがきっかけやっつたね」

「藤本さんというね、奈良の種菌屋さんなんやけど、その人からね、椎茸栽培の方法についていろいろ教えてもらった。で、和歌山の市場に椎茸が並んだのは僕んところ初めてやったそうで、中央青果の社長さんがすごく喜んでくれた。当時は質よりも量で、よく売れたな。でもね、付近で農業している人が原木を切ってくれてたんやけど、だんだんその人も高齢になってくるしね、原木自体がだいぶ手に入りにくくなってきたんすよ。それで僕んところは、遠く岩手の花巻あたりから、年に一万本ほど仕入れてたんやけど、原木は一本当たり三〇〇円するんやしよ。儲かってたらええんやけど、そのうち商社が椎茸栽培に目をつけてね、日本から中国に菌を持って行って、現地で指導して栽培した中国産の安価なヤツを大量に逆輸入してきたんすよ。平成二年やっつたね、その五年ほど前から、僕も親爺を手伝って原木椎茸と一緒にやりだしたんやけど、輸入椎茸の影響で、ぜんぜん採算が合わんようになってしまった。それと原木って重たいんや、和歌山駅のちよつと南に貨物駅があつてね、取りに行くの一日に二往復、二トナ車走らうたら、もつたタクタになつたな」と、その当時の苦労を振り返りながら、山下さんは苦笑する。

「今もそんなんやけど、中国産の椎茸いってもね、肉厚でなかなか見るとはええ感じなんよ。それでね、こっちは採算合わんからね、もう椎茸栽培は辞めようかと、逃げ道もいろいろ考えてね、トマト植えたり、嫁さんもううてからはね、イチゴのハウス栽培してみたり、花をしたこともあつた。いろいろ試して



「殺菌釜小さいし、動力が足りてないから僕んところで菌床は一日平均で二百五十ほどしか出来ないけど、串本の方では町ぐるみで大きいくちやるともあつたよ、上手に取つても一つの菌床から五、六〇〇グラムくらいやろか。椎茸はその生理生態がはっきりと判ってないところがあるからね、育てていくのムスシイないま僕んところは、上面栽培を主に、昔ながらの裸栽培も力ませながら、季節で出荷が途切れないよう二段構えでやつて、常時、めっけもん広場には出させてもらって、お世話になってる」

「めっけもん広場」とは、地元でとれた農作物を地元で消費するファーマーズ・マーケット（大型農産物販売所）で「JA紀の里が運営している。より新鮮で安全な農産物の安定供給が最大の「売り」である。それが大受けして、二〇〇〇年十一月のオープン以来、土日曜日ともなると一日、三千人以上の来場者が噂を聞きつけ、遠く泉南からもやってくる。数ある出荷品の中でも山下さんの育てた椎茸は大きくて、美味しいと評判で、めっけもん広場の売上げにずっと貢献している」と、あとで人から聞かされた、透明のフルーツパックに椎茸を並べて、色取りにヒバを添え、ひもをかけてお土産用に売れる可愛いアイデアは、奥さんの由香理さんが思いついたところである。

この度、山下さんにおかれましてはふるさと名人「紀の人賞」を受賞され誠にありがとうございます。努力と研究を重ねられた成果であること推察し、敬意を表します。

温暖な気候など恵まれた環境にあるわが町では、四季折々、さまざまな作物が作られています。しかしながら近年、農家の後継者不足や輸入農産物による価格破壊等により農業離れが進んでいる現状ですが、消費者が安心して高品質の作物を地域で供給できるということがとても大切であります。

幸いにして、「めっけもん広場」が大変な好評を得ています。生産者の顔が見えて、安心して消費できるものが、いま求められているのではないのでしょうか。山下さんのつくる椎茸には安心して食べたいんやと思います。

今回の「紀の人賞」受賞は農家のみなさんにとっても大きな励みになったことと思われ幸いです。今後益々の活躍を期待申し上げます。

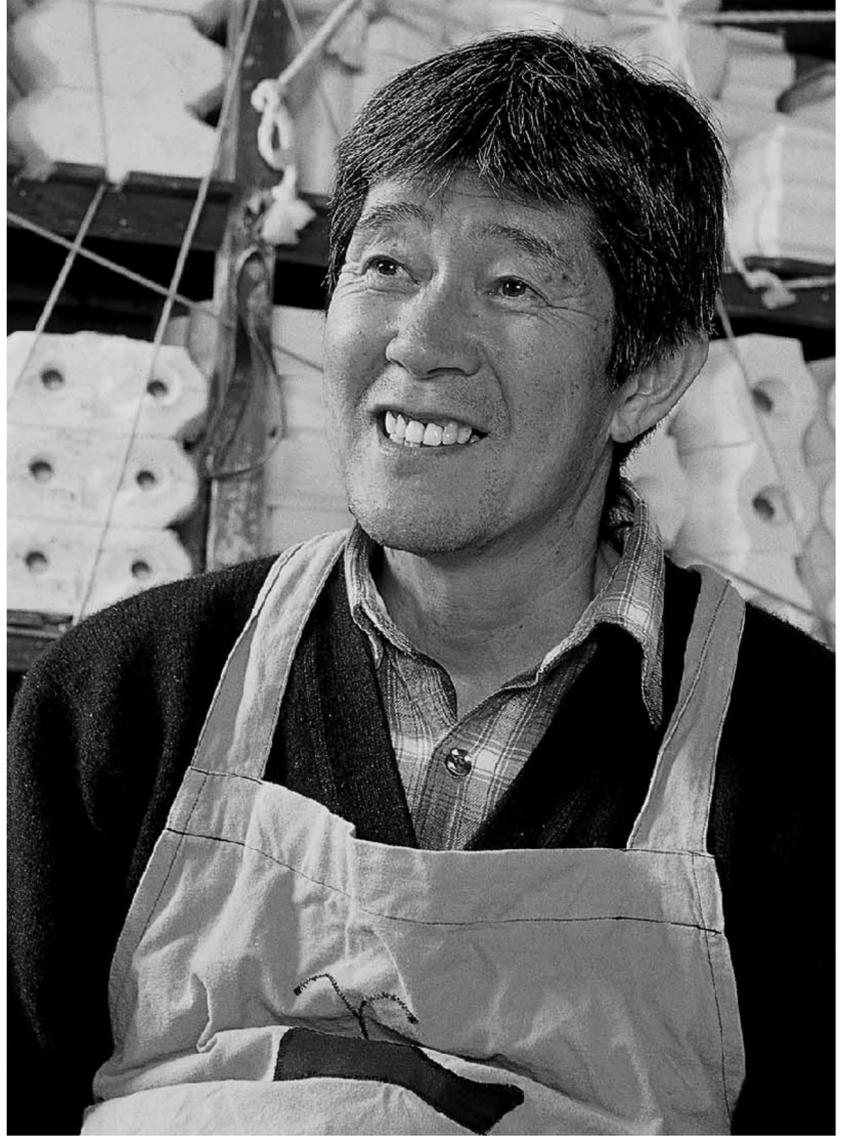
打田町

打田町長 根来 公士 さん

- わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します
- 打田町
 - 打田町議会
 - 紀の里農業協同組合
 - 株コテック
 - セレモール那賀 打田・岩出中央
 - ソーストマトチャップ ハグルマ(株)
 - I・B・W美容専門学校
 - アサヒビール 和歌山支店
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - 儀礼文化の現代創造 (株)有田葬祭
 - 御葬儀専門 沖(株)
 - あなたの街の (株)オークワ
 - フレッシュミート オソメ
 - オリエントホームズ(株)
 - おいしさ田舎のへり 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設(株)
 - (株)サンレックス
 - 漁火の宿 シーサイド観潮
 - (株)島精機製作所
 - (株)第一製版印刷
 - (株)テレビ和歌山
 - 野村證券(株) 和歌山支店
 - ご葬儀専門 (株)橋爪屋
 - 紀三井寺 はやし
 - (株)松源 岩出店・粉河店
 - (株)宮井新聞舗
 - 本家 宮坂仏壇店
 - 吉村眼科
 - (株)和歌山印刷所
 - (株)和歌山放送
 - 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 ⑭

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリスタップしてお知らせする広報報告書です。



photographer/照井 四郎

鯨に魅せられた 土鈴づくり師。

小出 勝彦
Katsuhiko Koide

古式捕鯨発祥の地、太地町で「鯨」をテーマにしたさまざまな土鈴民芸品づくりを行う。鯨土鈴の絵付け体験にも力を入れるなど、地域おこしも積極的に取り組んでいる。

太地湾を見下ろす丘陵から少し内に入った閑静な住宅地の一角に、その工房はあった。道路に面した庭先の樹に、大きな木製の看板が吊り下げられてあり、朱文字で「民芸工房 抱壺庵」と書かれてある。その下には、今回の主役、土鈴作家の小出勝彦さんが彫ったという素朴ながらスマートな、イワシ鯨の小さなオブジェがぶら下がっていた。

「私も太地の人間ですからね、どうしても鯨を外すわけにはいきません」と笑う。あきつてから関東方面で開催される和歌山県の物産展に向けて最終の準備に余念のない小出さんは、それでも時間を割いていると楽しそうに話を聞かせてくれた。

「もともとこの工房は、親爺と一緒に始めたものなんです。勤め人だった父親が定年を迎えた時期に、私もこちらに戻ってきたんです。そのころ大阪の会社に勤めていた私は、思いつくままに海外へ出ていこうと決めて

いたのですが、アクシデントが重なってしまい、断念せざるを得なくなりました。それが二十五才のときですね、それから一年後、ここで工房を始めるようになったんです。生活していくだけの収入が追いつかず、それでいろいろ副業をやりました。結局、土鈴づくり一本で喰えるようになるまで、まる十年かかってしまいましたよ。こんな商売、儲かるはずないじゃないですか、小出さんはからから笑った。

「父親というところがなかなかの趣味人でした。陶芸が好きで、自分で轆を回したりしていたんです。そのうちちびちびとくじらの博物館が出来ましてね、でも、クジラの町、太地町として全国に名を売っているのに、当時搜しても適当なおみやげ品ってなかったんですよ。町が公募しましたからね、それでうちの親爺が、面白そうだからちびちびとこれやってみないかと、私を誘ったんです。実は

私もお若いころ、インテリアデザイナーを夢んでいた時期もありましたし、モノづくりに関しては元々嫌いではありませんから、よし乗ったと、親爺も私も、クジラをモチーフにして考えるという点では最初から一致していました。粘土でこしらえるという点も、すぐに決まりました。でも、そこが長く、苦勞の連続でしたね。まず、どんな形の土産物にすればいいのか。参考資料を読んだり、できるだけそこの足を運んで行って、たくさん民芸品やお土産を手にとって、各地を徹底して見て歩きましたね。で、調べていくうちに、土鈴というものがあてはまらなかつた。いま各地方では、郷土玩具のように売られている土鈴なんです。縄文時代、土鈴は神を招く神聖な楽器としてつくられていたんです。私のつくるクジラの土鈴もそうなんです。こころと振れは鳴る、素朴な土の音色はこころがたたく、誰もが郷愁を感じ



てしまうのは、本来、土鈴にはそういった過去の思い出を呼び覚ます、何か特別な働きを持っているのかも知れません。私がつくるクジラの土鈴は、太地の鯨漁師たちの間で古くから伝わってきた民話とか伝説を丹念に調べて、そこからイメージできるものを引き出し、作品の中にできるだけ丁寧に取りこんでいったつもりです。

そのネタ探しに、鯨の生態や捕鯨に関する資料を、あまのこころにも及ぶ貴重なものが展示されている。世界一のスケールを誇るくじらの博物館には、毎日のように通い詰めた。

「次ぎの悩みは、どうデザインするかというところでした。私は二人の姉と弟が一人いるのですが、いまはプロの彫刻家になって描いている土鈴のクジラを粘土をつかって巧くカタチにまとめてくれました。親爺と私の姉の三人で、頭を寄せあって喧嘩もよく、晩かかって仕上げました。しかしこのプロトタイプ、原型は今は完全に生きています。手持のモーターも、夫婦のクジラも、私がこころをこめてつくったこの型のバリエーションです。だから今さらながらに感心すると、姉には感謝ですね。」

ちなみにその姉とは、東京や大阪のデパートなどで個展をひらき、話題をあつめている創作人形作家の、原明代さんである。

「いま私のこころは、土鈴だけでなく、箸置きとか楊枝立といった小物から酒器や花器まで、あわせて二十種類ほどのオリジナルをつくっているのですが、いずれもどこかに遊び心だけは忘れずに入れておきたいですね。遊び心こそ、土産物の生命です。だいたい土鈴など、鳴らなければただの重物でじつは遊び心のない商品って、つまらないじゃないですか、小出さんはい。」

たとえば、よく売れている、くじらのおなら」といって面白名前をついた土産品は、いい香りを発する小さなクジラの置物である。マッコウ鯨の胃や腸の中には、胃液のする産物(りゅうせき)と呼ばれる希少な動物性の香料物質(一種の結石)ができる。これは古くから知られているが、「くじらのおなら」には、それと同じ成分を化学的に合成させてつくった香料をあらかじめ粘土の中に練り入れて焼いてある。このような手法でつくられた、香りのする焼き物は、全園広しといえども類がない。と考案者の小出さんは少し自慢げに胸を張ってみせた。

小出さんがつくった作品は多彩だ。土は厚白焼で有名な四日市のもを入れている。石膏型に押しつけて成形したあく、四五日、雨が降ると二週間

くらいかけて、自然乾燥させ、電気窯に入れて九時間から十時間かけて素焼きにする。それから絵の具で彩色して完成する。すべて手作りだから一日に仕上げられるのは、一番大きな土鈴でせいぜい三〇個くらい。量産しようと思えば描くタッチが乱暴になるし、そんなこまかしくはしたくないという。粘土との調和を考え、色合いにはとくに神経を使う。

そういう丁寧な仕上げが、「南紀熊野の素朴なイメージ」とよくマッチして、受けた。遠くから、直接、小出さんの工房まで訪ねてきて、土鈴を買いにくるお客さんも多いという。

小出さんが個人的にはいちばん気に入っているというクジラの酒器は、備前焼を少し思わせるような、やわらかな土の温かみを感じさせる。なんともいえない古色蒼然とした味わいがあった。たっぶり二合入りますよ、と嬉しそうに説明してくれた小出さん。ちなみに「抱壺庵」とは、父親の勝明さんがある酒席で、美酒に酔って壺を抱えたまま眠りかけている姿をみて、飲み仲間でもあった日本画家が面白がって名づけたものに由来しているそうです。



太地町長 濱中 節夫 さん

太地町は捕鯨発祥の地として、捕鯨と共に栄えてまいりました。しかし、IWCによる捕鯨禁止後は、捕鯨そのものが衰退し、鯨産業は壊滅的な打撃を受けています。ただ、鯨は、今も芸能や食の中に伝統文化として生き続けています。

そうした中で、小出さんが「鯨」を主題として、さまざまな土鈴民芸品づくりに取り組む、今では十七種類もの民芸品を創出しています。そして、小・中学生や観光客を対象にした、鯨土鈴の絵付け体験や土鈴づくりの指導にあたるなど、文化の向上や地域おこしに貢献しています。

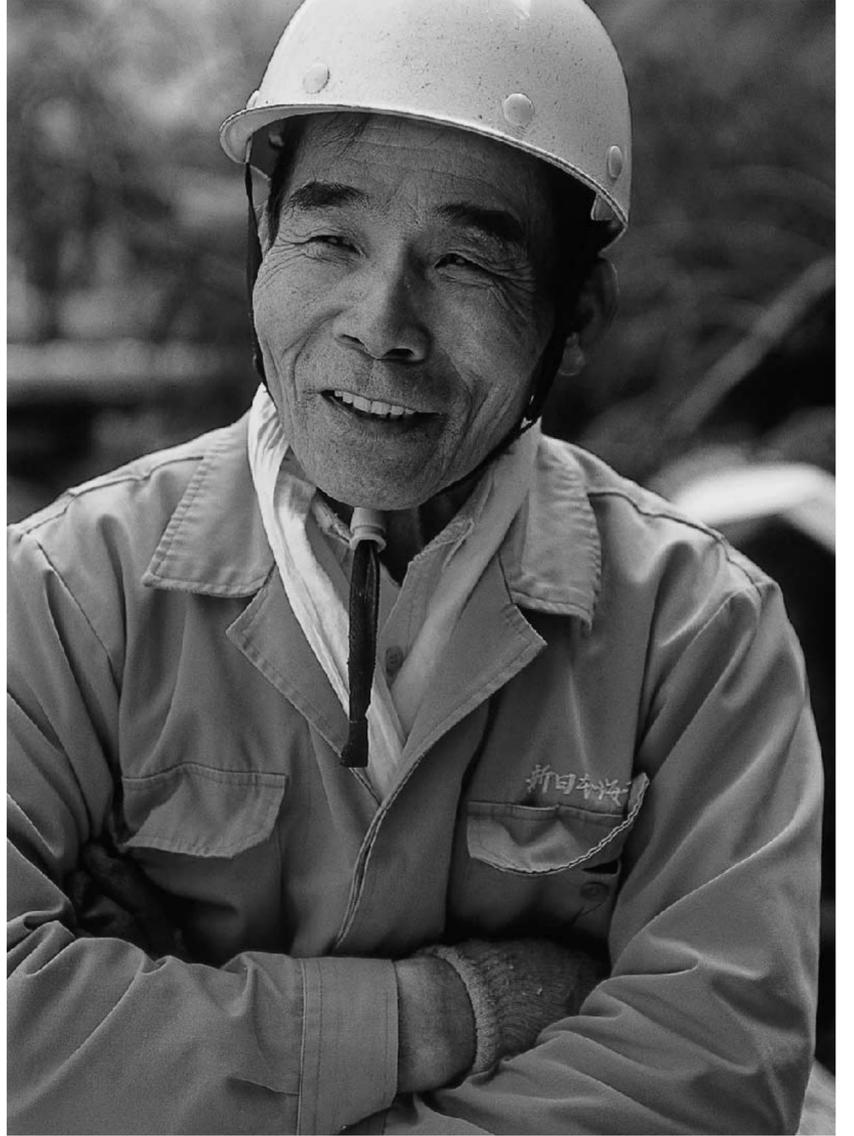
この度、ふるさと名人「紀の人賞」を受賞されたことは、当を得たものであり、心からの祝意を捧げたいと存じます。また、小出さんは、太地町商工会の副会長として、地場産業や商工業の発展に寄与されています。抱壺庵(小出さんの工房)の製品が太地町の各品として、更に皆様方に愛用され、その力を今後も地域発展の為に尽くして参りますようお願い申し上げます。

企画制作/和歌山毎日広告社

- わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します
- 太地町
 - 太地町商工会
 - 太地町漁業協同組合
 - JAみくまの
 - 太地くじら浜公園
 - 太地町営国民宿舎 白鯨
 - 落合博満野球記念館
 - 二洋建設(株)
 - I・B・W美容専門学校
 - アサヒビール 和歌山支店
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - 儀礼文化の現代創造 (株)有田葬祭
 - (株)岡崎自動車教習所
 - 御葬儀専門 沖(株)
 - フレッシュミュー オソメ
 - オリエントホームズ(株)
 - おいしき田舎(株) 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設(株)
 - (株)サンレックス
 - (株)島精機製作所
 - (株)テレビ和歌山
 - 野村證券(株) 和歌山支店
 - 葬儀専門 (株)橋爪屋
 - 紀三井寺 はやし
 - (株)松源
 - (株)宮井新聞舗
 - 本家 宮坂仏壇店
 - 安田生命 和歌山支社
 - 吉村眼科
 - (株)和歌山印刷所
 - (株)和歌山放送
 - 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 ⑮

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の名人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートしてお知らせする広報報告書です。



photographer/照井 四郎

堺 隆夫 Takao Sakai
グリーンキーパー、植林、保育などに豊富な経験と卓越した技術を活かし、地域の森林づくりをリードしている。また、新たなグリーンキーパー育成のため、たゆまぬ情熱をもってターナー若手後継者の育成指導に努めている。70歳。

若手を育てる

山の仕事師。

和歌山の中央部を東西に蛇行して流れる日高川。その中流域の、スギやヒノキが高く生い茂る山林にくりりと囲まれたようにして美山村はあった。今回の名人、堺隆夫さんはその山を育む、新たな植林を施しながら、長い間、地域の森林づくりに携わってきた。現役のグリーンキーパー（森林作業員）である。

「ここも皆大変なんやうけど、こういう制度の持っていないところは、仕事が残っていきばっかりやから、私らみたいな仕事師が、出かけて行って、山の管理のお手伝いをしてます」と、堺さん。この制度とは、林業労働者の高齢化がすすみ、後継者不足に悩むなか、その抜本的な雇用対策として、美山村が独自に策定したグリーンキーパー募集のための基金制度のことである。

後継者が地元では育たず、なんとかしてほしいと、村長に提言したグリーンキーパー支援事業から、若手グリーンキーパーを育てていくために設けられた制度なんです。そのときに、事務局でデータを見て、今後一〇年間でどれくらいの人が高齢を理由に辞めていくか、山を管理していかないとかなんか、調べるんですよ。それなら、まあ二〇人くらいは減っていくだろうと。その不足分を補足するために、村外から人を募集したわけです」と、堺さんは穏やかな口調で淡々と説明してくれた。

「森林組合がグリーンキーパーを新規に採用するときに、採用年か三二年間、その間に新人にかかる給料や支度金、諸手当といった経費の二分の一を村が補助してくれる。募集をかけてから丸八年たつたわけやけど、定着率はじつは高いですよ。ターナーの人も一人いてるが、ほとんどの人がいわゆるエタ



入らがやるのを見て、自分で覚えていったらもうよほかないな、と、じつじつと「ぶんぶん」の音のついてるマツを持たせて、下刈りもやってもらって、山にはいっぱい草が生えて、畑やないんやから、石もあれば木の根がもえる。草で足元が見えんから、低く刈らんと山は歩けんのよ。自分が歩くところには、見えるように低く刈らんと、低く刈れりゃ、下の石まで刈って、ノコの歯とほしよ。そやから、すり減ったノコの目立って来んとあかんよな。いろいろするところあるよ。下刈りは、山の裾から刈っていく。上から刈ったら、刈った草が、かぶさってきよ。作業の手順全体を頭に入れてかんよあかん。朝、山に入ると、まず弁当を広い作業場の真ん中にまとめて置いてくんと、それぞれが四方に散って、昼になつた時点で弁当の置いてある地点の近くまで戻ってこれるよ。段取りつけて仕事するよな。」

「山仕事は効率やからね、よう刈る人、手の遅い人があつたとして、よう刈る人がどんどん攻めてきて、自分の頭の上をかすめたらあかんので、そんなときは状況判断して早めに逃げる。刈り払いの機械だけでも柄を入れて持つと、メートル二、三十はあるやろ。使うときは、機械から五メートル以上は離れとかなと危ないですよ。反発して、木のカブ端や石が飛んできて当たったらケガする。」

「山仕事は効率やからね、よう刈る人、手の遅い人があつたとして、よう刈る人がどんどん攻めてきて、自分の頭の上をかすめたらあかんので、そんなときは状況判断して早めに逃げる。刈り払いの機械だけでも柄を入れて持つと、メートル二、三十はあるやろ。使うときは、機械から五メートル以上は離れとかなと危ないですよ。反発して、木のカブ端や石が飛んできて当たったらケガする。」



美山村長 池本 功 さん

この度、堺さんにおかれましては、平成十四年ふるさと名人「紀の名人」賞を受賞され、誠にありがとうございます。

堺さんは昭和四十六年に森林組合作業班員となられ、以来、森林組合が受託する新植、下刈、枝打、除伐、間伐等の施業に従事。その卓越した技術をもって地域造林事業に大きく貢献されました。またその間に得た間伐、伐採、搬出技術は特に優れ、他の労働班員の模範ともなっています。

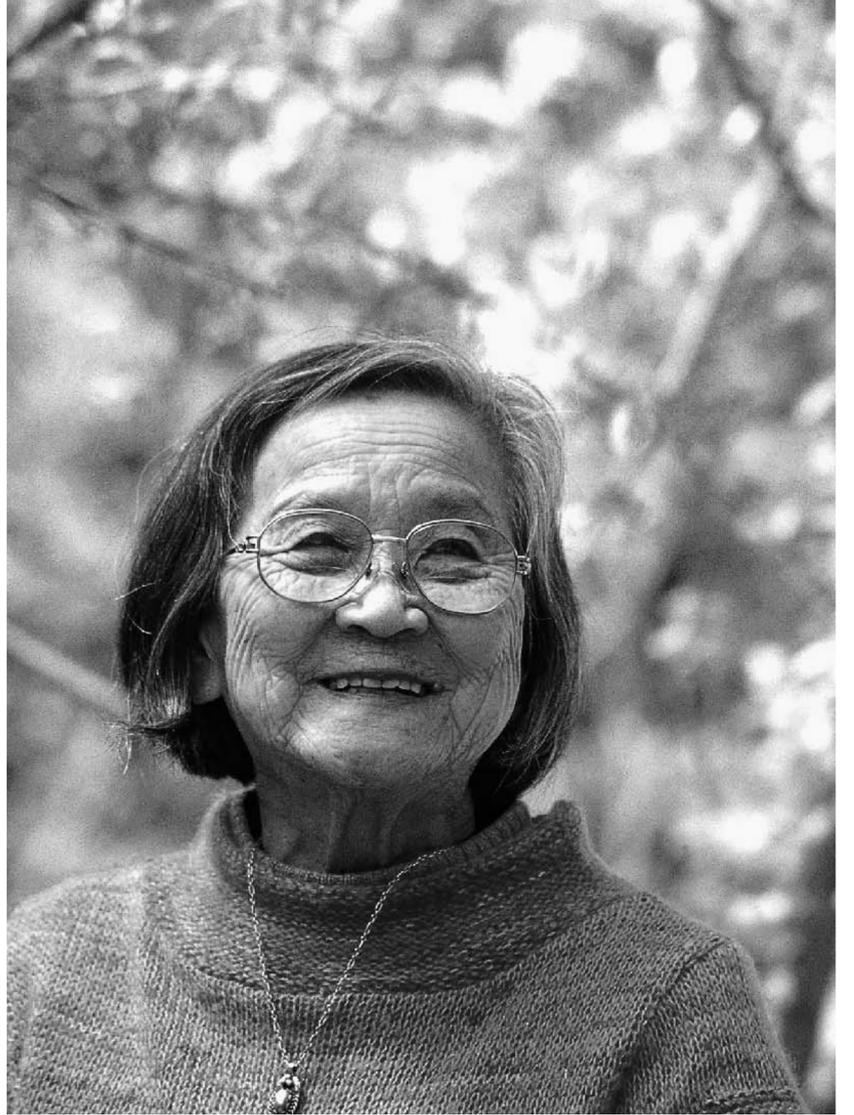
「皆それなりに覚悟して来てるから、自然のなかで働く喜びとか爽快感などを耳にすることはあっても、彼らから、仕事のグチとか悩みごとなど聞いたことないね。それに地元の人達の協力もあって、日常生活の面でも、

- わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します
- 美山村
 - 美山村議会
 - 美山村商工会
 - 美山村森林組合
 - I・B・W美容専門学校
 - アサヒビール 和歌山支店
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - 儀礼文化の現代創造 (株)有田葬祭
 - (株)岡崎自動車教習所
 - 御葬儀専門 沖 (株)
 - フレッシュミート オソメ
 - オリエントホームズ (株)
 - おいしき田舎への 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設 (株)
 - (株)サンレックス
 - (株)島精機製作所
 - (株)テレビ和歌山
 - 野村證券 (株) 和歌山支店
 - ご葬儀専門 (株)橋爪屋
 - 紀三井寺 はやし
 - (株)松源
 - (株)宮井新聞舗
 - 本家 宮坂仏壇店
 - 安田生命 和歌山支社
 - 吉村眼科
 - (株)和歌山印刷所
 - (株)和歌山放送
 - 和歌山ヤナセ (株)

企画制作/和歌山毎日広告社

紀の名人録 ⑬

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広聴報告書です。



photographer 照井 四郎

小切間 喜久子 Kikuko Kogirima

地域に伝わる民話や昔話を後世に伝えるべく、各地に出向いて子ども達に話しかけ続ける。紙芝居を使ったり、地方紙への投稿を続けるなど、地域の語り部として地道に活躍。「田辺おはなしの会」のメンバーでもある。82歳。

昔話を語り継ぐ魂の伝承師。

今回の名人 小切間喜久子さんは田辺湾を見下ろす高台にある自宅を待っていてくださった。うすらかな春の日差しを受けて新緑に映える庭先では、かりんの木がほんのりと紅い可憐な花をつけていた。

「いいお天気になりました」と、語り部名人の小切間さん。おだやかな表情で、挨拶なまめ、その振る舞いがこの季節とよく似合っていました。

と、熱心に勉強会をかきまわす。「私の小学校時代には、作文の先生がお話になって、文章のつくり方が、お話の伝え方を教えていただきましたが、いまになってしみじみと思うことは、やはりお話を誰かに語って聞かせる、あるいはそれを文章にまとめて伝えるという作業は、なかなか骨の折れることだと思いますね」と、晴れやかに笑う。

「いまも時々、学校の課外授業で呼ばれて、子どもたちを前に、お話しを聞いてあげる機会がたまにあります。ある小学校で不知庵（いじいぢい）にまつわるお話をさせていたいただいた時、そのあと返ってきた感想文をよみかきしてあります。私はお話を聞いて、お話をしたつもりが、子どもたちの耳には石の道路（いしのみち）と聞き伝わって、おもしろい、これは、と、返答する（てきまつ）ていました」

「けれど、やはり私は子どもたちに、お話を聞かせるのが大好きで、短いお話であっても、興味深そうな顔つきで、じっと耳を傾けてくれる、あの瞬間がたまらないです」

「戦時中のお話でございます。私にはひとり娘がおりますが、この娘がまだお腹にいた時分、赤紙が届きましたね。主人が召集されまして、私の入院している病室からそのまなま戦地へと送られて行ってしまいました」



そして敗戦。娘が八歳になったとき、シベリアの抑留地から夫の遺骨が帰ってまいりました。どなたさんも皆同じだったとは思いますが、が、女手ひとつで子どもを育てていくのは大変でしたからね。あのころは死は必死だったんですよ」

「たづいづいで、民話というものを語るようになったが、N.T.T.の依頼で「テレビホン」民話を語り出してからと思えますが、そのあたりの経緯は、はっきりとは覚えておりません。ただ私は、もともと書くことが好きでして、土（つち）という地元の随筆（ずいひ）に入って、田（た）からいる（いる）と思（おも）つて書いてきつ（き）つておりました。そのうちお仲間もたくさん増えましてね、下手の横好きだと、娘にはよく冷やかされたのですが、俳句をひねってみたり、謡曲をかじってみたりとお友だちとわいわいやってあります。この部屋に皆さんを招いて、七草の行事などもやったりしたんですよ」と、楽しそうに笑った。

「原稿用紙にして二枚から三枚半程度でしょうか、少しずつ紹介してきたつもりが、いまだ百十篇ほどになってしまいました。私のお話には、味のあるカット画が毎回添えられてありましてね、なかなか好評のようですよ。ありがたいことです」



田辺市



田辺市長 脇中 孝 さん

地の匂いをするようなお話が好きですね。土地の言葉といえますか、田辺弁にもこだわってきたいのです。だからお話を、その種探しがいちばん苦労いたします」

この地方に伝わる民話や昔話を発掘し、後世へと伝え残して行くこと、自らが「語り部」となって子供たちに話しかけ続ける活動が続いている小切間喜久子さんが、和歌山県ふるさと名人「紀の人」賞を受賞されました。小切間さんにご受賞を心からお慶び申し上げます。

民話や昔話はその土地の歴史や風土の中から生まれ、代々語り伝えられてきた素晴らしい地方文化の一つであり、地域の「宝」でもあります。幼い頃、祖父母や近所のお年寄りが話してくれるお話に心踊らせた記憶を、誰しもの片隅に持っていることだと思います。そして、そうした民話や昔話が社会生活を営むうえでの戒めやゆり、人としての優しさや謙虚さ、生活の知恵など多くのものを、私たちは知らず知らずのうちに学び取ってきました。人として最も大切にしなければならない「根っこ」の部分がそこには溢れていたように思います。しかし、残念なことに社会の変わり変わりとともにこうした民話や昔話も徐々に忘れられ、時代の片隅に追いやられてしまったのが現実です。

小切間さんは市立図書館での「おはなしの会」の開催をはじめ、各地に出向いて子供たちに民話や昔話を話しかける活動の傍ら、地元の地方紙にも紹介を続けるなど大切な地方文化の発掘と伝承に活躍されています。すくなくは結果の出ない地道な活動ですが、こつこつとこの積み重ねが、次の時代を担う子供たちの豊かな心を育む大切な肥しになるのだと思います。小切間さんの活動が更に大きく広がっていくことを願い、今後ますますのご活躍を心から期待申し上げます。

企画制作／和歌山毎日広告社

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 田辺市
- 田辺市議会
- 田辺市観光協会
- 田辺商工会議所
- 株梅屋
- 田辺運送株
- 株テノコライフ
- 南和総業株
- I・B・W美容専門学校
- アサヒビール 和歌山支店
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 儀礼文化の現代創造 株有田葬祭
- 株岡崎自動車教習所
- 御葬儀専門 沖 株
- あなたの街の 株オークワ
- フレッシュマーケット オソメ
- オリエントホームズ株
- おいしさ田舎うへろ 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設株
- 株サンレックス
- 株島精機製作所
- 株第一製版印刷
- 株テレビ和歌山
- 野村證券株 和歌山支店
- ご葬儀専門 株橋爪屋
- 和記井寺 はやし
- 株松源
- 株宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 安田生命 和歌山支社
- 吉村眼科
- 株和歌山印刷所
- 株和歌山放送
- 和歌山ヤナセ株

紀の名人録 ⑬

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリスタップしてお知らせする広聴報告書です。



photographer/照井 四郎

田中 準三 Junzo Tanaka

左官工。防火や断熱性、湿気調整に効果があり、景観にマッチした漆喰工法の左官技術を持ち、その道一筋60年にわたり活躍。粉河寺はじめ文化財建造物の保存修理を数多く手掛けた。現役引退後、匠の「技」の伝承を行う。8歳。

ぬくもりを感じる 漆喰の復元師。

粉河町役場の応接室で、その人はすでに待っておられた。今回の名人、田中準三さんである。

「身体の調子が思わしくなく、息子に代を譲り、八年ほど前に仕事をやめてからは、ゆっくりさせてもらってます」と、穏やかな表情で田中さんは微笑んだ。色良く日焼けしたその顔は、本業である左官業の他に、長年ずっと続けてこられた農業者としての、それである。

「昔のことですが、少しお話をさせてくださいとね、大東亜戦争が終わった次の年、昭和二十一年に、私は復員してきました。シンガポールをさらに南下したところ、赤道近くのレンバン島という小さな島で、おおよそ一年間の抑留生活を経験しました。日本に帰ってきたときには、相当衰弱してあったなあ、働くところもなく、世間も混乱してありましたが、それで、ジャガ芋をつくった

り、百姓しながらしばらくは生活してありました。見習い工にもかわらず、小遣い程度はあったですが、きちんと給金を貰ってました。私らみたいな職人はね、仕事覚えてなんぼですよ、そやから給金ももらえるのが励みになって、ありがたかったですね。」

「戦争が終わって、二、三年たつ、世の中が少し落ち着きを取り戻したころ、百姓の片手間にほろほろ左官の仕事をするようになってきたのは何でもやりました。本来、左官業は仕上げ工事というが、建築工事の仕上げの部分を引き受けるものやうに、私は頼まれれば、屋根裏の修繕から家の基礎工事の手伝いまで何でもやりましたよ」と、田中さんは笑う。

「仕事を始めたころは一般の住宅が多かったです。昭和の五十年代後半あたりから、文化財といふんです、まちの歴史ある古い建物とか地元神社の修復工事といふことも

ポツポツ手がけさせてもらうようになりまして、と話す田中準三さんは、粉河町を代表する名刺、粉河寺の境内周囲の土塀修繕に、ある時期から携わるようになった。

左官業の歴史はたいへん古く、奈良時代にはすでにその技術は確立されていたといわれている。さらに日本では、戦国時代に城郭建築のために石灰と海草や川砂などを混ぜてつかる独自の漆喰工法が大きく発達する。城の建築に漆喰が使われたのは、もちろんそのすぐれた防火性と耐久性のためだが、こうした長所を生かして、江戸時代になると、裕福な商人屋敷の土蔵や神社仏閣などにも漆喰工法が多く用いられるようになった。

「いまは、すべて混ぜり合ったものが売られていますが、私はドンゴロス（麻袋）の繊維を細かく裂いたモノを石灰に混ぜて使いました。漆喰はその日の天候や季節によって固まり方がぜんぜん違ってくるから、本来、材料の割合を加減、混ぜ加減がなかなか難しいんですよ。私ら数字使ったり、図面だけで仕事するんとは違ってますよ。結局はカンですわ。パツと一瞬にして状況を判断できる、職人のカンがすべてモノをいう。コテの使い方ひとつ取ってみても、できるだけ薄く仕上げていくといふところに、技の差が出てきますからね。」

長い年月を経て、壊れかけていた土塀の修繕を請け負うことの多かった粉河寺の境内では、もちろんシンプルで白壁を再現させることが主眼であったが、その一部、京都御所の築地と同じく五本の横筋が入った淡い黄土色の美しい土塀があった。これも田中準三さんの手がけたものである。

本堂は江戸時代中期の檜材によって建てられた代表的建築物で、高さが三十三メートルあり、西国三十三ヶ所の中で最大の大きさを誇る。風格たつた大屋根は、一重屋根の礼堂（二重屋根の正堂）が結合して、めずらしい複合仏堂の形式になっている。その本堂の腐朽を抑えるために、廊の床下は漆喰で固められ、敷地からの湿気を防ぐよう工夫が施されている。いまその補修工事を任されているが、他にも、田中準三さんの子息の敬夫さんである。

「義父も義弟も、同じ職業を選びながら、仕事についてはあまり多くを語りたがりませ

ん。やり方もぜんぜん違います。お互い頑固ですわね。私は勤め人でしたから、そのあたりの機微は到底わかりませんが、これが職人といふものかと、二人を見ていると納得してしまいますよ。面白いでしょ、お父に付き添ってこられた娘婿の脇田幸和さんは可笑しそつに笑う。

「家が近いですからね、散歩方々よくお参りにきます。緑が多くて、たいへん庭の美しいお寺ですからね。青葉は、やはり自分が手がけた土塀などは気になりますよ。ああ、ちゃんともつとるか、なんて言いながら顔を近づけていって、ヒヒ割れないか、欠け落ちはないか、傷み具合を調べてしまいます」と、田中さんは愉快そうに小さく声を立てて笑った。

近頃は、人工的なコンクリートの建物が増えて寂しい感じがするが、田中さんに案内されながら一緒にゆつくりと粉河寺を歩いてみると、昔ながらの日本の建物には温かみのある人間らしい味わいがあると思えた。



粉河町長 服部 一 さん

この度、田中さんにおかれましては、平成14年ふるさと名人「紀の人賞」を受賞され、誠にありがとうございます。

田中さんは、大阪で左官工の修業をされた温厚な性格の中、職人としての信念を持ち、80有余年にわたり左官一筋に活躍されて参りました。その間、旧粉河小学校舎をはじめ、旧町内の古い屋敷の土塀・寺院の漆喰の外壁等の修復に携わられ、本町の古くからの家並みと外壁の景観の保存に大いに活躍されてまいりました。

特に西国三番の札所である粉河寺の漆喰壁の塗装は、田中さんの左官工として特に優秀な技巧が生かされたものであり、その優れた塗法は、「和歌山県の諸職」に、本県における優れた塗法伝承者として紹介されております。

現在は旧工法・旧様式を踏襲すべく、後継者の育成・伝承活動に尽力され、郷土文化の向上に大きく貢献されております。このように、田中さんは「ふるさと名人」にふさわしい粉河町が誇る大変貴重な人材であり、これからも健康にご留意され、活躍されることをお祈りいたします。

企画制作/和歌山毎日広告社

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 粉河町
- 粉河町議会
- 粉河町観光協会
- 錦藩三番 (有)楠酒販
- 社会福祉法人 高陽会
- (株)松源 粉河店
- I・B・W美容専門学校
- アサヒビール 和歌山支店
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 備礼文化の現代創造 (株)有田葬祭
- (株)岡崎自動車教習所
- 御葬儀専門 沖 (株)
- フレッシュミート オソメ
- オリエントホームズ (株)
- おいさ田中 (株) 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設 (株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券 (和歌山支店)
- ご葬儀専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 安田生命 和歌山支社
- 吉村眼科
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送
- 和歌山ヤナセ (株)

紀の名人録 ⑱

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の名人録」。貴の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートしてお知らせする広報報告書です。

清流に立ち プロの鮎釣り師。



photographer/照井 四郎

森 清
Kiyoshi Mori
鮎釣り名人。幼少から清流「日置川」に親しみ、「鮎釣り」の技術を身につける。地元で民宿業を営みながら、「シマノ」の専属インストラクターを務め、全国の清流で活躍するとともに、地元の釣りイベントを盛り上げている。46歳。

まちの中心を流れる日置川は、和歌山南部の山間を五十七キロメートルにわたって南流して、紀伊水道へと注ぐ。今回の名人、森清さんは、主にこの日置川をホームグラウンドとして活躍する。プロのアユ釣り師である。

「私は仕事柄、九州、四国、東海、関東など、いろいろなと全国各地を渡り歩いてきました。この日置川に勝る川は未だに見つかっていません。間違いなくトップレベルです。おそらく全国でも三本の指に入るでしょう」と、自信をもって森さんは答える。

「私がいつのまにかですが、この川は全国に誇れますよ。まずね、景色がいい。人工的なものが少ないし、川の色がね、他の川ほどこか茶色っぽくないです。二は美しい深いグリーンなんです。平野がなく、周りの山の色がすぐ近くに迫っていて、水面に映り込んでいるんですよ。」

「水質的にも、上流にダムを抱えている川にしては良いほうでしょうね。釣れるアユの色も平均以上に美味しーと思いますよ」と、お話しくださった森さんの口調はムダがなく、あくまでも明瞭である。

河口近くの砂地の広い川原を横目に見ながらクルマで通り、蛇行をくりかえしながら、日置川の中流域へ行く。軽やかな川音をたて、目下におだやかな瀬の流れる大という集落に、森さんの住まいはあった。今年五月に改築したばかりの民宿兼喫茶ルーム「森のおやど」は、清涼な木の香りが残っていた。シーズンともなれば、ここを訪れる大勢の釣り客のために、プロの釣り師である森さんは、オトリアユを提供したり、道具についてアドバイスしたり、釣りに関するさまざまな相談ごとにも乗ってあげるといふ。

「といっても、私は基本的には何も教えませんよ。習いにくる人のなかには、ガツカリする人もたまにはいらっしゃいますが、釣りはご自身でたづねたり体験してもらわんと。川で、私ができることを参考に覚えてもらうんですよ。」

「アユは姿が美しく、釣り味もええし、食へても美味しいし、最高の清流魚でしょう。釣り方にもいろいろあって、ドブ釣り、ころがし、ひっかけ、流し、あるいは網で獲るといった方法もありますが、川によっては禁止されているものもあります。それに醍醐味からいって、やっぱり生きたオトリをつかっ、友釣りに勝る釣方はないんじゃないでしょうか。」

「あ、エサ釣りとは違つて、釣りはちょっと特殊なだけに初心者にはムズカシイところもあるかも知れませんが、でもほかの釣りでは、到底味わえない面白さがありますし、トモアユ、生きたアユを弱らせな



いようにして、いかに上手に泳がせるかなど、入ってあげば奥は深く、学ぶことがいっぱいあるんですね。」

春、アユは群れになって川に戻ってくる。川に上ってやがて成魚になると、主食として石底に付いたコケを食べるために、川に縄張りを持つようになる。

「アユはね、自分の縄張りに入ってきた別のアユを、追い払おうとする習性があります。この時、相手のハラなどに体当たりして攻撃を仕掛けてくるんですが、この習性を利用して釣りが、友釣りです。」

このオトリを上手に使いこなせば、一人前である。自分の思うようにオトリが泳いでくれば、あとは竿を動かすだけでアユが釣れるようになる。オトリのアユはできるだけ元気なものを、弱らせないようにする。オトリを仕掛けたら、手前から、そのまま、オトリアユを逃がしてやる感覚でミチ糸の張りの強弱を調整しながら、あくまでもオトリアユが自然に泳いでいるように演出しなければならぬ。これは感覚的な事なので、練習が必要であり、これが出来れば、友釣りは殆どマスターできたことになる。アユがかかる、竿先がグググとくる。アタリがあったら、竿を立て、アユを浮かせて、その場で、二匹のアユを、「引き抜き」で空中輸送してタマに納める。以前は寄せて取りこんでいたがアユの弱り方や、釣り場を荒らさない等の理由で、「引き抜き」が主流となっている。

「私は友釣りしかやりません。というよりも、私が所属するJPA（日本プロアユ釣り協会）は、まずプロとしてのライセンスが必要で、すし（平成3年に取得）、全国のプロたちが集まって友釣りの技を競うジャパン・オープン・トーナメントは、ひとつの大きな目標となっていますからね。」

お客さんには、できるだけ元気のいいオトリを提供する森さんは、自分が川に入って釣るときは、その反対に意識して弱っているアユを選んで仕掛けるという。

「いいアユもって来たら、誰でも釣れます。私は条件が悪い、弱ったアユでやらんと練習になりませんか。試合の時のイメージで釣りますからね。」

今年の七月月中旬には、兵庫県の揖保川で全国大会があるのだが、森さんは今年には予選からエントリーしないと決めていた。

「子供も出来たし、店もやり変えたところやし、今、バタバタしてて、今、今回は不参加にさせていただきます。」

という森さん。実は昭和六十年、鮎釣りのシマノジャパンカップが日置川で開催されたときの初代チャンピオンである。

「兄貴も上手いんですよ。それに私の親父がもともと川漁師みたいな人だからね。小さいころは兄貴や親父さんに連れられて、よく

川釣りに行きました。あるときね、私がプロになる前やっただけ、話の勢いで、親父と対決することがあったんですよ。そのころ親父はしばらく止めていたけど、腕には自信があったし、まだ勝てると思ってたんですよ。この下の川原で、川をばさんで互い対面して竿を入れたんやけど、そやね四時間くらいやっただんや。八〇対一〇ほどのスコア差がつきました。ちょっと気の毒やっただ、親父の完敗やっただんやけど、悔しがらなげな息子も成長ぶりを喜んでくれましたね。」

それ以来、友釣りの竿を一切納めてしまつたという。若旦那さんは、今も現役の川漁師として川蟹やウナギを捕っている。また、昨年十一月に産まれた一人息子の亮太くんにも早くも釣りを教えようとする森さんのパパぶり。に多少困惑気味の、奥さまの優子さんに向かつて、「でも、やっぱり蛙の子は蛙やからなあ」と森さんはつぶやいてみせた。



日置川町



日置川町長 前 義郎 さん

美しい自然と、温暖な気候に恵まれたまち日置川町。その中を、悠々と日置川が流れています。

日置川では、毎年、日置川鮎釣り大会や全日本アユ釣り王座決定戦が、日置川流域にある向平キャンプ村を主会場として行われるなど、県内外から多くの鮎釣りファンが訪れております。また此の程全国の「天然アユのほほ一〇〇名川」の中の一つにも認定されたところでもあります。

そうした環境の中に生まれ育つた森清さんが、この度、鮎釣り名人として、ふるさと名人「紀の人名」を受賞されました。日置川町として誇りとするとともに、心からお喜び申し上げます。

また、森清さんは、自営業として民宿を営んでおり、宿泊客や食事に来られた方々に、鮎釣りの場所、また鮎の調理方法など丁寧に御指導され大変喜ばれております。

これからも日置川の鮎釣り名人としてこの地を訪れる方々のお世話を願いつつ、地域発展の為御尽力下さいます様願つてやみません。

企画制作/和歌山毎日広告社

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 日置川町
- 日置川町観光協会
- 日置川町漁業協同組合
- 日置川民宿組合
- 大辺路森林組合
- 紀南農業協同組合
- 梅屋 日置川工場
- 自然がおいしい空気がおいしい温泉がおいしい温泉
- 和歌山県美容専門学校
- ASAヒール 和歌山支店
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 儀礼文化の現代創造 (株)有田葬祭
- (株)岡崎自動車教習所
- 御葬儀専門 沖 (株)
- フレッシュミート オソメ
- オリエントホームズ (株)
- おいしさ田舎へり 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設 (株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券 (株) 和歌山支店
- ご葬儀専門 (株)橋爪屋
- 紀井寺 はやし
- (株)松源
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 安田生命 和歌山支社
- 吉村眼科
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送
- 和歌山ヤナセ (株)

紀の名人録 ⑩

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の名人録」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートしてお知らせする広報報告書です。

青洲を演じ、愛す 心の表現者たち。



劇団 華岡青洲 photoographer/照井 四郎

前列右より、吉田臣子さん、園田三鈴さん、北谷人美さん、西山芳子さん、中列右より、東中桂子さん、長岡公子さん、金田玲子さん、後列右より、平井侑子さん、井上清美さん、佐伯智子さん。当日の欠席者は、北田伸美さん、谷口鈴代さん、平田和美さん、木村博子さん他に広報、記録、音づくり、着付など、町の大勢の方々がささえている。

インタビューは「春林軒」の主屋の内にあり、茶の間・炊事場という場所の一角で行われた。「春林軒」とは、医聖・華岡青洲が住まい兼診療所として使っていた建物群のことで、今は青洲の里に復元され、残された資料を元に、手術風景など、人形と音響を使って、かつての様子が忠実に再現されている。今回のふるさと名人、「劇団 華岡青洲」の皆さんは、劇団名が背中に入っているお揃いのTシャツを着て待ってくださっていた。

「その名前の示す通り、私たちの出し物は華岡青洲に限ります。こんな変わった劇団、ちょっと他にはないわね」と、北谷さんが笑う。屈託のない、楽しそうな雰囲気が続く。

「劇団の発足は平成八年ですが、その三年前、平成六年と七年、私、那賀町の婦人会の会長させてもらってたんです。二〇二〇年までの皆さんは、大方がその当時、私と一緒に活動

していた婦人会の役員さんたちでしてね。平成七年の三月で任期満了となって、お別れ会をしようと思ったとき、せっかくなので、何かカタチを変えて、もっと続けようやないかと話したんです」と、北谷さん。

「当時、二〇二〇年までの平井先生が、町の生涯学習課で事務局をなさっておられましてね。相談にあがると、那賀町には私たちの尊敬する立派な華岡青洲先生がいっぱいいるんですよ。なにかちょっと考えたらどうなんかな、ほな劇みたいなんもしょうか。町民の方にも青洲先生のこと、もっと判ってもらえるし、私たちも勉強になるからよって、こんな風な経緯で始まったんです」

平成八年度、和歌山県で、きらめく女性支援事業が開始された。審査の末、同劇団は「きらめく那賀町女性集い実行委員会」として認められ、助成を受けながらの旗揚げとい

う幸運にも恵まれた。スタート時には文庫・食文化部門もあり、現在は演劇部門が活動を続けている。

「劇いつたかて、どないするん、ほな、ト（ノボ）いちから始めたらどうなん、主婦はつかりの素人集団なんやし、平井先生のそんな一言からスタートしたんです」と、車座のなかの誰かが会話に加わる。

「ト（ノボ）いち」というのは、有吉佐和子先生の戯曲の中に、小井ちゃん（トノボ）を取り行つて、池にはまつて死んだという場面が出てくるんです。始めは釣針の先にトノボを括りつけて飛ばしました。そんな気楽な気持ちになつて舞台上に立つたらいんじやないかと、少しアドバースをさせていたいたんです」と、裏方として劇団を束ねる平井侑子さんが笑いながら説明を加えてくださる。

「最初から、ほとんど手作りですね。本毛

のカツラになったのも、ついこの間の公演からです。舞台衣裳の着物などは、出演者が各自で持ち寄ったものです。大道員や小道員は、手分けして探し回り、町内の古い民家などからお借りしてきました」

「上演時間は一時間四十分です。アドリブが入るとさらに一〇分ほど延びます」と、笑う代表の北谷さんは、こう話す。

「見ていただいたらお判りのように、私はこの劇団を立ち上げて、何が良かったかと言えど、ほんとうに素晴らしい仲間たちと出会えたこと。その一言に尽きますね。もともと仲は良かったのですが、演劇という創作活動をつづけて、息を一つに合わせながら皆でモノをつづけていくということが、生意気な言い方ですが、それぞれに心の成長と豊かさを感じさせてくれたと思うんです。ありがたいことに家族の理解と協力を得られたことも大きかったですね。夫や息子、娘たち、家族全員が支えてくれてます」

「私は、ちよつと傍らに皆さんの奮闘ぶりを見させていただく立場にあります。見ていて面白いですよ。練習が始まりますと、ああ、この人は今日は家で誰かと衝突しているなあと、言葉が活き活きと楽しそうに出ていくと、きつとええことあったんやろなあ、出来ればええよくない時は、仕事か何かで疲れているんやろなあと感じたり、お母さん方の劇に正直に出ています」

自分たちの活動が少しでも那賀町や青洲先生のPRとしてお役立ちできれば本望やという、そんな純真な気持ちでいつも一生懸命取り組んでいらつしやいます。調子を見ながら、役もどんどん入れ替わりますしね。皆さん、劇そのものを心から楽しんでおられますよ」と、平井さんは楽しそうに語る。

「劇をスタートした時は、たまたま教育委員会にあつたものを台本として拝借しまして、私たちは、華岡青洲、でいくんやいうて、大胆にも、妻」という一文字を取つて、発表を続けておりました。二年前のことですが、群馬県で開催された第十六回全国国民文化祭に県代表として参加させていただいたのを機会に、有吉佐和子原作・オリジナル脚本に若干の変更を加えたものを使用することになりました。有吉玉青様よりお許しをいただきまして、現在は、華岡青洲の妻」として公演できるよつになりました。毎回、作者を偲び一生懸命発表しております



本来、有吉佐和子の戯曲「華岡青洲の妻」の一つの楽しみ方は、青洲をめぐる姑と嫁、於継と加恵との、凄まじいまでの女の争いと心の葛藤が主眼だが、ドロドロとした心理劇の面白さは、「プロの俳優さんにお任せすること」と、北谷さんたちが目指す舞台は、「青洲先生の人間的魅力、そして青洲先生を命がけで支えた、家族や周りの人たちの献身的な愛情を全面的に押し出していきたい」と、そして、「現在忘れがちな人間の結びつきを演じた」と会長北谷さんは言う。

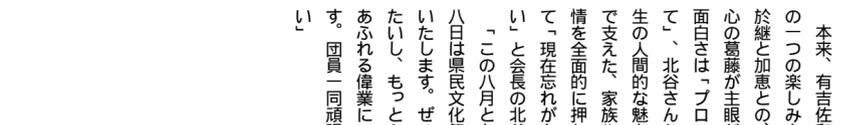
「この八月と九月に公演があります。九月八日は県民文化祭の参加として打田町で公演いたします。ぜひ多くの方々に見ていただきたいし、もっともっと華岡青洲先生の人間味あふれる偉業について知っていただきたいです。団員一同頑張ります」と、さあ越えよう

この度、劇団「華岡青洲」の皆様が平成14年ふるさと名人「紀の名人賞」を受賞され、誠にありがとうございます。

同劇団は、平成8年度、和歌山県のきらめく女性支援事業の助成を受け、きらめく那賀町女性の集い実行委員会、の演劇部門としてスタート、那賀町が世界に誇る華岡青洲の偉業とその「人となり」を舞台で発表したのを始まりに30人前後の主婦たちで劇団を発足されました。

役づくりや、当時の言葉、着物など演劇に必要な情報収集や練習に励んでこられ、地元小中学校や公民館、老人ホームへの慰問公演をはじめ、和歌山県立図書館や和歌山マリーナシティなど40回近くもの公演を行ない、平成13年度には全国国民文化祭に県代表として出場もされ今回の受賞に至っています。

このように、「ふるさと名人」にふさわしい那賀町が誇る貴重な劇団「華岡青洲」の皆様、これからも健康に活動され、ご活躍されることをお祈りいたします。



那賀町



那賀町長 東 健児 さん

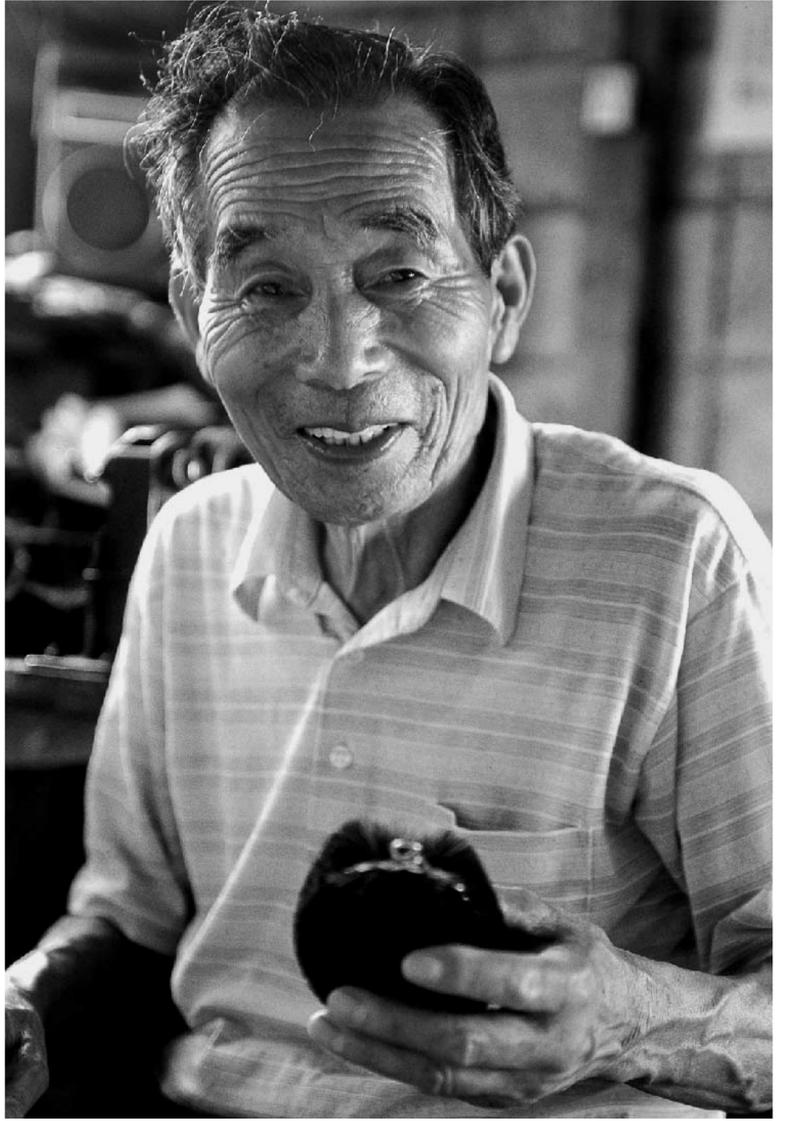
企画制作/和歌山毎日広告社

- わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します
- 那賀町
 - 財団法人 青洲の里
 - 総務部 家具のあづま
 - さかもと精肉店
 - 地域と共に 名手病院
 - 名手訪問看護ステーション
 - 特別養護老人ホーム 栄寿苑
 - （株）山崎屋
 - I・B・W 和歌山県美容専門学校
 - アサヒビール 和歌山支店
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - 儀礼文化の現代創造 (株)有田葬祭
 - (株)岡崎自動車教習所
 - 御舞備専門 沖(株)
 - あなたの街の(株)オークワ
 - フレッシュミート オソメ
 - オリエントホームズ(株)
 - おいしさ田舎へり 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設(株)
 - (株)サンレックス
 - (株)島精機製作所
 - (株)第一製版印刷
 - (株)テレビ和歌山
 - 野村證券(株) 和歌山支店
 - ご養備専門 (株)橋爪屋
 - 紀井寺 はやし
 - (株)松源 粉河店・妙寺店
 - (株)宮井新聞舗
 - 本家 宮坂仏壇店
 - 安田生命 和歌山支社
 - 吉村眼科
 - (株)和歌山印刷所
 - (株)和歌山放送
 - 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 ②

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリスタアップしてお知らせする広報報告書です。

この道一本、たわしづくり師。



photographer/照井 四郎

井澤 武二 Takeji Izawa
棕櫚皮の太い繊維の羊毛を選出し、手作業による熟練した高度な技術による「たわし」をつくり続ける。優れた洗浄機能、耐久性を持つ。また、製造技術の公開や製品の紹介等も行っている。7歳。

太平洋高気圧に日本列島はすっぽりと覆われて、これまでの冷夏がまるで嘘のように、この夏一番のうだるような暑さとなった。今回の名人、井澤武二さんは野上町下佐々にある自宅、仕事の手をとめて待っていてくださった。

「一年ほど前にもよ、大阪からテレビ局がやってきてね、うちこのたわし、取り上げたいってね、と、笑う井澤さん。自宅前に中継車がとまり、そこからスタジオとやりとりする番組にも出演した。そのほかにも広島ラジオ局が取材を申し込んできた。関西ではおなじみの、顔がよく知れた有名なタレントや芸人たちが何人か、番組のなかで井澤さんの作業場を訪ねてきたりもしたという。

「あるときね、トミーズの健さんが来ましてね、シャレでつくった珍品たわしを、面白がって大阪の道具屋筋に持って行って売ってくれたんです。タイガースたわしというね、三種類の色のちがう毛を使うってつくるといってね、僕たちも、僕たちも、僕たちがめたらあつい、誰も継ぐもんおらん、僕らが



ほれ、これ虎に見えへんか」とどこから取りだしてきたのか、見せてくださったそれは紛れもなく「虎の毛」のたわしだった。アフリカのカーナから輸入するサイザル麻、スリランカから入ってくる椰子の実のバーム、そして中国産のシロロを混ぜて、白と褐色の「虎」模様にしたという傑作である。

「三年ほど前のことやけど、優勝のことがあったやろ。それで飛ぶように千個ほどはすぐに売れたわな。でもね手間はやっぱりかかるといって、単価が安いから、正直なところ、売れてもぜんぜん儲からんよ」と、子どもころから大阪のタイガースファンでもあった井澤さんは頭をかいた。

「もつくなつてしまいました、私の兄貴が親父の代を継いで、たわしづくりをやっております。弟の私も同じ職業を選んだというかたやね、それがいつのまにやら、たわしづくりの、僕たちになつてしまつた。やめたらあつい、誰も継ぐもんおらん、僕らが

んつくるとシロロ製のたわしに人気があつたつていふのも、また事実である。「何年か前にもよ、サライという雑誌に紹介してもらったんやけど、えらいもんやね、ぜひ分けて欲しいという人が、九州から北海道まで全国から、これくらい申込みのハガキが届きましたよ」と、井澤さんは右手の親指と人差し指で、その厚さを示してみせた。

「正直な、儲けにならんよ、小売する場合は、ワンセットとツワセット注文してくれてもね、送り賃の方が高つく、気の毒なんやね、送料ごち持ちにして送ってあげたりするんやけど、そんなことやってたら持ち出しやもんや、でもね、その人らとはいまだに私、文通してまよ」と、井澤さん。天然繊維のたわしは、洗剤を使わなくても食器の油や焦げをよく落とす。油が染み込んで、ゆすぐと落ちる。そしてなによりも耐久性にすぐれている、というのが多くのファンから支持される主な理由である。さらに「肌触りが全然ちがう」と評判の井澤さんのたわしは、亀の甲羅のようにびくびくと丸くなった、たわし本体の両側に綿紐をくりつけて、身体の皮膚マッサージをするとうるむがよくなる、そんな健康たわしとしても使え、これが実は今でも隠れた人気商品の一つである。今は四国は松山、道後温泉などに卸しているそうだ。

「若くころはね、勢いに任せて千個くらいは平気で売ったこともあったけど、ひとつひとつが手作業なんやね、一日に100〜300個くらいで売れば上出来やな」と、井澤さん。自宅横にある工場には材料のシロロやバームの袋詰めが山積みされてある。作業をみせていただいた。

「今、若くころはね、勢いに任せて千個くらいは平気で売ったこともあったけど、ひとつひとつが手作業なんやね、一日に100〜300個くらいで売れば上出来やな」と、井澤さん。自宅横にある工場には材料のシロロやバームの袋詰めが山積みされてある。作業をみせていただいた。



野上町長 黒西 健司 さん

この度、井澤武二さんにおかれましては、「たわしづくり」の名人として、平成14年ふるさと名人「紀の人物」を受賞され誠にありがとうございます。

野上町のシロロ栽培の歴史は古く、室町時代に始まったといわれています。野上町はこのシロロの加工で発展してきた町です。かつてはシロロ縄やたわし、帯などがこの町から全国各地に出荷されてきました。しかし戦後、ナイロンやビロンなどの化学繊維の発達によりシロロ加工品が徐々に衰退を余儀なくされてきました。井澤武二氏は、兄が父親の跡を継いでたわしづくりをしてきたことから、学校卒業後、同じ職業を選び、以来50数年の永きにわたり、たわしづくりの腕に携わってこられました。井澤氏の作るたわしは、用途に合わせた約10種類、洗浄機能に優れ、多くの方から絶賛されています。また、町・県主催のイベント等で製造技術の公開や伝授、また、シロロ製品を紹介するなど産業推進にも活躍されています。

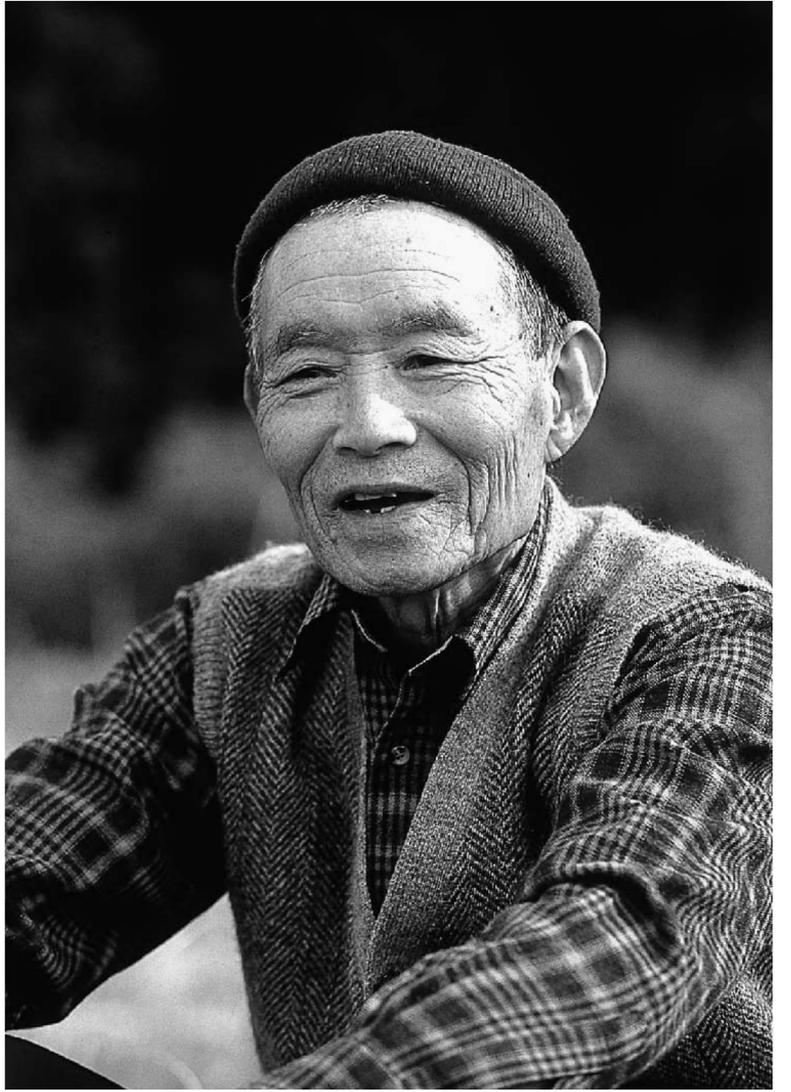
わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 野上町
- 野上町商工会
- 野上町建設業協会
- ながみね農業協同組合
- めの折願所 釜滝薬師
- 小椋リビンググリーン(株)
- 船場自動車(株)
- ファミリーファッション (有)ユリヤ
- I・B・W美容専門学校
- アサヒビール 和歌山支店
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 儀礼文化の現代創造 (株)有田葬祭
- (株)岡崎自動車教習所
- 御養備専門 沖(株)
- フレッシュミート オソメ
- オリエントホームズ(株)
- おいしひ田中(株) 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設(株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)第一製版印刷
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券(株) 和歌山支店
- ご養備専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- (株)松源 粉河店・妙寺店
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂公壇店
- 安田生命 和歌山支社
- 吉村眼科
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送
- 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 22

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の名人録」の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広報報告書です。

雲取越えをする山の語り部。



photographer/楠本 弘

萩原 重夫 Shigeo Hagiwara
地域のボランティア活動に積極的に参加するとともに、南紀熊野体験博をはじめ多くの地域イベントにおいて、語り部として活躍、文化財の保存など地域文化の振興に大きな役割を果たす。7歳。

東牟婁郡熊野川町東にお住まいの萩原重夫さんは、熊野古道の語り部である。
「大雲取と小雲取のコースが僕の専門です。八年前ほど前に、町の要請で語り部になって以来、皆さんを案内させてもらっています」と、お話を伺う萩原さんは大正十五年生まれの七十七才。秋の木洩れ陽のようなたたかいいのする人であった。

取を案内していただきますので、100回くらいは歩いてほしいです。
熊野参詣道のうち、那智山から本宮までの間の山道を雲取越えといひ、那智から小口までを大雲取、小口から請川までを小雲取と呼び、熊野古道のなかでもとくに難所だといわれておりますけれど、僕からすればけっしてそうは思いません。たしかに海拔八七メートルから六メートル近くまで一気に下る越前峠のような急峻な坂道もあって、馴れない人にとってはたいへんだろうけれど、ずいぶん道はよくなっています。歩きやすくなったと思いますよ。その証拠に、最近はいくつかの道はよく通っています。最近はいくつかの道はよく通っています。最近はいくつかの道はよく通っています。

時間は八時間ほどです。小雲取は三キロを六時間かけて踏破します。いっぺんに歩きたいへんですからね。途中、小口にある自然の家で一泊します。だから、どついても二日続けて時間を取らなければならないのです。そのへんが案内する側にとっては、現実的な重荷として踏破する原因の一つにあつていまして、語り部の後継者問題に悩んでいる萩原さんは少し渋い表情を見せた。
近世に入り、関東や東北の巡礼は伊勢参宮を終えて、新宮や那智に参詣したあと、この雲取を越えて本宮に向かうのが順路でした。京大阪方面からの旅人は、中辺路や小辺路を経て本宮を参詣し、熊野川を下り新宮へ、那智の参詣をすませた後、この雲取越えをして本宮に戻り、再び中辺路や小辺路を通り帰郷するのが一般的だった様です。とは、熊野川町の観光課が古道歩きの手引きとして、希望者に差し上げている。歴史の道熊野古道をたずねて、という小冊子に載っていた一節。この冊子は、熊野川町史の編纂に携わった木村清先生が執筆されたもので、萩原さん自身、ガイドする上で必ず確認するといふ「熊野川町史」の「熊野古道」のページを指し示している。いつのときでもこの冊子は持っているとか。萩原



大雲取子越 石倉峠へ

さんのを見るとき、いくつもの書き込みや傍線が几帳面にしてあった。
「実はもっ、ほとんどの内容は僕の頭の中に入っているのですが、このガイドブックを読みながら歩いていただくと、熊野古道の見方がまたひと味変わって、おもしろいんですよ。熊野川町では、古道の改修を記念して石倉峠から石堂茶屋までの間に、大雲取に七本、小雲取に六本、ぜんぶで十三本の歌碑を建てています。一本の重さ四〇〇キロ、重たいんですよ。もうすでにどこか、まるでお客さんを前にして熱弁をふるっておられるように、語り部口調でお話してくださる萩原重夫さんです。」
「奥の中海の如しと嘆きたり、石を踏む丁のことは伝へず」といふ、歌人土屋文明の歌碑が越前峠に建てられているのだが、後鳥羽上皇の御幸の先発隊としてこの地をたずねた藤原定家が、大雨の中、奥（こし）の中で雨水が入ってきてたいへんだったと嘆いているのに、丁（よぼろ）という奥の担ぎ手の苦労まではまったく思いを馳せていないといったことを、土屋文明がシニカルに指摘している。ほかに、音藤茂吉や長塚節といった大正、昭和を代表するような歌人、文人たちが好んで熊野へ参じてくださった歌を残し、それが歌碑となって刻まれている。

「そんな歌を皆さんと鑑賞しながら、あれこれ語り合うのが実に楽しいんですよ。長塚節の歌に虎杖という言葉が出てくるんですが、歌碑にはふりがながあってありませんから、なかなか読める人が少ない。でもある時にね、関東からお見えになったという六十くらいのご婦人が、これはイタドリと読むのではないでしようかなって、ボンと正解を出して、うん、みんな、わあ、すごい。読めるんですよ。そんなたいへんない皆さんとのやりとりがたまらないんです。」
「かがなへて待つらむ母に真熊野の羊歯の穂長を著にさるかも」という同じく長塚節の歌碑が椎の木茶屋跡に建てられていますが、羊歯（した）の葉柄はなまらで、ものすごくきれいなんですね。お弁当で箸を忘れてきたときなんか、これで箸につけて食べたり、僕らするんですが、そのように教えてあげると、皆さん真似して、折ってお土産にもって帰られたりするんです。」



熊野川町



熊野川町長 新家 義久 さん

ふるさとを「紀の名人」を萩原重夫さんが受賞されました。誠にありがとうございます。
萩原さんは、熊野古道の大雲取越えと小雲取越えの中継地点、小口で生まれ育ち、郵便局を定年後、地域の若者からお年寄りまで参加されている「小口文化振興会」の会長として、地域のボランティア活動に取り組みされており、毎年「小口夏祭り」や「ジャンボクリスマスマス」で有名な「小口おもしろフレイランド」を開催するにあたり、先頭に立って指揮を取り、熊野川町になくはない「まつり」に発展させてくれました。
更に、南紀熊野体験博が現在まで、熊野古道の大雲取越えと小雲取越えの語り部として、古道の説明、地域の自然や文化を幅広く紹介していただきました。また、萩原さんは、町の教育委員や文化財保護委員の要職を務めていただき、熊野古道については、台風後の巡回・修理など萩原さんの行動力にはいつも頭の下がるおぼれです。
このような地道な活動が評価されて、今回の受賞となったことを考えます。平成16年6月の「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録に向け準備を進めているところでありますが、これまでの萩原さんの功績と活動に對しまして深く感謝するとともに、いつまでもお元気で活躍されることを祈念申し上げます。
企画制作/熊和歌山毎日広告社

- わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します
- 熊野川町
 - 熊野川町議会
 - 熊野川町商工会
 - 熊野川町森林組合
 - JAみくまの
 - 熊野川温泉 さつき
 - 特別養護老人ホーム 熊野川園
 - くまのビール(株)
 - (株)松源
 - IBW美容専門学校
 - アサヒビール 和歌山支店
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - (株)岡崎自動車教習所
 - 御舞儀専門 沖(株)
 - フレッシュミート オンメ
 - オリエントホームズ(株)
 - おいしさ田舎へろ 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設(株)
 - (株)サンレックス
 - (株)第一製版印刷
 - (株)テレビ和歌山
 - 野村證券(株) 和歌山支店
 - ご舞儀専門 (株)橋爪屋
 - 紀三井寺 はやし
 - (株)宮井新聞舗
 - 本家 宮坂仏壇店
 - 吉村眼科
 - (株)和歌山印刷所
 - (株)和歌山放送
 - 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 ②

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広聴報告書です。

鋼に魅せられた 日本刀工師。



photographer/照井 四郎

安達 茂文 Shigefumi Adachi
17歳で刀匠を目指し、厳しい修業の後、月山流刀剣技法を伝授され、その作品は「刀銘・龍神太郎源貞茂」として県内外から高い評価を受ける。また、各地での講演活動を通じ、伝統ある作刀技術の紹介に取り組んでいる。49歳。

今回の名人、安達茂文氏の鍛冶場は、龍神村役場から車で東へ十五分ほど山間の道を走った殿原という集落の一角にあった。しめ縄を張ったそこには、一種独特の凛とした雰囲気が漂っていた。

「私のオヤジも刀鍛冶でして、私で二代目看板のあがる龍神太郎源貞茂というのオヤジの銘です。私は龍神太郎源貞茂、これが私の刀銘になります」と、説明して下さった。

「父親は元来、刃物鍛冶ですと来ておったのですが、戦後になって鍛冶屋から刀鍛冶に変わるんです。戦時中、一時軍刀を作らされてた時期がありまして、その折、私の師匠である月山源貞一先生のお父さんに習っていた刀工、貞一先生の兄弟弟子に当たってお方に、私の父親は刀づくりの手ほどきを受けたそうです。時代が時代でしたので、今にない苦労をオヤジはしたと思うのですが、私はすつと、そんな父親の厳しい仕事ぶりを見て育ちました」

薄暗い作業場、剥きだしたままの乾いた土

間である。火床に向けた安達氏の半身だけがオレンジ色に照らされている。じつと見つめるその先は、赤々と燃える炭の火であった。

「物心ついたときには、私も刀工をめざしておりました。もともと見よう見真似で、オヤジの仕事を手伝ったりしていたのですが、教わると言つたり、刀鍛冶として早く自立すること、良い刀を作りたい一心で無我夢中でただ懸命に打ち込んでいた時期でもありましたね」

「刀鍛冶の集い、匠会というのがありまして、近畿一府四県の刀鍛冶をはじめ、研ぎ、鞘(さや)、柄杓(つかまき)など、いろいろな職人さんが、年に一度大阪に集まってくるのですが、オヤジに付いて私も毎年出席させてもらってました。その折、のちに私の師匠となる人物にお会いするチャンスがありました。と、安達氏の話はつづく。

「師匠は、人間国宝の刀匠月山源貞一です。一門はすべて貞一の一字が付きまします。五年ほど前に先生は他界されましたが、まぢがいな



く刀剣界の第一人者でした。最初にお会いしたときは、それはもう雲の上の人で、ただ遠くから顔を拝見しておったのですが、何度目かの会合の折、密かに拙学で私が作っていた、長さでいえば五〇センチほどの、いわゆる脇差に、細かな彫りをしたものを師匠に見ていただく機会があったんです。そりゃあ、ずかしかたです。でも先生は、何もわからぬようにこままやちたなあ。と、や、ポン。もう少ししたら、上の兄弟子が出ていきよる。よかつたら、遊びにこんか。と、向つからお声を掛けてくださったんです。サイコロ状に細かく割られた松の炭が、炉の中で美しく燃えている。ふいふいから空気が送り込まれるたびに、金色の火の粉が微片と成って暗闇に舞いあがる。炉の温度は千三百度以上。安達氏が「二棒」と呼ぶ鍛冶の道具の先に刀の材料となる玉鋼(たまはがね)をのせ、燃える炉の中に差し入れた。

「嬉しかったですね。家へ飛んで帰ると、さつさと荷造りをすませて、お声がかかれはいつも師匠の下へ伺えるよう、今か今かと心づもりして待ってました。実際に師匠のお宅に草鞋を脱いだのは、それが三ヶ月ほどたつてからです。奈良県桜井市、三輪山のおふもとに先生はお住まいだったので、ほかの兄弟子と同様、私も住み込みでお世話になり、盆暮れ以外には家に戻らなかつた

です。私の父親が高齢で持病もあって、最終的にオヤジの跡を継ぐために、結局一年半で、またここに帰ってくるのですが、徹底的にしこかれたその修業期間は、私にとっては何ものにも代えがたい貴重な宝物となっています」

ふいふいは手動である。突き出した取っ手をヒストンのようにリズムカルに動かして、空気を炉に送る。この呼吸に似たリズムが炉の中の玉鋼に伝わり、いのちが吹き込まれる。硬質な鈴のような響き。勢いある炎の轟音に混じって、かすかに炭のはぜる音が聞こえた。玉鋼を取りだして炭をまぶし、赤土の泥を垂らす。鉄の表面を守るためであると、安達氏はいつ。

「父の手元で七年ほど修業しておったのですが、だいたいが我流で、それがいきなり本流も本流、いわば刀匠界の東大みたいなところボツと入れていただいたのだから、何もかもが大変でした。最初は身に付いたクセみたいなものを取り除くのが苦勞しました。月山流には月山流のやり方があります。しかし、刀鍛冶としての精神修養はもちろんのこと、人間形成としての勉強もそこです。いぶんと学ばせていただいたような気がします」

タイミングを見計らって、安達氏はおもむろに玉鋼を炉から引き抜く。黄金色に光り輝く玉鋼を台に乗せ、ハンマーをもの凄力で打ち込む。熱した火のかけらが飛び散る。超高温で輝く雪のような結晶が散る。ひとしきり打ったあと、今度は強力なノミのような道具で玉鋼の真ん中に裂け目を入れる。槌で玉鋼を打ちつけて折り曲げ、重ね合わせていく。これを折り返し鍛錬と呼ぶ。

「日本刀の本命は、折れず、曲がらず、良く切れるということ。いまは需要がなくなつてしまつたけれど、最高の切れ味を持つてこそ、本当の刀だと思つてます。居合い、剣道、振え物切りとありますが、ここで真価を問うて頂きたい。私の刀は、いつでも試し切りしていただいて結構です」

「曲がたらアカン」といふことは、刀身が硬いといふこと。硬いといふことはこの皮鉄(かわがね)で補強します。一方、硬いと脆いといふこと。その脆さは、粘りのあるこの刃鉄(はがね)がカバーします。刀が折れるといふことは、どうしてもあつちやならん



龍神村

芯鉄(しんがね)に柔らかな鉄を使い、その分をきちんと対応させます」

さらに刀身の首部にあたる部位の、棟鉄(むねがね)とあわせて、せむぎで四種類の鋼、これを四方固めと呼ぶのだが、それぞれに硬軟異なった鋼を独特の張り合わせ方であわせて、最終的には、ねばり強くて腰があつて、切れ味に凄みのある日本刀へと仕上げられていく。「仕上げは、研師(とぎし)に回します。どんな仕上げがりになつて戻ってくるか、案じみなんです。抜いてぼろぼろ見た瞬間、すべてが判る。同じ工程で作つてみて悲しいほどに、ひと目で大きな差となつて現れる。これが、日本刀づくりの魔力なんです」と、静かに安達氏は笑つてみせた。



龍神村長 古久保 治一 さん

県内でも数少ない「刀匠」として活躍されており、安達茂文氏が、今年度、和歌山県ふるさと名人「紀の人賞」を受賞されました。心から受賞をお慶び申し上げます。

安達氏は、龍神に生まれ、学業を終えられた後、この世界に入られ、人間国宝月山源貞一、刀匠の元で厳しい修業を積み、月山流刀剣技法を伝授されました。

現在、氏の作品は、「刀銘龍神太郎源貞茂」として県内外から高い評価を受けるほか、各地での講演活動において伝統ある作刀技術の紹介に取り組むなど、精力的に活躍をされております。

龍神村では平成13年に、龍神村文化奨励賞を贈り、安達氏の本村文化振興への功勞を讃えたところでもあります。また父親である故安達貞樹氏は刀匠として昭和58年に和歌山県名匠表彰を受賞されており、父子二代にわたる知事表彰となりました。今回の受賞を契機として今後益々のご活躍を期待するものであります。

私は、キラリと光る元氣な龍神をつくらせたい。といふことを常々申し上げております。

今後ともそのお力をふるさと龍神の発展のために役立て頂きますよう願つて止みません。

企画制作/和歌山毎日広告社

わたしたちは、ひと・夢・まぢつくりを応援します

- 龍神村
- 龍神村議会
- 龍神観光協会
- 龍神村商工会
- JA紀州中央
- 池田サーブス(株)
- 深瀬組
- 有ヤマモト電器
- IBW美容専門学校
- アサヒビール 和歌山支店
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 龍岡自動車教習所
- 御葬儀専門 沖(株)
- フレッシュミート オソメ
- オリエントホームズ(株)
- おいしき田舎へり 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設(株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券(株) 和歌山支店
- ご葬儀専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- (株)松源
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 吉村眼科
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送
- 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 ②

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふりかえりへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリスタップしてお知らせする広報報告書です。

元熱血教師は 切り絵名人。



photographer/照井 四郎

北山 武彦 Kitayama Takehiko
白浜の名勝やイベントをはじめ風景、干支、静物など様々なものをモチーフに切り絵を制作する。また、切り絵サークル展の開催等地域活動に取り組む。82歳。

「中学時代からバレーボールをやっていた。実をいうと、僕はバレーボール歴のほうが長いんですよ。今回の名人、北山武彦さんは少し遅れた方ですね。自己紹介してください。長らく教職に就いていた北山さんは、母校の粉河高校を最後に昭和五十五年に退職。そのあと白浜に移り、「両親の経営していた企業の保養所を継ぐことになった」。

「軍隊に行きたくなくて、復員してきたとき、なにがしたいか、そう思った。始めたのがバレーボールでした。僕自身、旧制中学のときに、二年に一度開催される明治神宮大会という、いままでという団体みたいなものですが、その全国大会に県代表として出場して、神宮の陸上競技場のトラックに設けられた特設コートの中でボールを追いかけたという思い出があります」。

「当時、学校の先生がたいへん不足しておりましてね、もともと教師になることなんか大嫌いで、断り続けておったんですが、中学校の風師に押し切られるかっついで、地元の高等学校へ就職しました。和歌山県でバレーボール協会というのをつくったのも、ちょうどそんな時期です。まだ九人制の時代でしたが、うちの学校はけっこう強かったんですよ。部の監督として、団体にもだいが連れて行きました」と、懐かしそうに目を細めて北山さんは笑う。

「ですから切り絵との出会いは、すいぶんと後になってからですね。五十を過ぎたころでしょうか、バレーボールをするのには、これからは体力がもたない、退職したそのあとまでは続けられん、と考えた。なんとか今のうちに、熱中できそうな趣味の一つも見つけたいとアカン。うちの近所に美味しい料理屋がありましてね、その店の主人、といったところの人も私の教え子なんです。あるとき、この人も私の教え子なんです。あるとき、カウター越しに彼の仕事をじっくりと見ていますとね、えび、松、あやめなど、料理の盛りつけに乗せるパレンを、実にあざやかな手つきで次々に切っておったんです。うまいこと切りよるなあ、おい、それ、どないか、と、楽しんでお話を聞かされた。

「その子も切り絵作家の滝平二郎さんなんか好きで、新聞に作品が載ってたりするのを見て、先生、あれいっぺんやりたいんや、と、いいますから、面白そうだからやらせたらええがな、そうや僕がやってみようか、そんな軽い乗りだったです」。

「と、楽しくお話を聞かされた。自分とのレベルの差に愕然としながらも、その人がこのように風にならないうんか、よし、それやったら僕はここをこんな風にちょっと変えて表現してみよう、なんて、けっこうアマの作品を見てヒントをもらいました。のちに県の切り絵協会会長になられた松本政行先生との交流も僕にとってはたいへん貴重な経験になりました」。

「伊勢おかげ横丁」の陰影あざやかな土産モノ屋の店前風景、「家族でゆくりとたすね歩いた真夏の奈良のお寺の境内など、北山さんの作品はその題材を決して狭いところから選びはしない」。

「人物の微妙な仕草や表情の二つ、あるいは強風を受けてそよよと揺れる松の枝、岩場に打ち寄せ砕け散っている波頭の飛沫など、切り絵のむずかしさと面白さは、その瞬間の空気を黒白の曲線でいかに動的に、簡潔に表現できるか、というところに勝負はかかるとも思います。実際に歩きながらスケッチして、じっくりと構図をかためていくという方もいらっしゃるんですが、僕の場合は、最近ではデジタルカメラにおさめて、そこから気に入った写真を抜き出し、思いどおりに拡大して、それをトレースして下絵を作るところから始まります」。

北山さんの作品で「海金剛」



「と、楽しくお話を聞かされた。自分とのレベルの差に愕然としながらも、その人がこのように風にならないうんか、よし、それやったら僕はここをこんな風にちょっと変えて表現してみよう、なんて、けっこうアマの作品を見てヒントをもらいました。のちに県の切り絵協会会長になられた松本政行先生との交流も僕にとってはたいへん貴重な経験になりました」。



白浜町



白浜町長 立谷 誠一 さん

「この度、北山武彦さんにおかれましては「切り絵」名人として、平成十五年ふるさと名人「紀の人賞」を授賞され、誠にありがとうございます。心からお喜び申し上げます。北山さんは、昭和六十二年から現在もなお、当町の公民館の切り絵サークルの講師として、社会教育の振興に「尽力頂いており、北山さんの穏和な人柄が溢れ出ている作品は、サークル受講生だけでなく、多くの町民の方々からも大愛顧されているところでもあります。私共、永年培われた匠の技により創り出される北山さんの作品に、切り絵という芸術の奥深さを実感している次第であり、今回、そうした取り組みが広く世間に認められましたことは、町と致しまして誠に誇らしい限りであります」。

「もともと私たちに、切り絵づくりの楽しさ、ムスカシも、先生はいろいろ教えてくださいます。この教室のアウトホームな雰囲気がいよいよもって、一週間に一度の教室ですが、私はいつも楽しんでお話を聞かされた。自分とのレベルの差に愕然としながらも、その人がこのように風にならないうんか、よし、それやったら僕はここをこんな風にちょっと変えて表現してみよう、なんて、けっこうアマの作品を見てヒントをもらいました。のちに県の切り絵協会会長になられた松本政行先生との交流も僕にとってはたいへん貴重な経験になりました」。

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 白浜町
- 白浜町議会
- 白浜町教育委員会
- コガノイグループ
- ホテル 三楽荘
- IBW美容専門学校
- アサヒビール 和歌山支店
- 有田川温泉 鮎茶屋
- (株)岡崎自動車教習所
- 御義備専門 沖(株)
- あなたの街の (株)オークワ
- フレックシビリティ オソメ
- オリエントホームズ(株)
- おいしき田舎への 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設(株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券(株) 和歌山支店
- ご義備専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- (株)松源
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 吉村眼科
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送
- 和歌山ヤナセ(株)

企画制作/和歌山毎日広告社

紀の名人録 ②

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の名人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートしてお知らせする広報報告書です。

笑顔温かい 高野箒の名人。



photographer/照井 四郎

坪井 徳夫 Tsuboi Tokuo

その昔、高野山で作られたことにその名が由来する「高野箒」は、山野に自生する「ホウキ草」を利用した完全手作りであり、しなやかで庭園清掃に最適と顧望される。毎年秋に製作、完成品は村内外に無償で配布し、また、都市と山村の子供交流の場で箒の作り方を指導なども行っている。73歳。

に草は生えてきません。雑木林がなせいか。日光が当たりすぎると、お日さんに当たった草はコシが強いんですよ。それにしてもあのときの雑木林がぜんぶ残ったたらそりやすいよ。いまごろ何にもせんぞ、このあたり観光の村やな。

「私、子どもはね、きのこでもね、学校から戻ってきたら、母親が兄い、きょうも行ってこいよ、もういっぺん行ってこいよって声かけてくるんで、きのこ探りに行くんです。すぐ近くにあるよ。いろんなきのこ、ある。松茸もあつたよ。シメジもあつた。コウモリもあつた。見た目は色黒くて、見かけ悪いんやが、味は一番や。私はそう思う。そんな食材も子もたらで調達しました。」

「当時、ガスなんてなかったからね、山に炊き柴をつくっておいだ。女の人の仕事でね、私の母親にかぎらず、柴はこんでくるついでに草も引いてきた。このホウキ草はね、毎年、きれいな花つける。ピンク色の小さな花びらでね。ひとつ花ひとつ、春が夏でしよ。ところがあそこ、十一月ころに咲くんやいしよ。咲いてしばらくしてから花びらが風で飛んで、それが繁殖のもとになる」と、朴訥ながら坪井さんの語り口にはいよいよ熱がこもってくる。

「山一徹、学校出てからはずっと山仕事です。高野山に行ってもね、あつち行ったりこつち戻ったり、なんにも決まらずに歩くのが好きな風来坊なんやけどな。一度道を通つたら草のある場所ちゃんとわからります。生石のテラスまで見に行つた」とあるよ。草あつたよ。高野山に

「自然は正直やね。草をやる時期は花のつく十一月の半ばごろから二月の中ごろまで決まっています。これは覚えやすいよ。ちよつと鉄砲(狩獵)の時期と同じよ。一月の真ん中を過ぎたら、ぼちぼち白く芽が出てきて難儀します」

「高野箒」のその名の由来には諸説あるが、いずれも高野山に縁がある。その昔、高野山では、竹をばしめ、胡桃や桃などの樹木を栽培することは利潤を得る行為であり、それを戒めるという意味から固く禁止された。それで竹箒を使うことが許されず、その代わりとしてホウキ草の箒が山内では使われておつた。また、高野山の寺院で、机上の掃除をするときに、これを束ねて用いたともいふ。

「いずれにせよ、草がまずありきやな。このホウキ草の箒は一度使ってみたらわかるけど、竹箒と比べて、なんといつても軽い。年寄りや女性にも、使い勝手がええんですよ。庭の芝生などを掃除してみたらよくわかります。この村の近くに松本先生という医者さんがいらして、先生に箒を一つ進呈したら、おいあれ、芝生のなか掃くのには満点じゃいっつ、ええ言われてくださいました。『またはきれいに掃除ができて少しも芝生を傷めないで。』」

坪井さんのつくる箒は、基本的に売り物ではない。「みんな喜んでくれたら、それでええんですよ。と、年間に百五十本から二百本ほど作るという完成品はすべて無償であげるのだといふ。

「昨年の十一月、NHKが取り上げてくれたんですが、さすがNHKや、問い合わせがすごくな。この人にあけて、こつちにあけていっつわいはいかんじや。それでいっぺん在庫がのつなつてしまつたよ」とうれしそうにまた笑ふ。

収穫期にため込んだ草は、家の前にある畑で一ヶ月ほどかけて野ざらしにし、タイムリグをみて熱湯をかけて芽を殺し、葉を振り落として、さらによけいな枝葉は剪定鋏(せんていばさき)できれいに刈り込んで、少しずつ、箒のかたに近づくように刈りそろえていく。あの工程になるが、柄になる部分を黒のビニール紐で縛る技術は、山仕事で使う鷹口の刃を竹柄に縛りつけるのと全く同じ要領で締め上げていく、機械的ゆかた驚く人多数。

「せんば草ですよ、せんば。」

手作りですよ。草だけで作っていきます。手間がかかるのは、下からこつ、枝があつて根が張つてね、行儀が悪いんでね、鉄でその枝をきれいに整理していきんですよ。ある時となりの奥さんが、徳さん、その刈りつた枝、みんな山に放りよるんか、放りよる、燃やしよるいつたら、そんなあかん、もつたないことしたらあかん。その枝使つて、もつと小さい箒にならんかよ、いっつちよつとしたヒントくれたよ。それで、いま坪井さんのつくる高野箒は、大小合わせると年間で五百本ほどになる、といふ。そしてすべて残らない。

花園村



花園村長 北浦 亮三 さん

この度、坪井徳夫さんにおかれましては、「高野箒づくり」の名人として、和歌山県知事より、平成15年度ふるさと名人「紀の人間」が授与されました。花園村にとりましては初めでの受賞であり誠にありがとうございます。

坪井徳夫さんは、若い頃より母親が作っていた手づくりの温もりのある「高野箒」を後世に伝承しなければという想いから、自分なりに改良を重ね現在の作品にたどり着きました。

この「高野箒」は、芝生を植付けている庭園などの細かな落ち葉の清掃に芝生の芽を傷めないとして欠かすことの出来ない箒であることから重宝がられています。

このホウキ草は、野山に自生し、春には小粒の可憐な花を付け、秋には落葉する一年草です。それを秋に採取したものを天日で干し、冬場に加工して製品としての「高野箒」が完成します。

完成した「高野箒」は清掃使用後に日陰に置いておけば数年は使用可能といつこと、近隣の社寺仏閣・一般住民などから重宝がられております。近年では、体験交流会等で指導するなどボランティア活動にも積極的に参加され、後世への伝承に力を注いでおられます。

このように地道な活動が評価され今回の受賞につながりました。今後とも益々坪井さんにおかれましては、今後も益々の健康とご活躍をお祈り申し上げます。

企画制作/和歌山毎日広告社

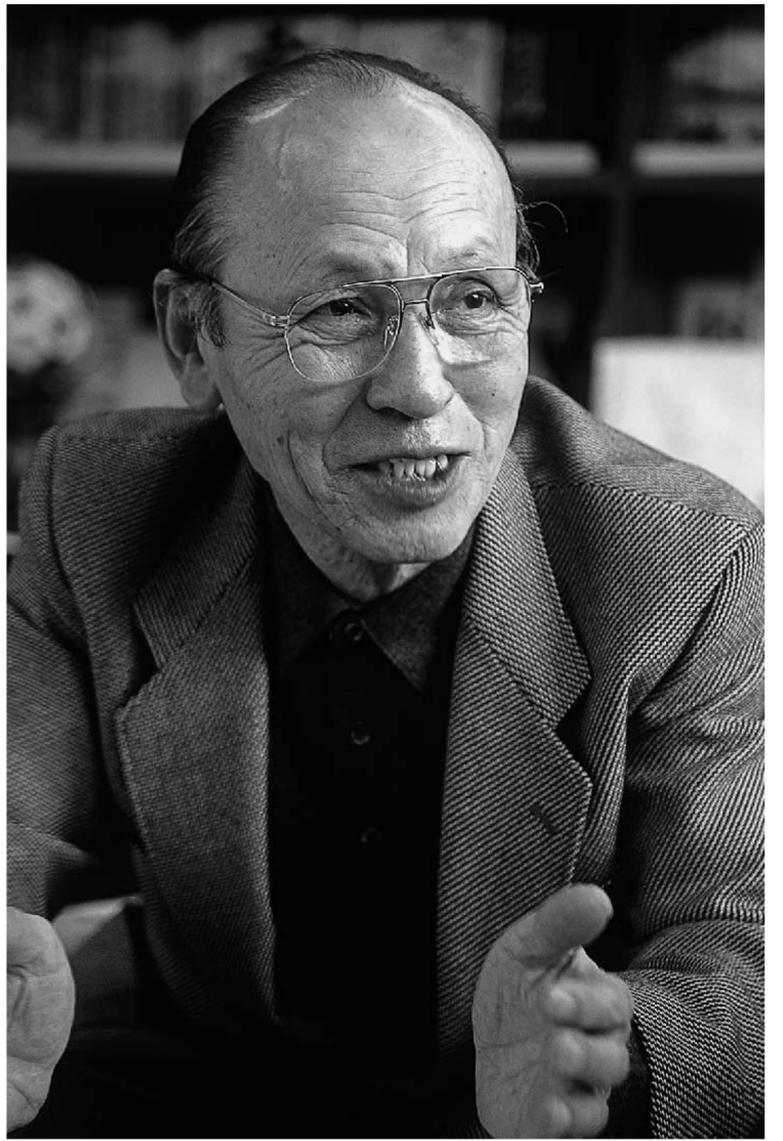
わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 花園村
- 花園村議会
- 花園村建設業会
- 花園温泉
- IBW美容専門学校
- アサヒビール 和歌山支店
- 有田川温泉 鮎茶屋
- (株)岡崎自動車教習所
- 御養備専門 沖(株)
- フレッシュマーケット オソメ
- オリエントホームズ(株)
- おいしき田舎のへろ 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設(株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券(株) 和歌山支店
- ご養備専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- (株)松源
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 吉村眼科
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送
- 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 ②

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の名人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広報報告書です。

渡御式に風運ぶ 大うちわ師。



photographer/照井 四郎

井上 健 Inoue Takeshi

紀州三大祭りのひとつ、粉河祭りに欠かせない伝統民芸品、「大団扇」を50数年間にわたり毎年製作する。高さ約6.5m、重さ約30kgになる大団扇の製作には熟練した技術を要し、現在製作技術を継承する唯一の職人となっている。7歳。

粉河町の氏神さんは、粉河産土(うぶすな)神社である。平安時代の延喜年間(1070)に勧請されたという古い神社で、西国三番札所である粉河寺の本堂のすぐ裏手に鎮座しており、この神社の例大祭こそが、紀の川筋最大の規模を誇る粉河祭である。かつては旧暦六月十八日に行われ、現在では毎年七月最終の土曜日曜に開催されているが、紀州三大祭の名にふさわしく、毎年数万人の観衆が近在近郊から集まってくる(1)。

「私がつくった大うちわは、祭礼の渡御行列に登場いたします」とは、今回ご紹介する粉河町のふるさと名人、井上健さん。地元建設会社の専務さんであるが、今は引退され、悠々自適の生活を送られている。井上さんの先祖は、代々藩士紀州公より「紀州公 御用団扇師(ごんちんちんちん)」の銘を仰せつける御用商人で、毎年の江戸への土産には、「うちわ」が用いられるほどに信頼されていた。「粉河町のふるさと名人」です。代々うちわは、妻屋といふ屋号で粉河うちわをつくっていました。たが、うちわ師として粉河うちわをつくるか

たわら、渡御式で登場する大うちわをつくっており、粉河祭の渡御式は一年に一度開催されるのですが、渡御の行列にはさまざまな座や講に混じって、私も伯市講の前二十一番目に大団扇として登場いたします。この行列して歩く順番は、厳然として守り継がれています。古式ゆかしい装束に身をまとい、行列をなして神社から粉河駅前までの道のりを肅々と行くのですが、晴れやかな祭りの中でそれは厳肅な雰囲気です。

「由来についてはいろいろな説があるようですが、粉河寺の開祖大伴孔子(おおともこのくし)が日ごろより信仰する産土神社(たのもしの宮)に社殿を建立しようとしたとき、夜な夜な数々の毒蚊が襲来して、進言に奉仕する村の人々を悩ませておたこと、その有様を見ていた粉河のつちわ師が大うちわをつくって、あおいで風を送り、毒蚊を退散させたという故事にちなんで、神扇として渡御の列に加わったと伝えられています。また古来より、祭りの神幸を大うちわであおいで、道を浄め、神を招いて神威をあげるために用いられたとされています。」

「弘法大師清来の仏器などもこの地でつくられたほか、粉河はもともと金工の町として知られ、鋳物師も多かったのですが、早く風をおこして火を燃立たせようという彼らの祈願が、この祭礼のつちわに込められている」といふ記録もなかなか興味深いでしょう。井上さんは愉快そうに笑う。

「渡御で登場する火防つちわは、高さ四メートル、広げた三メートルの幅があります。目方(めり)すれば、三十キロ以上はあるやろね。これを大の男が一人がかけて約八百メートルの道をめぐりとお渡りするのですから、そりゃたいへんです。私も陣笠をかぶり、羽織袴の正装で先導役を務めていたとき、道中、大勢つめかけてくださった人垣の中から大きな音が、立派なもんやあなあっていふ声が漏れ聞こえてきますよ。」

「緑竹を入れたら、楔(くさび)で留め、しっかりと縄紐で締めます。次に、扇の骨をつくり、九本、あるいは十一本と奇数に竹の先を削り、うちわを補強するために、割った竹の間に竹を入れています。そして最後に割った竹の根もとを締めるため、うちわの両面からきちんと、たがを組み入れて、これで骨が完了します。」

「一本の長い竹の肌を刃で筋を入れ、足で踏みつけながら、からだ全体の重みを乗せてねじって竹のたがは、大うちわの形を美しく整えるためには、昔は専門の桶屋さんに手伝ってもらっていたそうです。しかし、時代の流れの中で桶屋さんもすでに廃業してしまい、今では井上さんが一人で一気につくります。」

「細を巻いたり、紙張りなどは、家族総出でかかります。最近では中学生になった孫たちも手伝ってくれます。私の弟や娘婿も心算にきてくれますし、渡御式で使う大うちわ二本をつくるのに、おとな五人かかりで丸三日かかります。」

「私が父親からうちわつくりの手ほどきを受けたのが十五歳の年。偶然なのでしょうが、父が先代からうちわつくりを学んだのも、同じ年齢でした。もともとの父は、先ほど申しあげた粉河つちわの作り方を、子伝で教えてもらっていたのですがね。」

天保八年(一八三七)発行の「紀伊国名所図会」では、「粉河つちわは、もしを屋、菱屋」といふ二戸にて製す」と紹介され、郷土史家喜多村進著「紀州萬葉集」では、「和歌山県の名物、土産物として、粉河産の羊羹、本字の饅頭、土産物として、粉河産の羊羹、もつと販路をだめていい品である」と、手放して推奨していた「粉河つちわ」は、丈夫ながら民芸品としてやや高価であった上、やがて扇風機の一般家庭普及に及んだが、その生産量が激減する。井上さんの「祖父である重夫さんは、代々、粉河つちわつくりの伝統を守り続けた。菱屋」の女主人、妻谷よしあさんの後継者として分家から養子に入ったといふ経緯があった。父はたいへん几帳面な人で、竹を削るときも、細で竹を結ぶときも、紙を張るときも、たいへん丁寧な人だ。



企画制作/和歌山毎日広告社



粉河町長 服部 一 さん

「この度、井上さんにおかれましては、平成十五年ふるさと名人「紀の名人」を受賞され、誠にありがとうございます。心からお慶び申し上げます。我が町では、紀州三大祭りのひとつ、粉河祭りが毎年7月に盛大にとりあそばされております。紀北の誇る唯一の生きた民俗史絵巻として、また彩りも豊かな夏祭りとして、大勢の人びとに親しまれてまいりました。その中で、隔年におこなわれる「渡御」(おわたり)行列でひととき目をひくのが、一対の大團扇(おうちわ)です。この大團扇の製作に今日まで五十年の永きにわたって携わってこられたのが井上さんであります。井上さんは、徳川時代の創業といわれる民芸品「粉河つちわ」の技術を代々伝えてきた「菱屋」の子孫で、その技術を今に受け継ぎ、大団扇を製作できる唯一の職人です。」

- わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します
- 粉河町
 - 粉河町議会
 - 粉河町観光協会
 - 粉河町商工会
 - 大西電設(株)
 - 銘酒三番 (有)楠酒販
 - (株)大長建設
 - (株)松源 粉河店
 - IBW美容専門学校
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - (株)岡崎自動車教習所
 - 御葬儀専門 沖(株)
 - あなたの街の (株)オークワ
 - フレッシュミート オソメ
 - オリエントホームズ(株)
 - おいしく田舎暮らしのり 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設(株)
 - (株)サンレックス
 - (株)島精機製作所
 - (株)テレビ和歌山
 - 野村證券(株) 和歌山支店
 - ご葬儀専門 (株)橋爪屋
 - 紀三井寺 はやし
 - (株)宮井新聞舗
 - 本家 宮坂仏壇店
 - 吉村眼科
 - (株)和歌山印刷所
 - (株)和歌山放送
 - 和歌山ヤナセ(株)

紀の名人録 27

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリスタップしてお知らせする広報報告書です。



photographer/照井 四郎

大西 操 Onishi Misao
和歌山県の特産、南高梅の産地、南部川村で梅の種を利用し、地域のイベントなどを題材にした7種類もの「梅人形」を製作する。手作業による熟練した技術を使い、民芸品として高い評価を受けるとともに、南部梅林のPRも貢献している。75歳。

こころなげいむ 梅人形づくり。

南部川の川岸段丘、四キロにわたり広がる南部梅林では、およそ三十万本の梅が栽培されているという。晩福(おしな)の香雪(じょうたんきゅう)から眺める梅林は庄巻(むら)ひと巨匠、香り十里ともいわれ、毎年二月上旬の花が開花する時期になると、白く霞がかかったように周りに一面が梅の花びらに美しく彩られる。今回ご紹介する大西操さんは、この地に暮らす全国でも珍しい「梅人形づくり」の女流作家である。たずねたとき、季節はすでに終わっていたので、梅花の観賞とはいかなかったが、それでも咲き残った梅の木が一本、どことなく所在なげに大西さんの「自宅の前で静かに咲いていた」。

「ようおいでくださいました。まあ、どうぞおあがりくださいな」と、通されたその仏間には、なるほどいろいろな「梅人形」が飾られていた。

「ぜんぶで七十二種類ほどにもなるくらいな、毎年まいと、二作ずつ、テーマを決めてつくってきましてからな」と、笑う大西さん

「最初のころは、ウグイス、二つの梅ぼしのたねをのりをつけて、それへ色をぬり、くちばしとおおきな目をいれました。いたすら気も少し手伝って、ちよことお店においてみたんですが、最初の年はぜんぜん売れなかった。ところが、たしかにそれくらいの数のお題が並んでいて、売れだしたんです。で、売れるとおもしろいから、またつくる。ウグイスだけではものたらんから、こんどは人形さんをつくってみよう。私ね、これでも絵をかいた方がいい好きで、絵かきさんになりたいと、ほんやり小さいころはそう思ってたんですけど、嫁いだ先も農家やっただけ、ほんまになれるとはもちろん思ってた。なかつたけれど、こころやっつて、梅人形つくらせてもてる我が身を思ってく、なんや不思議な気がしています」。

「種は生きとる。いっぺん色ぬつたら、しみこんでしまつたら、もういっぺん、色つけせんとあかんの。最初のころ、普通の絵の具使ってたけど、色がきれいでいるからね、民芸する人から聞いて、いまはアクリル使ってます。手や足など、小さい箇所は、小梅やうす梅の種を使ったりするな。こまこまとか、傷もので売れる物にはならずに捨てる梅の実を、青のときに梅干し屋さんからもらってきく。じつくりと梅に漬けたあと、出してへりをとり、実は捨てて、種だけ残すんです。それをさあつとげらへあげ、陰干しにしてじつくりと乾かす。手間がかかりますよ。干し上がるまでに半年かかる。けど若い時分に、ひと梅何丁と漬けて、ぎょうさんこしらえてあつたら、私が使っただけの種はまだまだありますよ」と、人形づくりを心から楽しんでいる様子である。

「山田の嫁入り」という題名の人形がある。紋つき、羽織袴姿の仲人さんが提灯をもち、この土地に伝わる、昔ながらの嫁入り風景である。白無垢に着飾った花嫁は文金高島田に角かして、花婿とならんでつむぎ。若いふたこの梅人形は仲人夫妻にまぎれ、恥ずかしさである。人形を見てみると、そんな風に思えてくるからおかしいものである。ほかにも、手書きで描かれた満開の梅林を背景に、太鼓や三味線をかき鳴らし、もめん餅に赤い太帯をしめた、姉さんかぶりの農家の女性たちが横一列にならんで、音曲にあわせて楽しそうに歌っている。そんな大きな作品が硝子ケースに収まっているかと思つと、長寿の双子姉妹として有名になった人をモデルにしてつくった一対の梅人形が置いてあつたりして、大西さんの作品はなかなか油断がならない。

「普通のものをつくっても、おもしろくないですよ。小さいころから、私人をびびくりさせるの好きやつたら、といたすらばい目で大西さんはこころを覗く。

きわめつけは、サッカーをする梅人形で、ゴールポストに蹴りこむ黄色いユニフォームの梅人形が、片手をのりつけてそれを阻止しようとする白いユニフォームの梅人形が、ゴール前で交錯している。これは誰かとたずねたら大西さんは照れたように笑いながら、世界的に有名なプロサッカー選手の名前を二人、即座にあげた。それにして、その先、ワイルドカップの決勝戦で死闘を演じたドイツとブラジル、その華麗な一騎打ちを梅人形にしてしまつた大西さんの感性は、ほほえましく、若々しい。ちりめんでドイツとブラジルの国旗までこしらえて、サッカー人形の後ろに飾ってあつた。いろいろなお宝を見るのが大好きで、米国大リーグで活躍する日本人選手



大西操さんの、ふるさと名人紀の人賞受賞を心からお祝い申し上げます。大西さんが、誰もが思いつかない梅の種を材料にして人形を作り出したのは昭和四十年半ばでした。以来、持ち前のセンスと器用さと研究熱心によって次々と新製品を世に出し、しかもその時代の出来事を題材にするなど、ユニフォームに富み、人の目を惹きつけています。中でも、「梅人形」は代表的作品で、大西さんの温かな人柄がそのまま人形に映し出されていて、南部梅林のおみやげ民芸品として大変好評を受け、またみなへの梅のPRにも一役かってくれています。

現在は同好グループ「つぼみ会」のリーダーとなって技法の伝承普及に努められています。これからも心温まる作品を期待いたします。

企画制作/和歌山毎日広告社



南部川村



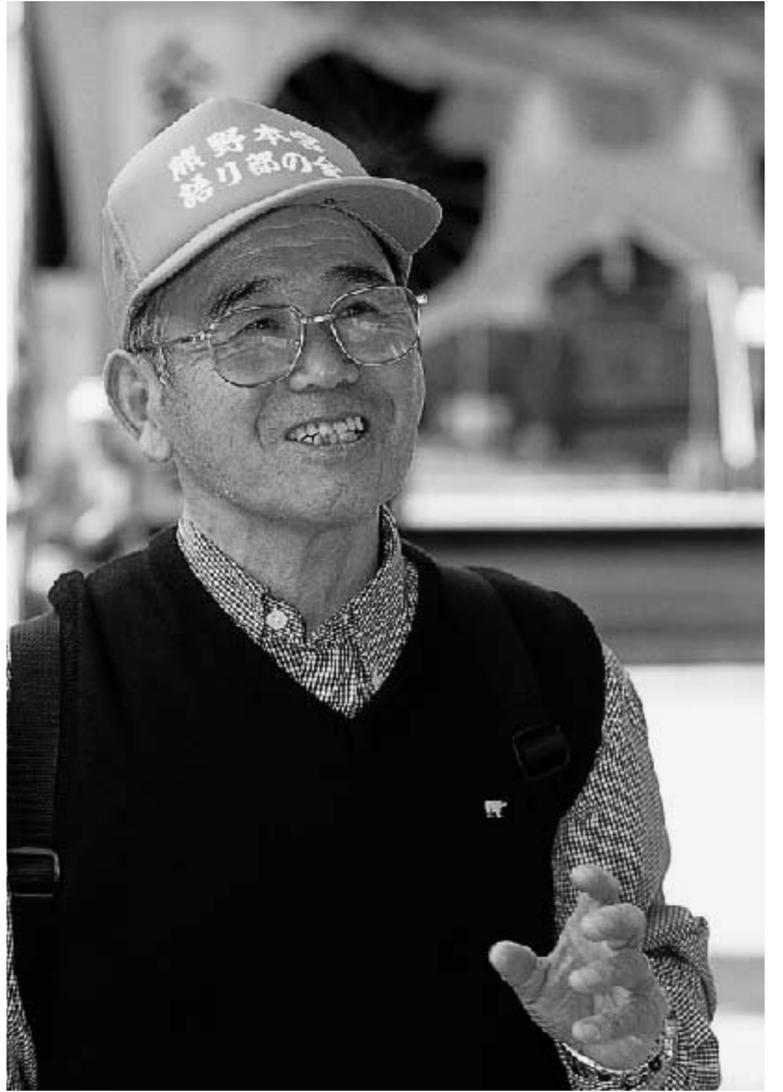
南部川村長 山田五良 さん

- わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します
- 南部川村
 - 南部川村教育委員会
 - 南部川村森林組合
 - JAみなべいのみ
 - 株東農園
 - 井口食品工業株
 - 株岩本食品・ぷらむ工房
 - 梅仙庵 株紀州ほそ川
 - 関本宗一商店
 - 南紀梅干株
 - マルヤマ食品株
 - IBW美容専門学校
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - 株岡崎自動車教習所
 - 御舞備専門 沖株
 - オリエントホームズ株
 - おいしき田舎の 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設株
 - 株サンレックス
 - 株島精機製作所
 - 株テレビ和歌山
 - 野村證券株 和歌山支店
 - ご舞備専門 株橋爪屋
 - 紀三井寺 はやし
 - 株松源
 - 株宮井新聞舗
 - 本家 宮坂公壇店
 - 吉村眼科
 - 株和歌山印刷所
 - 株和歌山放送

紀の名人録 28

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういつたひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広聴報告書です。

小栗判官物語の語りびと。



photographer/楠本 弘

安井 理夫 Yasui Tadao
小栗判官物語にまつわる史跡や伝承の語り部として観光客の案内や観光案内板の整備などを行う。また、全国各地の小栗判官ゆかりの市町村と「をくり連合」を結成、小栗判官物語の探求と伝承を目的に地域交流に取り組む。6歳。

「ひとに話るとき、まず私は熊野信仰というところから、一つ焦点をさだめてお話しするところになっています」と、おだやかな語り口でお話くださった名人、安井理夫さんは民宿「小栗屋」の主人である。日本最古の温泉場として名高い、湯の峰温泉で民宿を営む安井さん。この地とゆかりある小栗判官物語にまつわる史跡や伝承の語り部として活躍されてきた。

「いにしえの人々が、これほどまでに長くきびしい旅を選んだ熊野の魅力とはなんだろう」と思っています。文字どおり熊野詣は難行苦行の連続でした。しかしまた、熊野の自然は四季の変化に富み、ひじょうに美しいところです。山は高く水は清く、海は壮大にしてめくまでも青く、こんなと湧きいづる名泉がある。地の果ても思える熊野三山にたどり着いたとき、人々はきっと、この世界の極楽浄土を感じたのかも知れませんね。熊野権現は神仏習合ですが、貴賤男女のへだたりなく、浄、不浄を問わず、なんびとであ

らうとも懐深く受け入れたことが、はるか山河を踏み越えてもせむき行きたいと願う、多くの庶民たちの心を惹きつけたものと思えてなりません。また、旅人にして神仏や自然だけではなく、熊野の人たちの人情がそれ以上の支えとなっていたのではないのでしょうか」と、安井さんは話す。

「私の父親は、をくり」研究にとても熱心だった人で、自らはじめて民宿の屋号を「小栗屋」としたのも、オヤジのしわざです。父親は子どものころから湯の峰にすんでいて、話としては有名なだけにと、小栗判官という人物がいつの時代、どういう生まれの人で、何をして、どこへ帰って行ったのか、まわりの人に聞いても誰もよくはわからないう。力石とか車塚という場所は知っていても、それが物語とどうつながっているのかも知らない。それがあって、彼の好奇心に火をつけがぜん興味をわいたんでしょう。それから四十年近く、『をくり』にまつわる資料をあつめたり、ひとから熱心に話を聴いてはまとめておりました。それと、『小栗屋』と看板をあけておけば、『をくり』に関係のあるひとがたずねてくるかも知れないと、澄ました顔してそう申しておりました」と、笑う。

「小栗判官の物語は諸説さまざまで、史実として伝えられている常陸の小栗邑(茨城県真壁郡協和町)には、小栗城跡や墳墓など史跡が残っています。鎌倉大草子によります(応永三十年(一四三三)、小栗満重、助重(小栗判官のモデル)親子は足利時氏と戦い、敗れて、小栗城は落城します。その後、助重は悲願の小栗家の再興を果たしますが、康生元年(一四五五)、足利成氏に攻められて再び城を明け渡します。これらの史実をへスに物語は構成されています。私は、浄土宗の一派で時宗という念仏宗の聖者たちによって多くは創作されたのではないかと思っています。実際のところ、私たちがよく知る説話『をくり』の作者についてくわしくはわかりませんが、安井さん、さすが定年を迎えるまで中学校で社会科を教えておられたという学校の先生らしい、みごとな解説ぶりである。

「説経節」という中世の口承芸能がある。長柄の大傘を立てて手にささらをすりながら説法師たちが物語を語るのである。説経節には悲しい物語が多く、悲しげな節で述べられるのを聞いて聴衆は涙を流す。



照手姫が判官を運んだ車をつらった車塚

「小栗判官の伝説とは、地の底から蘇生し、餓鬼阿彌(がきあみ)となつた小栗判官が土車に乗せられ、東海道を熊野に向かい、湯の峰温泉にたどりつき、つば湯に入湯して、もとの勇者に立ち直るおはなしです。中世から何百年もの間、説経節や浄瑠璃、歌舞伎などを通して広く語り継がれてきました。熊野の地は古くから死霊の集まる場所であり、死者甞生の聖域でもありました。熊野の参詣者の中には病人や浮浪者などの姿も多くみられました。彼らは、熊野に詣でれば病苦から逃れられ、たとえ途中で行き倒れても来世で救われ、また逢入人々と助け合うことが死んだものへの供養になると信じて長旅の苦しみをかちました。小栗判官の伝説は、こつた熊野の地が墓場になつて語り継がれてきた、死と再生の物語なのです。

「私たちが、これら物語に魅せられた同好者共感者らが、さらに学び、後世にしっかりと伝え残そうという思いから、平成三年に、をくり連合(フォーラム)を結成いたしました。毎年、物語のゆかりの地で地元の方々の協力を得て仲間たちがつどい、研究発表や芸能鑑賞、伝承地めぐりなど、いまも活発な活動を続けています。平成十四年には上富田町で第十一回小栗サミットが開かれ、たいへんな

- 盛況ぶりでした。また、東京の八王子で開催された平成七年の夏には、現在は皇室の名宝の一つとして大切に保管されている全長三二四メートルの壮大な江戸絵巻『をくり絵巻』(江戸初期を代表する絵師、岩佐又兵衛の筆によるもの)が、偶然にも宮内庁三の丸尚蔵館で二ヶ月間にわたって一般公開され、たいへんな話題になりました。そのほか、平成十四年、十五年と、世界遺産登録の推進公演として和歌山県の高城生選抜チームによる、いにしえの熊野古道物語 オグリ伝説 が上演され、ひじょうに評判をあつめています。このように小栗判官物語は芸能などをつづつて今も人々の心に深く生き続けているのです。そう、すよ、をくり』は、私のライフワークです。』と、安井さんの表情は晴れやかでとても充実していた。

安井理夫さんが、ふるさと名人「紀の人賞」を受賞されました。心よりお喜びを申し上げます。

日本最古の温泉といわれる湯峯温泉には小栗判官物語にまつわる史跡や伝説が多く残されており、安井さんは昭和40年代に地元有志で小栗会を結成し、湯峯地区の清掃美化活動をはじめ、小栗判官に関する観光案内板の設置や観光客の案内等、地域での活動を続けられました。平成三年には、小栗判官「照手姫」の物語を探求し後世にしっかりと伝え残そうと、岐阜県大垣市、茨城県協和町の有志と共に、をくり連合(フォーラム)を結成して、第一回の岐阜県大垣市を皮切りに、毎年小栗判官ゆかりの地でサミットを開催されていますが、そこでも中心的な役割を果たされています。また、平成14年に紀南文化会館で開催された紀南の高等学校6校による「演劇・オグリ伝説」は大きな反響を呼びましたが、実行委員会の副会長として重責を果たす一方、当日は裏方としても活躍されました。このように小栗判官物語を町内外に広く伝承すると共に、世界文化遺産に登録されようとする熊野古道や史跡についての情報発信にも積極的に取り組まれている。現在も小栗判官物語の伝承をはじめ本宮町の語り部として、地域の文化振興及び観光行政に貢献されています。

安井さんのご尽力に感謝申し上げます。これからも健康に留意され、活躍されますことを祈念いたします。



本宮町長 徳 泉 正 さん

「小栗判官の物語は諸説さまざまで、史実として伝えられている常陸の小栗邑(茨城県真壁郡協和町)には、小栗城跡や墳墓など史跡が残っています。鎌倉大草子によります(応永三十年(一四三三)、小栗満重、助重(小栗判官のモデル)親子は足利時氏と戦い、敗れて、小栗城は落城します。その後、助重は悲願の小栗家の再興を果たしますが、康生元年(一四五五)、足利成氏に攻められて再び城を明け渡します。これらの史実をへスに物語は構成されています。私は、浄土宗の一派で時宗という念仏宗の聖者たちによって多くは創作されたのではないかと思っています。実際のところ、私たちがよく知る説話『をくり』の作者についてくわしくはわかりませんが、安井さん、さすが定年を迎えるまで中学校で社会科を教えておられたという学校の先生らしい、みごとな解説ぶりである。



本宮町

- わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します
- 本宮町
 - 本宮町観光協会
 - 本宮町建設業会
 - 本宮町商工会
 - 熊野本宮大社
 - 道の駅 熊野古道ほんぐう
 - 湯の峰温泉 よしのや旅館
 - IBW美容専門学校
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - 熊野自動車教習所
 - 御葬儀専門 沖(株)
 - オリエントホームズ(株)
 - おいしさ田舎づくり 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設(株)
 - (株)サンレックス
 - (株)島精機製作所
 - (株)テレビ和歌山
 - 野村證券(株)和歌山支店
 - ご葬儀専門 (株)橋爪屋
 - 紀三井寺 はやし
 - (株)松源
 - (株)宮井新聞舗
 - 本家 宮坂仏壇店
 - 吉村眼科
 - (株)和歌山印刷所
 - (株)和歌山放送

紀の名人録 ②

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリスタップしてお知らせする広報報告書です。

仲良く踊る 梅中傘踊り。



今回 おたすねした野上町小川地区公民館は、同地区の小川小学校の地つぎにあった。暑過ぎ、約束の時間にかがうと、すでに公民館の二階から軽快な三味線の音色が鳴り響いていた。

「実際のようなか、ちよつと披露してみようと、メンバーがあつて練習してました」と、気さくな笑顔で対応してくださったのは、「小川郷土芸能保存会」(代表者 会長 家郷泰行氏)の主力メンバーのおひとり、三味線を弾く南敬夫さん。ご披露いただくのは、海草郡野上町小川地区に伝承される「梅中傘踊り」。ここ生石山周辺には

いくつもの雨乞い踊りが残っていて、それら多くは太鼓・鐘、貝の鳴り物入りで勇壮に踊られるが、この梅中傘踊りにかぎっては、蛇の目傘を持って音頭と三味線で優雅に踊るといふ。

「旧小川村に、梅本と中田という集落があつて、もともとこのあたりで生まれた踊りであるが、この二つの集落の頭文字をとって梅中(ばいぢゅう)傘踊りと言つたんですね」と、説明くださったのは、小川地区公民館長の新谷垣内特爾(しんやがいてつ)さん。「四百年ほど昔に話さかのほりですが、

だんだん歌詞なんか整理されていくにつれて、盆踊りとして親しまれていくようになったんじゃないでしょうか、と、新谷垣内さん。

「生石山が近くに、このあたり一帯ある関係で水量が多、このあたり一帯は田んぼの多いところなんです。しかし何年かに一度干ばつになつて、その時に起こる水あらいを解消する意味でも、普段からの住民たちの「ミニミニ」シヨンは大切やつたんじゃないか」と、お話を聞いたのは元野上町教育長で、今は野上町中央公民館長の田尻章さん。町内福井の出身である。

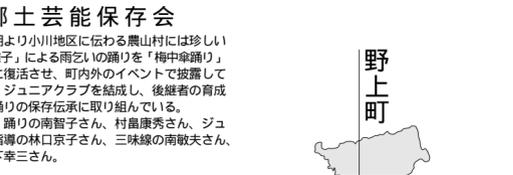
戦後昭和二十三年(一九四八)に再開され、しばらく、梅中傘踊り、は踊られていたが、昭和二十五年(一九五〇)に、また中断する。青年たちは定時に進むようになり、夜間の会合や青年団活動が制約されるようになり、ついに、田尻さんはその当時をふり返る。しかし

この下を流れる梅本川を中心として、このあたりはちょうど高野山領と紀州領の境目として、いわば端つこと端つことからお互い住民同士に反目も起きやすく、時の治世者に反逆する者たちも出現したり、なにかと騒々しい土地柄であつたようですね」と、新谷垣内さんは苦笑する。

資料によれば、梅中傘踊りの起源として、文政六年(一八一三)、大飢饉によって百姓一揆が起つた。野上地方の農民もこれに加わつたが、高野山領小川庄の農民は一揆に組み込まれたので高野山から締められ、これを機会に雨乞い踊りが踊られたと伝えられている……とある。

つづけて、「この踊りの最盛期は明治時代から大正にかけて、昭和十二年(一九三七)に日中戦争のために中断されるまで、若い男女の間で、盆踊りの中に取入れられて、旧暦の七月七日の七日盆から八月一日の八朔まで踊られたといふ。そのころは、音頭三味線も四、五十丁保有していた」と記されてあつた。

「生石山の山腹に大観寺という真言宗のお寺がありまして、私ら若い時分はそのお寺の境内で踊つておりました。当初は文字どおり、雨乞い踊りとして踊られていたのではないかと、だんだん歌詞なんか整理されていくにつれて、盆踊りとして親しまれていくようになったんじゃないでしょうか、と、新谷垣内さん。



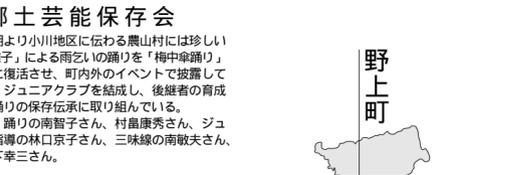
小川郷土芸能保存会
江戸時代末期より小川地区に伝わる農山村には珍しい「三味線と囃子」による雨乞いの踊りを「梅中傘踊り」として見事に復活させ、町内外のイベントで披露されている。また、ジュニアクラブを結成し、後継者の育成にも努め、踊りの保存伝承に取り組んでいる。写真左より、踊りの南智子さん、村島康秀さん、ジュニアクラブ指導の林口京子さん、三味線の南敬夫さん、唄い手の山下幸三さん。

「じゃあ、いきましょか、いいですか」と、南さんの掛け声で場の雰囲気が一瞬引き締まる。ひと呼吸あつて、チチ、トン、トン、トン、と、軽妙に撥(はち)がはじかれ、伴奏がはじまつた。

「踊りが唯一の楽しみやつた時代もありましたね。昔は、練習がきびしくて、私らはなかなか傘など持たせてもらえなかつたけど、今は時代も違つたし、子どもたちがかわい、教えてといわれれば、なんぼでも教えてあげますよ」と、目を細めて話される林口京子さんは、ジュニアたちに教える踊り担当の先生で、本業は小川地区公民館の主事である。

「踊りが唯一の楽しみやつた時代もありましたね。昔は、練習がきびしくて、私らはなかなか傘など持たせてもらえなかつたけど、今は時代も違つたし、子どもたちがかわい、教えてといわれれば、なんぼでも教えてあげますよ」と、目を細めて話される林口京子さんは、ジュニアたちに教える踊り担当の先生で、本業は小川地区公民館の主事である。

「踊りが唯一の楽しみやつた時代もありましたね。昔は、練習がきびしくて、私らはなかなか傘など持たせてもらえなかつたけど、今は時代も違つたし、子どもたちがかわい、教えてといわれれば、なんぼでも教えてあげますよ」と、目を細めて話される林口京子さんは、ジュニアたちに教える踊り担当の先生で、本業は小川地区公民館の主事である。



野上町長 黒西 健司 さん

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 野上町
- めの折願所 釜滝薬師
- 小椋リビンググリーン(株)
- I BW美容専門学校
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 御舞儀専門 沖(株)
- あなたの街の (株)オークワ
- オリエントホームズ(株)
- おいで田舎ジューク 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設(株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券(株) 和歌山支店
- ご葬儀専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- (株)松源 海南阪井店・貴志川店
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 吉村眼科
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送

紀の名人録 ③

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリスタップしてお知らせする広聴報告書です。

夜空に花咲かす 花火師親子鷹。



photo grapher/照井 四郎

藪田善助、藪田さゆり Yabuta Zensuke, Sayuri
県下で唯一、打上花火を製造し、年間約3万発の花火を県内外のイベントで打ち上げる。打上げのコンピュータ制御、音楽と組み合わせた音楽花火の導入をはじめ、常に新たな花火の創作に取り組み、全国花火大会でも三度入賞している。62歳、40歳。

県下で唯一、打上げ花火づくり師として活躍する藪田善助さんを工場へおたずねしたのは、梅雨空が湿ってとんとんと響いた平日の午後だった。広い敷地の一角に設けられた作業場で、長女のさゆりさんと二人、遠く東北地方の花火業者から頼まれて造っている新作の花火玉を一つ一つ確認しながら並べているところだった。すでに納期が迫っているという。恐縮しながら取柄の断りを入れると、「いや、かまわん、かまわん」と、日焼けした顔をほころばせ、「にっこり笑いかけてください」。

「私ら花火屋に休みなんかはないよ。労働基準法があったって、今は人並みにきちんと休みは取ってますけど、それでもそうやなあ、連続して休み取れるんは、正月くらいとちがいますか、なんやかやと仕事はある。大会の集中する夏場は、見ての通りたいへん忙しいし、本来、乾燥させて置いておくことが重要な玉づくりの追い込みを、この梅雨時期にやらなアカんのが頭痛のタネやね。それにうちの全国の花火屋さんからの依頼があれば、玉を送ってますから、やっぱり忙しいわなあ」と笑う。

「年間には三万七、八千から四万発くらいは打ち上げるなあ。花火玉づくりは神経を使う仕事やからどうしても時間を取られてしまっ、なかなか打ち上げの現場まで行けないし、行けたとしても年に一、二ヶ所くらいかな。現場はすべて現場スタッフに任せてある。信頼関係やね、自分のつくったモノを自分で見ててほしいから、必ずビデオに録ってもらって確認チェックします」。

「県外にはあまり出て行かないな、県内やたら七割方、うちです。ポルトヨーロッパでも上げる。紀の川祭りとか築港の港まつりなんかも、私らとこでやらせてもらってます。熊野の花火大会は同社競演やね、ぜんぶで一万発くらいあるんやろか。まあ、うちはずそに負けてないつもりですけどね」。

熊野花火大会は、隣県の三重県熊野市にある七里御浜海岸で毎年八月十七日に開催され、十四、五万近くの人出があるという。八月五か六日、玉を岩場に直に置いて爆発させる曳舟城大仕掛けは、大会のフィナーレを飾る名物で、花火玉自体の爆発音や爆風に加えて、岩場での反射音や洞窟での響き音も加わってたいへん迫力がある。

「うちの近所のお馴染みさんも出かけていって熊野の花火見るとごめんですが、アノタとこの花火、すぐ分かったっていわれる」と、苦笑するさゆりさん。

「なんでもって聞き返すと、うちの花火はウルサイらしい……」と、いって爆笑となったとにかく元気で、球数も多く、にぎやか、景気がいいのが藪田善助さんの花火。その素気で一本気な性格からか、とことんお客さんに満足してもらいたい、採算を度外視してでも目一杯突っ込んでしまつのが、うちのお父さんです。娘、さゆりさんのオヤジ批評

「日本の花火師の実力は世界一とちがいますが、私らが修業していた昭和三十年当時はそれで玉の種類が十種類かそこらだったけど、今は変化モノが増えてきて優に百種類は越えるやろな。うちの先代も花火師やっただも、もしオヤジが生きて、今みたいに賑やかな花火見たらびっくり返ってびっくりすると思う」と、善助さんは懐かしそうに笑う。先代の善一さんは、大阪で長い間、花火師として活躍し、地元吉備町に戻ってからは今の土地に工場を建て、三重の花火師の下で修業を積んでいた善助さんと呼び戻すと、文字通り親子鷹で花火業に取り組んでいた。

「最近、レモンイエローとか水色といった淡い中間色が流行りみたいやけど、私は赤なら赤、金なら金色、色彩のはっきりした牡丹(ぼたん)が好きやなあ。割れ口がきれいやない、花火は、ほんまつくった花火師の個性が出る。面白い」と、善助さん。打ち上げ花火は、一般に「割れモノ」「ボカモノ」「型モノ」などに分類されるが、その基本形である割れモノの中で、天空中で炸裂したときに飛び散る星(火薬玉)が、大きく菊の花のように光の尾を引きながら球状に広がるものを「菊(きく)モノ」、星が点になつてスッと広がっていくのを「牡丹(ぼたん)モノ」と呼ぶ。「なぜ、牡丹がお好きなんですか」と善助さんにたずねると、「それで、苦労したからな」と短く答えた。職人は多くを語ろうとはしない。まして、自身の苦勞話など余計なこと斬り捨てて語ってはくれない。

善助さんには娘さんが三人いるが、長女のさゆりさんが後を継ぐカタチとなった。善助さんの会社には総勢十名ほどのスタッフがいて、花火業者は家内工業がほとんどで、嫁いだ二人の妹さんも手伝いにくるといふ。この業界は機械化がすすむが、火薬の割合、乾燥、玉つめなど、どの工程をとっても根気と熟練を要する職人の世界である。

「思い通りの色を出すには、火薬の配合を変えながら、何度も試し打ちしてみるしかない。送ってくる薬品のロット番号によって微妙にちがう。私ら、一年一年が勉強ですよ。でもね、いろいろ書き留めてある私のエンマ帳もあるし、あらためて娘には伝えてほしいけど、私のノウハウのすべてをこの子に解つてくれると思いません」といって、善助さんはさゆりさんの顔をちらっと見た。

父、善助さん。下で、すでに二十年以上のキャリアを積むさゆりさんは、花

火業界では知る人ぞ知る中堅の花火師である。プロたちが新作をそろえて真剣に技を競う諏訪湖の花火大会のエキシビジョンで、さゆりさんはひびく入賞を果たした。

「別に気負いなんてありません。これからも淡々と今までとおり、うちの花火を造つていくだけです」と、さゆりに答えてくれたさゆりさん、善助さん父娘の花火を間近で見れば、地元吉備町で毎月十月に開催される町民祭り「第七回きびとん」(主催きびとん企業役員会)へぜひお越しを、前夜祭の夜、有田川河川敷に仕掛けられた特設会場から感動的千五百発の打ち上げ花火があがる。

「私はどこでも目一杯させてもらっているつもりですが、やっぱり地元やからね、うちが持つてるモノ、ぜんぶお見せしますよ」と、善助さんは声をあげて楽しそうに笑った。



吉備町長 中山 正隆 さん

現在県下唯一の煙火製造所であり花火師である藪田善助さん並びに藪田さゆりさんが、今回和歌山県ふるさと名人「紀の人賞」を受賞されましたことにつきまして、心からお慶び申し上げます。創業は昭和15年に始まり、安全第一をモットーに事故防止のためにいち早く電気点火による遠隔操作に取り組み、現在はコンピュータ制御、あるいは音楽と組み合わせた音楽花火を取り入れるなど意欲的に新しい手法を考案されております。また、さゆりさんは、全国的にも珍しい女性花火師で、常に新しい花火も研究され、全国新作花火競技大会に出品し過去3回入賞されております。地域においては、各学校の運動会あるいは祭礼の時に合同の打ち上げなど地元根ざした存在であります。漆黒の夜空に大輪の花を咲かせる花火は、今や夏祭りや秋に行われる吉備町を代表する祭り「きびとん」には欠かせないことのできないものであり、今日も昔ながらの手作業で夢の玉が生み出されています。今回の受賞を契機として、健康に留意され今後益々活躍されることを祈念いたします。

- わたしたちは、ひと・夢・ま・ち・つ・く・りを応援します
- 吉備町
 - (株)有田葬祭
 - (株)カスタムハウジング
 - 協中紀環境科学
 - (有)古勝商店
 - (株)松源 吉備店
 - IBW美容専門学校
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - 御舞儀専門 沖(株)
 - オリエントホームズ(株)
 - おいしさ田舎くろ 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設(株)
 - (株)サンレックス
 - (株)島精機製作所
 - (株)テレビ和歌山
 - 野村證券(株) 和歌山支店
 - ご舞儀専門 (株)橋爪屋
 - 紀三井寺 はやし
 - (株)宮井新聞舗
 - 本家 宮坂仏壇店
 - 吉村眼科
 - (株)和歌山印刷所
 - (株)和歌山放送

企画制作/和歌山毎日広告社

紀の名人録 ③

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広報報告書です。

ふるさとへの音色 炭琴の響き



photographer/照井 四郎

秋津川炭琴サークル
前列右より、夏目綾子さん、丸山みや子さん、北川佳子さん、栗山由紀子さん、榎本照美さん、後列右より、川上喜久子さん、原美代子さん、原見横紀さん、坂本聡美さん、谷口優子さん。

炭琴（たんきん）という楽器をご存じだろうか。これは文字通り木炭で作られた打楽器で、最高級とされる白炭の紀州備長炭を生かして創作された手作りの楽器である。田辺市秋津川地域は紀州備長炭発祥の地といわれ、古くから炭焼きの里として栄えてきた。

「木下伊吉さんという人がいらっしやいまして、この方は炭を焼いておられたのですが、窯出しするとき備長炭がぶつかってキーン、キーンとびじょうに澄んだ音色がするんです。これは面白いなあ、この音使って楽器にした



らとやるとある時思いつかれて地元の中学校へお話を持ちかけられたのが始まりです」とはききこした明るい口調で説明してくださいました北川佳子さん。今回の名人、「秋津川炭琴サークル」の代表人である。

「お話を受けて当時の中学校の音楽や技術科の先生たち、皆さんがそれぞれ知恵を出しあって試行錯誤の末、ようやく炭琴第一号が出来上がりました。今から十八年前のことです。木炭で楽器をつくるという発想は突飛でたいへん面白いんですけど、楽器としてきち

んと使えるよう仕上げるまではじょうずに苦労があったようにお聞きしています。私たちも炭選ひからはじめ、炭琴を手作りするのでその苦労のほどは身にしみてよく分かります」と、北川さんは笑う。

現在は木製の共鳴箱に約4センチ間隔に釘を打ち、その間にテグスをびーんと張り、その上に長さ二十センチから四十センチほどに切り落とした長短の異なる備長炭を順に並べる形である。

「ですから炭琴は地元の中学である秋津川中学校で生まれ、現在も音楽の教材として使われています。ドレミの音を炭でそろえるだけでもたいへんなことですし、実際に楽器として演奏することはもっとたいへんですけれど、何台かの炭琴を編成させて唱歌とかポップスなどが自分たちで弾けるようになると生徒たちも楽しくなるみたいで、校外の発表会などにも積極的に出て行っているんな交流の輪を広げています。最近流行りのアップテンポな楽曲に挑戦してみたり、子どもたちは好奇心が旺盛だし覚えも早いんですね。炭琴づくりにも彼らなりの自由なアイデアがいっぱいあって、共鳴箱の材質を替えたり焼いて板の目をつめて音色を変える工夫をするなど見ているだけで楽しくなりますね。私たちメンバーの中にはちょうど中学生のお子さんを持つお母さんもいますが、ときには彼ら子どもたちと親子演奏会みたいなかたちでイベントに参加させていただき多くの方々から共感をいただきました」

「どうしても中学生というのは卒業していつて入れ替わりますので、この素晴らしい創作楽器をなんとかもつと地域に定着させていけないものかと、公民館活動の一環で平成六

年に炭琴サークルが結成されました。ご指導は当時中学校で教えておられた西野郁子先生にお預けしました。早いもので今年で十一年目になります。早稲こす、ほんとど当分のメンバーは残っています。途中産休などで一時活動から離れた方もいますが、皆さんほとんどに炭琴が好きなんですよ、すぐに戻ってきてくれます」

平成九年、景勝地として有名な奇絶峡の近く田辺龍神線沿いに完成した「道の駅 紀州備長炭記念公園」の一角に北川さんたち秋津川炭琴サークルの活動拠点はあるが、その広い敷地内には備長炭の歴史や文化がわかる「紀州備長炭見聞館」をはじめ、産品の直売店や喫茶ルームなどがあり、さらに五基の炭焼窯をそろえた本格的な製炭場が設けられて、現役の炭焼さんが、備長炭を焼かれており、その伝統・文化が受け継がれている。

「炭焼さんにはホントいつも感謝しています。これはと思う炭をあらかじめおいてくださるんです。自分で響く炭をさがして一本一本叩きながら自分たちで確かめていくんですが、太さやカタチの良さもありません、お寺の鐘みたいにわわわんと響くものから音みたいな響き方をするものまであります。一度焼くと六時間くらい出来る備長炭の山から炭琴に適した炭が一本も出ないことだってあるんですよ」

備長炭がもつと澄んだ音を発するのは窯出し直後のもので、湿気を吸収するにつれて響きはだんだん鈍くなる。そのため、一ヶ月ごとに炭を取り替えたり、音色が良くなるよう削って音の微調整が必要となる。焼きしめると鉛（なまり）の二十倍の硬さになるといふ備長炭はナタを使って調律する。

「機構をつかって削ることができませんから、自分の耳を頼りに叩いて削って、もう少し音上げたいときは少し長さを切って、さらに削っての繰り返しです。しかも八台ある炭琴の下なら下の音を八本も同じようにそろえなければいけませんから、すべてを調律し終えるのに四人がかりで丸一日かかります。ふと小さなたま息をひとつ吐きながら北川さんはまた笑った。湿度にたいへん敏感な炭は一本ずつ厚手の布にくるんだあと、乾燥剤とともに発砲スチロールの箱に詰めて厳重に保管される。それでも響きが悪くなったり、音色が変わるらしく、炭の寿命は長くてもおよそ半年くらいだとか。

「私たちの演奏を聴いてくださり興味を持ってお越しくださる方もいらっしやいます。その保持管理のたいへんさをお話すると皆さんあきらめられるようです。ご承知のように備長炭はびじょうに高価なものですからね、考えてみればとてもぜいたくでかかない楽器だと思えます。産地だからこそ続けられる楽器じゃないでしょうか」

演奏をお願いすると、三台の炭琴で「アマインク・グレイス」を弾いてくださった。一音、一音ちゃんと炭の音色をさらえてマレットが動く、木琴や鉄琴とはまた趣きの違う

なんとも素朴ではあるがあたたく、すーと心にしみるような清涼感のある繊細で金屬的な音だ。他に「ムハートリ」は童謡やポップスまで約八十曲、曲によってはドラムやマリリンバが入る。現在、地元の紀州備長炭公園で年一回催される地域のイベントで演奏会を開催するほか、依頼があれば県外でも出かけていく炭琴による演奏を披露する。

「正直、出演すればするほど色々な面で大変ですが、演奏し終えたときにいたく拍手やお客さまの楽しそうな笑顔を見ればそれだけで十分なんです。私たちはこれからも炭琴を通して大好きなふるさとの音色をできるだけ大勢の方々に聴いていただきたいと思っています」と、北川さんは笑顔でつぶやいた。

田辺市



田辺市長 脇中 孝 さん

長さや太さの違う紀州備長炭を木琴のように音階順に並べたこの楽器は、叩くと「タン」という金屬音にも似た、それについて深い余韻を含んだ、たいへんきれいな音色を発します。

平成6年10月のサークル結成以来、市内はもとより県内外での演奏活動を通して、地域の特産品である紀州備長炭を広く紹介するとともに、「炭琴」を活用した地域おこしに取り組みであられる「秋津川炭琴サークル」の皆さんが和歌山県のあると名人「紀の人」賞を受賞されました。地域の発展を願い、これまで熱心に活動を続けてこられた会員各位のご努力に敬意を込めて深く敬意を表しますとともに、このたびの「受賞」を心からお慶び申し上げます。

木炭の最高傑作とも、木炭の芸術品とも称される田辺市がその発祥の地とされております紀州備長炭。木炭本来の目的とはまったく異なる「楽器」としての観点からとらえ、その特性を生かして、炭琴を地域づくりや地域文化の継承につなげるなど、10年に及ぶその活動は着実に成果を挙げ続けてあります。

昨年、高野・熊野地域がユネスコの世界遺産に登録され、人々の注目が俄かにこの地域に注がれた中、その歴史や文化や文化に根ざした、その土地ならではの特産品の存在は、地域にとって大きな魅力であります。また、そうしたものに新たな付加価値を加えることによつて、その魅力は更に倍増いたします。その上、その意図においても、紀州備長炭を活用した炭琴サークルの活動は、地元秋津川地区だけでなく、これら多くの人々を迎えることにもなる。地域全体にわたるたいへん意義あるものと思えます。

秋津川炭琴サークルの皆様方には、今回の受賞を一つのステップとされ、これからも活動の輪を広げられて、炭琴の澄みきつた音色に乗せて紀州備長炭がこの地域の魅力を、更には和歌山県の魅力を全国に向けて発信していただきたいと思います。心から願っております。

企画制作 / 和歌山毎日広告社

わたしたちは、ひと・夢・ま・ち・つ・く・り・を・応・援・し・ま・す

- 田辺市
- 田辺市議会
- 田辺市観光協会
- 田辺商工会議所
- (株)デンコライフ
- 南和総業(株)
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 御舞儀専門 沖(株)
- あなたの街の (株)オークワ
- オリエントホームズ(株)
- 看板ネオンサイン (株)サイコー
- おいしさと田舎づくり 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設(株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券(株) 和歌山支店
- ご舞儀専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- (株)松源
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 吉村眼科
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送

紀の名人録 ③

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリスタップしてお知らせする広報報告書です。

古道を訪ね 万葉歌をめぐる。



photographer/照井 四郎

大峯 登 Noboru Omine
熊野古道や万葉歌に造詣が深く、多くの人々を熊野古道や万葉歌碑に案内し、郷土の歴史・文化の素晴らしさを伝える。また、県内外のイベントに参加し講演をおこなうなど、地域の語り部の第一人者として地域づくりに貢献している。66歳。

「昭和四十年代の古いお話です。ある夏の
こと会社の仕事仲間たち二十名くらいが集ま
りましてね、みんなで大峯山に登るといっ
とで奈良県天川村にある洞川(とろがわ)と
いっところの旅館に泊まって朝方三時くらい
から登ると部屋で休んでいたんですよ。そ
うしてまずと宿屋の主人が音を立てながら血
相を変えて階段を駆け上がってきたんですよ
と、お話を聞いたのは今回の名人、大峯登
さん。下津町で語り部として活躍されている
人である。大峯さんはおかしそうに話を続
ける。

「宿屋の主人が顔を真っ赤にさせて怒って
いるんですよ。よく聞いてみますとね、宿帳
というものが何かコトが起ったときに
に緊急を知らせる宿帳に当たっては大切なも
んや。そんな大事な宿帳に大峯登(おおみねの
ぼる)などと不真面目な当て字を書くふざけ
た者がこの中にあると。さあ、いざという時
自分の名前を証明するのはむずかしいなあ。
にやにや笑ってみんなは助けけてくれないし、

あんなときはちょっと弱りました。本名だと判
ると今度は旅館の主人が平謝りに何度も謝っ
ておられましたからね、大峯さん。
「それで降る何度か大峯山には登りました
五回登ります(と)先達(しよせん)さんたち(と
いう称号をいただいたんですが、免状をもち
に行ったら、龍泉寺のご住職がまさかこ
のようなお名前の人が実際にいられたとはと
言っていたら、驚いておられました」と、少
し照れたような表情をみせながら大峯さんは
こちらを向いて笑った。

「私は地元企業の長く技術系の仕事に
就いておりましたけど、中学時代から歴史物
を読むのが大好きで、山岡荘八の徳川家康と
か司馬遼太郎の街道をゆくなど、そのような
地理や歴史の本ばかり好んで読んでおまし
た。いまも紀州語り部のメンバーですが、会
社勤めをしていた当時も土日の休みなどを利
用して、(と)依頼さえあれば和歌山県内(と)へ
でもガイドして回りました。語り部さんはせ
んぶで百名あまりでしょうか、(と)高齢の方も
多く、下津町で言えばいま現役でやっている
のは長保寺のご住職でもある瑞樹(たまき)
先生と私の二人だけです。」

「この長保寺というお寺がすごいお寺でし
てね、境内全域が国史蹟に指定されていると
ころです。山内(と)なら瑞樹先生にお任せ
するとして、それ以外周辺までふくめて案内
するときは、私とが海南の方が来られる場合
もあります。江戸時代初めに、初代藩主頼宣
公によって紀州徳川家の菩提寺として定めら
れたため、長保寺は徳川家が建立したお寺の
ように考える人も多いのですが、実はその創
建はさらに古くて平安時代の長保(年、ちよ
と)西暦千年のときに一条天皇より年号を賜
って始まった勅願の年号寺院です。」

「和歌山県下には国宝とされる建造物が七
棟ありまして、(と)このたび世界遺産に登録され
た高野山にある伽藍の不動堂と全剛三昧院の
多宝塔、根来寺の大塔、そして下津町には善
福院釈迦堂と、長保寺に三棟あります。三棟
とは長保寺本堂と多宝塔、大門です。この三
棟が国宝なんです。県下にある国史蹟建造物七
棟のうち四棟がこの下津町にあるわけです。
さ(と)申しあげれば、本堂、塔、大門がそ
うして国宝建造物であるお寺は全国(と)とい
えども他には奈良の法隆寺だけなんです。こ
のような寺院が京都とか奈良にあるなら別段
不思議もないのですが、歴史的に見ても
文化的に見ても、交通の発達した今でさえ
訪ねるのが大変なところになせ年号まで賜
った荘厳な寺院が建立されたか、瑞樹先生も書
いておられますが、そのことは和歌山の歴史
を考える上で深く掘り下げて考えてみれば面
白く、たいへん興味深いと思いますね。」

「(と)依頼を受ける場合、正規の手順として
は県の観光課から各市町村へ問い合わせがあ
ってそれぞれ目的に見合った語り部が決まる
わけですが、長い間たずさわってありますと
直接、個人や代理店を通じて依頼が入る場合
もあります。これは九州のグループですが、
別府港から船に乗って泉佐野に着き、そこから
バスに乗り換えて初回は泉佐野の山中深から
始まって最終回の熊野本宮大社まで長い道
りを一年間を十一回に分けて順々に案内さ
せていただいたこともありました。熊野古道
は人気ですからね、下津周辺にかぎってみま
して、藤代、塔下(と)つげ、橋本、所坂
一乗、蕪坂、山口と七つの王子跡を訪ね歩く
熊野古道コースをはじめ、コースに長保寺を
加えたり、和歌浦眺望や加茂川沿いを下って
善福院まで訪ねるコースなど、いろいろとリ
クエストに応えながら往古の熊野御幸道の雰
囲気をじっくり味わっていただけるよう(と)案
内いたします。」

「それと私は下津万葉歌愛好会というもの
をつつておりまして、万葉歌碑めぐりもコ
ースの一つに加えてあります。万葉歌四千五
百首、その中に紀伊国に属する歌が百首余
りあると言われ、さらに下津町に属する歌
は六百あるのですが、昭和四十六年に粟嶋神
社の境内に建立された方(かた)の万葉歌碑
をはじめ、大崎に二基、熊野古道の蕪坂(か
ぶらさか)に二基、さらに昨年十一月に仁義
(にぎぎ)の立神社境内にも二基万葉歌碑
を建てました。万葉歌というのは実は熊野古
道に負けないくらいファンも多く人気のある
スポットなんです。北陸の高岡市などは万
葉のまちとして売り出しています。これは万
葉歌の代表的な歌人、大伴家持が国守として
在任していたこと
ろです。高岡万葉
まつりでは、朗唱
というんですが、
二昼夜ぶつ続け
て万葉歌を次々
とつてゆけが催
されています。万
葉歌といえは和歌
浦あたりが有名で
すが、さらに詳し
く万葉を知りたい
と思われている熱心



大峯さんは下津町の万葉歌碑 5基のうち 4基の建立に関わった。



下津町は、北に藤白山脈、南に長峰
山脈が走り、西は紀伊水道に面して、
町の中央部には東西に加茂川が流れて
います。
気候は年間平均気温が約16度、年間
降水量は1,000ミリ程度で、黒潮
の影響により比較的温暖なことから、
昔からみかん栽培が盛んです。近年は
貯蔵した晩生みかんが、しもつ蔵出し
みかんとして好評を博しています。
下津には縄文後期から人々が住みつ
いたといわれ、天然の良港を持つこと
から、瀬戸内文化に接しその影響を受
けました。また、奈良平安時代から鎌
倉期にかけては南紀にぬける旅人た
ちの往来の地として賑わっていました。
このように非常に古い歴史を持つ下
津町には、国宝に指定されている長保
寺本堂、多宝塔、大門や善福院釈迦堂
など、貴重な建造物等が数多く保存さ
れています。さらに、世界遺産登録で
注目されています熊野古道の九十九王
子のうち、塔下王子跡、橋本王子跡、
所坂王子跡、一乗王子跡と4つの王子
跡が昔の風情を今に伝えています。
また、日本で現存する最古の詩集と
して有名な「万葉集」には、下津町に
関係する歌が数首あり、現在その万葉
故地(と)箇所(と)に万葉歌碑が建立されてお
り、県内のみならず、県外からも万葉フ
ァンが多数訪れています。

企画制作 / 和歌山毎日広告社

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 下津町
- 国宝善福院釈迦堂
- (株)松源 下津店
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 御舞儀専門 沖(株)
- オリエントホームズ(株)
- 看板ネオンサイン (株)サイコー
- おいし(と)田舎(と)ろ 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設(株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券(株) 和歌山支店
- こ舞儀専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 吉村眼科
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送

紀の名人録 ③

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートしてお知らせする広聴報告書です。

桃染め一色、シルクに映えて。



photographer/照井 四郎

百合生活研究グループ
右が坂ノ上道子さん、左が塩見とも子さん。桃山町の特産品「あら川の桃」の栽培作業で摘み取るつぼみや花びらなどを利用して「桃染め」を開発。研究の結果、ピンクやグリーンといった自然で優しい色合いを出すことに成功し、県外にも出品するなど、町の特産品として認められている。

「私たちは百合生活研究グループというんです。これまで県の普及事業の一環として生活改善グループという名前ですと来ていたんですが、平成十三年に変更されて生活研究グループとなりました」というメンバーの一人、坂ノ上道子さんは桃農家の主婦である。

「その前身であった生活改善友の会が婦人会からのメンバーで発足したのが昭和四十八年ごろかな。百合地区で当時二十七、八名おられたんですよ。塩見さんは二代目でお嫁さんとしてお姑さんからバトンタッチするあたりに参加なさったんです。そのうち生活改善グループと名前が変わり、いつか私たちが子育てやら何やらで活動を中断してしまつたんですが、普及員さんがもういっぺんやってみませんかと掘り起こしに来てくださったんです。それからすつとすつとね」と、坂ノ上さん。

「私一人とも粉河町から嫁いでまいりましてね、小学校、中学校、高校とみな同じ。私は坂ノ上さんの二年後輩です」と、にっこり笑顔を浮かべた塩見とも子さんは、

「生活改善の会やつたときはね、県の普及員さんがそれぞれ在所というが、私らやたら百合地区へ来てくださったって公民館などに皆あつまつて、きょうはお料理しましょか、手差しましょかと年次計画を決めてそんな風になつておつたんです。私ら桃農家ですけど、よその先進地というほかの農作物で成功なさつてる山間地へ研修に出かけたこともありません。しかし先ほど坂ノ上さんもおっしゃつたとおり、農家の環境は三十年で大きく変わりましたからね。生活向上への改善や普及活動はすでに終わりました。いまも指導は仰いでいますが、これからは自分で来たものを基礎にして何か一つのことをさらに追求して他の産地では真似できないものをこころから発信していくだけの力を持つて携わっていかんとためやと思つたんです」と、塩見さんは笑う。

「薔薇や牡丹の花とちがって桃の花は吹けば飛ぶような小さな花弁なんやけど、最初はなにもわかりませんでしょ、コンテナいっぱいにして思うたら遠くになるような作業でした。ちょうど収穫時期が重なつて忙しくなつてくる、姑さんに頼んで律儀に花びらだけを一枚一枚外してもらつてたんです。染めたいのはいいんやなあと思つたよ。それで染めてみたら何とグリーンがでたんですよ。つくりピンク色に染まると思つてましたよ、まったくがっかりでした。いまはね、花をせんぶ使つてます。おしへもめしへも薔薇（がく）も花びらもせんぶ、とつてきた花を決まつた水の中に入れて、それをお鍋にかけ、二十分から三十分ほど煮出すんです。このときにごくろい、それをきれいな布で濾して染液をくり、それへ布地を入れて、次に媒染液に移す。色止めとか色を引き出す作業です。布地はほとんどシルク、シルク百パーセント、シルクがいはん入りやすいですね。で、次の媒染にいったらグリーン色に変色してしまつたんで最初はびっくり仰天してしまつたんです。坂ノ上さんは面白そうに当時を振り返る。

「でね、桃だけでなく最初はいろんな草花を染めてみましたよ。ツバキやさんか、家のくまりに咲いた牡丹やカニサボテン。カニサボテンなんかは姑さんが大事に育てた花なんでちよつと気ひけましたけど、裏のアブラナの花なんかも試しました。見るものさわるもの、染まらんかな染まらんかな」と、塩見さんは少女のような目つきで楽しそうに笑う。

「念願のピンク色を出せるようになるまでに丸四年かかりました。これは工程がまったく違うんです。草木染めってちよつと色が褪せてくる。買つてくださった商品が色あせてクレームつよつた代物をつくらせつた。アカンからね、色素の定着が悪いんですね。その間いろんなものを染めていくつちに、袷紗なんですけど布地にほつほつ斑点が出てきましてね、これはえらいことになったよ。それで二人して布地仕入れる京都まで出向いて行つてそこである方いろいろ教えていただきました」と、塩見さん。

「それが大きな一つの転機でした。あかげさまでいまは思い通り、自分たちの狙つた色に染め上げることができるようになりました。知的所有登録もを行いました。いまはスカーフも袷紗も花柄敷きもコースターもぜんぶ桃染め一色、草木染めつて奥が深いね。桃の枝だけでも煮出せるし、花の種類にもよるんやけど、桃の花にも六種類ほどあつてそれぞれ色もさまざま。早生の白川白鳳などは赤も紅いですが、染めたら濃いピンク色になります。花の量にもよるしね、ちよつと薔がさつと出ている花から開き立て、あるいは散りまきわと咲き具合によつてもぜんぜん違つたよ。」

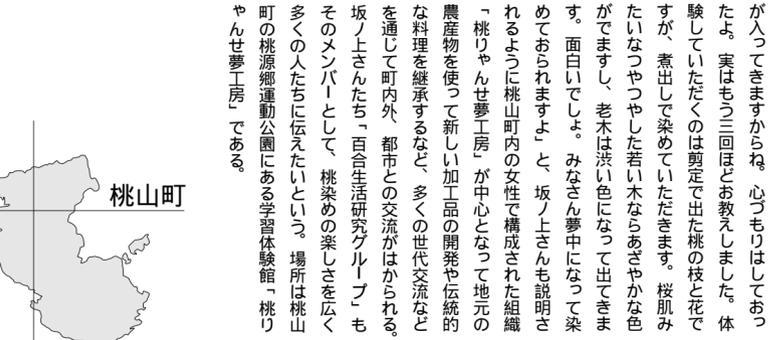
「こんなとから桃染めの体験

「あら川の桃」として、現在商標登録して、関西の市場でも人気が高く、すでにブランドが定着しています。このように立派な産地をこれから守り育てていくには、生産者による多岐な生産・加工・消費を考えた産地づくりにも関わっていく必要があります。中でも女性の知恵と工夫を活かした安心できる加工品の開発・研究がこれからの都市と農村を結ぶ大きな交流の輪として発展させねばなりません。このたび、百合生活研究グループの坂ノ上道子さん、塩見とも子さんは、丹精をこめて桃の栽培に打ち込んできた、シヤムや料理等の加工品作りを手掛けると共に、摘み取った花や剪定した枝を使つての「桃染め」の開発に意欲を燃やしています。そして少しでも多くの売り上げにつなげて行こうとする「女性起業家」としての活躍に、内外から高く評価され、このほど和歌山県知事から「紀の人」賞を受賞いたしました。このように女性による「起業家」として自立できるような農業こそ、付加価値を求め高い農業といえるのではないのでしょうか。本町もこれを機会に桃山の特産品の作り方を体験して頂くことと、桃源郷運動公園内に学習体験館を設立いたしました。ここでは「桃染め」や「桃シヤム」「味噌」「こんにゃく」つくり等体験して頂き、少しでも多くの人たちに桃山町を知ってもらい、都市との交流を図り、まちづくりの活性化を目指して行きたいと考えております。

「入ってきますからね。心づもりはあつたよ。実はもう三回ほどお教えしました。体験していただくのは剪定で出た桃の枝と花ですが、煮出して染めていただきます。桜肌みたいなつやつやした若い木ならあざやかな色がでますし、老木は淡い色になって出てきます。面白いでしょ。みなさん夢中になって染めておられますよ」と、坂ノ上さんも説明されるように桃山町内の女性で構成された組織「桃りやんせ夢工房」が中心となつて地元農産物を使って新しい加工品の開発や伝統的な料理を継承するなど、多くの世代交流などを通じて町内外、都市との交流がはかられる。坂ノ上さんたち「百合生活研究グループ」、そのメンバーとして、桃染めの楽しさを広く多くの人たちに伝えたいという、場所は桃山町の桃源郷運動公園にある学習体験館「桃りやんせ夢工房」である。

「二百年の歴史と伝統を持つ本町の桃栽培は、「あら川の桃」として、現在商標登録して、関西の市場でも人気が高く、すでにブランドが定着しています。このように立派な産地をこれから守り育てていくには、生産者による多岐な生産・加工・消費を考えた産地づくりにも関わっていく必要があります。中でも女性の知恵と工夫を活かした安心できる加工品の開発・研究がこれからの都市と農村を結ぶ大きな交流の輪として発展させねばなりません。このたび、百合生活研究グループの坂ノ上道子さん、塩見とも子さんは、丹精をこめて桃の栽培に打ち込んできた、シヤムや料理等の加工品作りを手掛けると共に、摘み取った花や剪定した枝を使つての「桃染め」の開発に意欲を燃やしています。そして少しでも多くの売り上げにつなげて行こうとする「女性起業家」としての活躍に、内外から高く評価され、このほど和歌山県知事から「紀の人」賞を受賞いたしました。このように女性による「起業家」として自立できるような農業こそ、付加価値を求め高い農業といえるのではないのでしょうか。本町もこれを機会に桃山の特産品の作り方を体験して頂くことと、桃源郷運動公園内に学習体験館を設立いたしました。ここでは「桃染め」や「桃シヤム」「味噌」「こんにゃく」つくり等体験して頂き、少しでも多くの人たちに桃山町を知ってもらい、都市との交流を図り、まちづくりの活性化を目指して行きたいと考えております。」

企画制作 / 和歌山毎日広告社



桃山町長 山下 忠男 さん

- わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します
- 桃山町
 - 桃山町議会
 - 農事組合人 桃山町植木組合
 - 津田肥料店
 - 林工業所
 - 有田川温泉 鮎茶屋
 - 御舞臺専門 沖(株)
 - あなたの街の (株)オークワ
 - オリエントホームズ(株)
 - 看板ネオンサイン (株)サイコー
 - おいし〜田舎〜 三幸農園
 - 外断熱の家 三幸建設(株)
 - (株)サンレックス
 - (株)島精機製作所
 - (株)テレビ和歌山
 - 野村證券(株) 和歌山支店
 - ご葬儀専門 (株)橋爪屋
 - 紀三井寺 はやし
 - (株)松源
 - (株)宮井新聞舗
 - 本家 宮坂仏壇店
 - 吉村眼科
 - (株)和歌山印刷所
 - (株)和歌山放送

紀の名人録 ③

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り、そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートアップしてお知らせする広報報告書です。

熊野の自然に魅せられて。



photographer/楠本 弘児

中 篤 章 和 Akikazu Nakajima

植物分類地理学を専門とし、熊野地方に自生する植物類の研究を続けるほか、天然記念物「浮島の森」の研究や植物の方言名の研究などに取り組み、その豊富な知識から「歩く植物図鑑」とよばれている。7歳。

中篤先生は熊野植物研究者である。案内されて先生と「浮島の森」に行く。「新宮蘭沢（いのさわ）浮島植物群落」と呼ばれるこの小さな森は周辺の市街地とはかなり趣きが異なっており、まるで異界からの奇妙な贈り物のように鬱蒼として水とそこにあった「浮島の森」は文字どおり沼地に浮かぶほぼ方形の島で、長さ八十五メートル、幅六十メートル、総面積およそ五千平方メートルほどの大きさである。森の中には遊歩道が設けられていた。強く足踏みると鳥がわさわさとして揺れ動き、樹木の梢が音をたてて、「なせ浮いているか、その成り立ちについてはいろいろ説がありますが、もともとあった沼地の水草が枯れて、それが漂っているうちにその上にまた草が生え、長いことかかって植物の遺骸が積もって出来たであろうと推察されます。水温が低いので完全に分解しない。で浮いている厚いところで六十センチメートルくらいはあるでしょうが、さらに沼の底には泥炭の分解物が沈んでいます」と

中篤先生。飄々とした語り口のなかに専門家としての確信が感じられる。その知識の豊富さから「歩く植物図鑑」と中篤先生を称する人もいる。「浮島自体は珍しいことではありません。各地にあります。京都の深泥池にもあるし、三重県南島町にもある。しかしこの浮島が注目されるのは四百種は超えるであろう植物の種類の多さと、さらに寒暖両性の植物が混生していることでしょう。鳥が飛んできていろいろな種を落とす行きよる。スキ、ヤマモモ、イヌウメドキ、コハンモチ、タイム、シタバナといった木々は付近のそれとそれほど変わるものではありませんが、樹下の地表にオオミスズコケが生え、北方系のヤマドリゼンマイが自生するそばで、南方系のテッポウシタミミなどの植物が混生しているのがたいへん珍しい。全国的にも珍しいでしょう。国の天然記念物に指定されたのもこのあたりの希少性が認められたからでしょう。オン浮島を歩くというこんな草木と出会え、オン

ツツジの可憐な朱紅色の花が美しい。これがオンツツジで、メツツジは四国のほうで咲いてますと、中篤先生。本当ですかと質問すると、本当ですとまた質問するので、本当ですかとまた質問する。とあわせたように中篤先生も本当ですと小さな声で答えてくださった。ホルトノキという名前前の木は、平賀源内が本種を果実の木の様子で呼んだところから名づけられたとか、春先に紅赤色の若葉が芽吹くアカメカシワは柏の葉っぱと同じく緑の成葉に食べ物をのせたり、包んで蒸したりするのに用いられ、その葉や樹皮は古くから消炎鎮痛に効く薬草として珍重された等々、矢張り早に次々と近くに生えている草木の葉っぱをつまんだり、指したりしながら面白く解説を加えてくださった。

「ちょっとお聞きしたいんですけどこの植物はなんですか、先生」とそこに偶然居あわせた顔なじみの中年女性からの質問に「カササゲです。ミノスケともいいますけど、この草の葉を乾燥させて、昔の頃は藁（わら）のやすげ笠をつくったんですよ。浮島の湿地に群生して生える緑の草を眺めながら中篤先生は丁寧に答えておられた。一時期、周辺の市街地で丘陵からの天然水が遮断される一方で、家庭排水が流入してき



浮島の森

企画制作 / 和歌山毎日広告社

て浮島の森全体が死滅する危険性もあつたといふ。しかし河川からの導水が実施されて真つ黒に濁っていた沼の水質が大きく改善された。沼の底が見えるようになり水コケが増殖するなど、今も湿地や森の再生は進んでいる。新宮市文化財審議会の委員長である中篤先生はその保護推進派の一人である。「那智原始林とが干穂ヶ峰の裏手にある照葉樹林などは学術上から見てほしいへん備備のある素晴らしい原生林です。ほかに熊野速玉大社の境内に立つナギの木などが有名ですが、以前の台風十九号で倒れまして、樹齢八百年ともいわれ、このまま放つておいて腐って枯れたら大変ですから補強して欲しいです。なんと私の目の黒いうちは枯れんといひたい。ナギの木はたくさん平行脈が走っているから引張つても簡単にはちぎれない。チカラシバと別名もあるほどです。このへんでは女性たちが結婚するとナギの葉を鏡の裏にあさめて夫婦円満を願ったという古い慣習がありました。今はそんなことする特殊な女性いなくなつたけどな」といって可笑しめに先生は笑った。「ナギは風のない風（なぎ）に通じる。海の神さまと関係あつたと思います。こころはみな植えたもんです。西日本にはナギが自生していません。僕が想像するにこのあたりの人の祖先はたぶん南の方から来たんじゃないかと」



新宮市



新宮市長 上野 哲弘 さん

「世界遺産に登録された熊野古道その歴史だけがちやほやされているけれど、裏づけという古くその基礎になったのはやはり熊野の自然の魅力やと僕は思う。平安末期ともなると皇族や公家たちが京都からこの地へ続々とやってきますが、言い方悪いかも分かんないけれど、あれって避暑旅行でしょう。調べてみたら十一月から二月、三月あたりまでが庄園的に多い。都では木枯らし吹いて雪が舞つてくる。木々の葉が落ちてスカツとした寒々しいまの風景と比べて、こちら熊野の森は雑木か、ツバキなど常緑樹ですからね。そういうたもが生命力にあふれ鬱蒼と生い茂つている。荘厳というか、都人にとっては神秘的やたらやないでしょうか。今はやりの言葉でいえば森林浴でしょうが、森の中を歩いてみると気持ちが自然と統一されて浄化されて気持ちよくなる。それが蘇り（よみがえり）の正体やと思うのです。熊野が蘇りの画であったという事実はこの大自然に依るところが大きいんですよ。温暖多雨の熊野の地はまたシダ植物の繁殖に適した地でもあつた。日本列島の中でシダの種類が多い屈指の観察地である

わたしたちは、ひと・夢・まちづくりを応援します

- 新宮市
- 新宮市議会
- 新宮市教育委員会
- 新宮市観光協会
- 社団法人 新宮市社会福祉協議会
- JAみくまの
- 世界遺産 熊野速玉大社
- 清酒 熊野三山尾崎酒造(株)
- 高田ウーロンティー 雲取温泉
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 御舞儀専門 沖(株)
- あなたの街の (株)オークワ
- オリエントホームズ(株)
- 看板ネオンサイン (株)サイコー
- おいしき田舎ウーロン 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設(株)
- (株)サンレックス
- (株)島精機製作所
- (株)テレビ和歌山
- 野村證券(株) 和歌山支店
- ご葬儀専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- (株)松源
- (株)宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 吉村眼科
- (株)和歌山印刷所
- (株)和歌山放送

紀の名人録 35

私たちに夢と活力をあたえてくれる「ひと」との出会い、共感、そしてふるさとへの愛着と誇り。そんな想いをこめて創設された「紀の人」賞の受賞者たち。この紙面は、そういったひとびとの活躍ぶりをリポートしてお知らせする広聴報告書です。

あやつる妙技 鵜匠と鵜の一体感。



photographer/山口 隆章

岩上 亨 Toru Iwakami
自ら川に入り鵜を操る全国唯一の「徒歩漁法」を受け継ぐ数少ない鵜匠であり、鵜匠のリーダーとして、後継者の指導にあたり、地元小中学生への体験学習を開催するなど、伝統文化の継承に力を注いでいる。7歳。

祖父の代から数えて三代目。岩上亨さんは有田川きつての名人と呼ばれる現役の鵜匠である。長男の芳仁さんはミカン農業を営みながら四代目を継ぐ。若上さんは有田川の鵜匠は、自ら川の中に入って一羽の鵜を巧みに操りながらアユを捕る「徒歩（かち）漁法」という日本で唯一の伝統的な漁法を守ってきた。「かつては、高野のふもとから釜屋、吉備、有田、箕島の河口あたりまで有田川流域には九十人からの鵜匠があつて、アユ漁一本で立派に食べていたんや。けど今は私入れてせんぶで五名。たまたま私んころはいちばん上のせがれが継いでくれましたけど、こんな実入りの少ない商売、割りにあわんからね、なり手があらんのですわ」と口をたたく焼けたような顔で、かちやちやに話すが、若上さんはつけかからずじやいてみせた。

「このひとやめたらつづけてしまふよ、いちばんの長老さんでね、われわれ後輩のお手本ですわ」と笑いながら話してくれた。たのきは鵜匠仲間吉田繁彦さん。口をたたくのが苦手という若上さんの助っ人としてインタビューに参加していただきました。

そもそも有田川の鵜飼は室町時代の初期、木曾川の上流犬山で鵜をあやつる漁師を石垣城主（現金屋町）伊予守持秋の子、石垣左京大夫七郎教重が連れてきたのが始まりと伝えられる。そのち紀州藩が有田川を御用の川としてアユ以外の漁を禁止し鵜飼を長く庇護してきた経緯があつた。昭和三十七年、有田川の鵜飼は県の無形文化財に指定される。「京都や長良川の鵜飼は船つかい云うてね、船の上から六羽、ないしは七、八羽放して使つんや。有田川はマンツーパードよ」と吉田さん。

「長良川などはね、鵜をせんぶよそから購入してきますんや。有名なところでは茨城県日立市。ここは捕獲専門。鵜飼サミットいうてね年一回いっぺんずつ開催されるんや。岐阜市や山梨の笛吹市、広島三原市、大分の日田市、愛媛の大洲市など鵜飼開催地の十三の自治体があつて、シンポジウムや交流会が開かれるんやが、十三河川のなかで日立市も入つてます。今年には木曾川の犬山でサミットがあり、私も行ってました」

日本独自の伝統文化である鵜飼を伝承していくために「すばらしいか、集客方法や後継者問題など」をめぐって同サミットでは真摯な意見交換が交わされたという。

「よその河川は観光主体やけど、つちは昔からあくまで漁が中心や。渡世ですわ、それへ観光がちょつと加わつたんや。それと有田の鵜匠はね、みな自給自足。鵜の捕獲にはじまて捕獲の道具や籠（かご）、首綱（くびたま）、火杖（ひすえ）など鵜飼で使う道具もせんぶ鵜匠が手配してこらえるんや。鳥足手かて自分らでつくると、松明（たいま）も、昔はね戦時中、松根油いうて飛行機（ひこうき）の燃料に使われたんやけど、その松の根っこを松明に使つんよ。そりや肥料もがすがすが、これまたひと苦勞なんや。と人なつこい顔で若上さんは苦笑しながら大きく首を横にふつた。

「六月から八月いっぱい、いちあつ九月下旬までが漁の期間や。とてますけど、私ら教えてもろたころはね、十月かかっても漁やつてましたんや。なれ鵜の季節、誰かひとりに注文入ればみなで漁するんやが、十月の川はびつくりするほど冷たいよ。綿入れジャンパー着こんで川の中に入った。ここだけの話、鵜飼だけで高給取りの年取くらいあつたんや。稼いだよ、鵜一羽が但馬牛一頭分と同じ値打ちあつたんや。と若上さん。

「使つんは海鵜や。今年のみなべと由良湾と、捕獲許可いりますから、役場でせんぶ申請できるよ。うたけど昔は環境庁の直轄でした。農務所まで出向いてつたよ。船頭さんの都合で捕獲する場所も変わるけど、船頭さんに渡りつけて海の鳥まで船出してもらつんよ。渡り鳥やからね、鵜は、誰もよついかん絶壁みたいな岩場に一夜の宿ちゅうんや。鳥屋（とや）（こしらえて休息する。オトリをたて鳥もち仕掛けでも頭ええわなかなが捕れんぞ」と吉田さん。

「捕まえてきたらはじめはこんな大きなプールで水浴びさせる。泳がせる。野生の鳥やからね、噛んでくるし、嘴（くちばし）でつつくし、耳噛まれたり鼻つつかれたり、油断してたら口元にもスパッとくるから。有田の鵜匠なら顔に二つ三つの疵（きず）くらいあるよ。噛まれて逃げようとする鵜をなんとかさ着かせ、この手がせつたい悪さ（わるさ）せんことを鵜に徹底的に教え込むんや。三日あつたら慣れら」と若上さんは平然と言つてのけた。

「昼間は日光が全体に明るいでしょう。昼間の魚は逃げるん速い。夜の場合、松明の明かりだけ。ほいで夜、漁するんや。なぜ松燃やすんや。川の魚はその明かり見ると逃げる隠れるという習性がある。海の魚は明かり見たら寄ってくるけど、松の明かりは電気。それとちこつて川底まで突き抜けて見える。それくらい松明は明るいんや。水中で魚めがけて鵜はよつていけませんや」と、鵜飼の話をするのが嬉しくて仕方がない様子で吉田さんは楽しそうに話して下さる。

「鵜がまっすく向いて走りたいたんやけど、いくんかは手綱の手取りでせんぶわかるな。じも持つその手の位置しつかりきめたら動かしたらあかん。手のひらにのせとだけ、きつ持つたらあかん。ちよつと引き気味に持つんや。で、魚見つけたらびゅーと鵜が前へでよ。びゅーとびゅー。

「物いわん生きもんで生きもん捕まえる。こんなおもしうい漁はない。大きな石がころころあつて川の状態がもつと良かったころは、まるまる太つてサバかと思つていらいのアユあつたよ。冗談やなく、鵜はかしくいから、嘴（くちばし）はして魚くわえて両の羽で抱きかかえるよつにして水の中からすうと上がつてきますよ」と若上さんは目を細める。

「有田川のアユいっぺん食べたらよそではちよつと食べれんや。よその河川や養殖もんとはせんせんちがいます。焼いたらすくわかるよ。うちのアユは脂のつって焼いたらパリッとして皮の色がシロのオスメたいに金色に輝く。よそのんは灰色がかった脂汁がでる。皮と身のあいだに空気が入つてぶつと風船みたいにふくれよ。うちのアユは皮と身がびしゃつとくっついて身がはくはくしてつてそりや旨いで」と、オトリアユの味自慢をし始めた吉田さんの話を若上さんはニコニコ笑いながら楽しそうに聞いていた。

「鵜匠自らが川の中に入り、一羽の鵜を操り、流れをさかのぼつて行く、徒歩（かち）漁法」であります。若上亨氏は、16歳から鵜飼を始め、25歳までの修行期間を終了後、独立して鵜匠となり、今日に至り活躍されておられます。



現在数少ない鵜匠の一人である若上亨さんが、今回和歌山県ふるさと名人「紀の人賞」を受賞されましたこと、つきましては心からお慶び申し上げます。有田川の鵜飼は、和歌山県の無形文化財に指定されており、全国で唯一鵜匠自らが川の中に入り、一羽の鵜を操り、流れをさかのぼつて行く、徒歩（かち）漁法」であります。若上亨氏は、16歳から鵜飼を始め、25歳までの修行期間を終了後、独立して鵜匠となり、今日に至り活躍されておられます。

徒歩漁法は4〜5人が一組となり鵜を操つて鵜を獲る漁法であります。同氏はその中でリーダー的存在であり、5月下旬から9月中旬まではほとんど毎日吉備町を中心に金屋町から有田川流域の川に入り活動されており、有田川の夏の風物詩となっております。

数年前まで9人だった鵜匠も現在は5人に減少している中、同氏は後進の指導にも非常に熱心で、こ子息も後継者として育成し、現在も川面を照らす松明や鵜の餌、使用具などを一つひとつ手作りで作り、また、毎年有田地方の小中学校の生徒を対象に体験学習を実施するなど、有田地方の誇る伝統文化の継承に力を注いでおられます。

今回の受賞を契機として、健康に留意され今後益々ご活躍されることを祈念いたします。

企画制作 / 和歌山毎日広告社



吉備町長 中山 正隆 さん



わたしたちは、ひと・夢・まちづくりにを応援します

- 吉備町
- フューナラブルナ (株)有田葬祭
- （株）カスターハウジング
- （有）紀州煙火
- （協）中紀環境科学
- （株）松源 吉備店
- 有田川温泉 鮎茶屋
- 御舞儀専門 沖（株）
- あなたの街の (株)オークワ
- オリエントホームズ（株）
- 看板ネオンサイン (株)サイコー
- おいし田舎ウーロ 三幸農園
- 外断熱の家 三幸建設（株）
- （株）サンレックス
- （株）島精機製作所
- （株）テレビ和歌山
- 野村證券（株）和歌山支店
- ご舞儀専門 (株)橋爪屋
- 紀三井寺 はやし
- （株）宮井新聞舗
- 本家 宮坂仏壇店
- 吉村眼科
- （株）和歌山印刷所
- （株）和歌山放送